



人文資料形成史における博物館学的研究 III

— 根岸友山・武香旧蔵資料の研究と公開 —

2023



人文資料形成史における博物館学的研究 Ⅲ

－ 根岸友山・武香旧蔵資料の研究と公開 －

2023

近代博物館形成史研究会

例言

1. 本報告は令和3(2021)年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究(C)(令和3年~令和5年)課題番号21KK01002「人分資料形成史における博物館学的研究 - 根岸友山・武香旧蔵資料の研究と公開 -」(代表内川隆志)の令和5(2023)年度の研究成果報告書である。
2. 研究対象としている根岸家の現当主である根岸友憲氏には、全面的なご協力を賜った。
3. 研究組織(近代博物館形成史研究会)は、以下のとおりである。

研究代表者 内川 隆志(國學院大學文学部教授)

研究分担者 三浦 泰之(北海道博物館学芸主査)

研究協力者(五十音潤順)

新井 端 (元熊谷市史編さん室長)

五十嵐 睦美 (北海道立帯広美術館副館長)

Ilona Bausch (ライデン大学日本研究科講師)

大田 陽子 (一級建築事務所COCOON 設計室代表)

徳田 誠志 (関西大学客員教授)

金出 ミチル (東京藝術大学大学院非常勤講師)

鎌形 慎太郎 (國學院大學大学院博士課程前期修了)

重田 正夫 (熊谷市史編集委員)

鳥越 多工摩 (國學院大學研究開発推進機構客員研究員)

成澤 麻子 (元公益財団法人静嘉堂文庫司書)

長谷 洋一 (関西大学文学部教授)

深澤 太郎 (國學院大學研究開発推進機構准教授)

深澤 靖幸 (府中市郷土の森博物館館長)

古畑 侑亮 (一橋大学大学院非常勤講師・國學院大學研究開発推進機構ポスドク研究員)

森田 安彦 (熊谷市江南文化財センター)

山本 命 (松浦武四郎記念館館長)

4. 本書の編集は、内川隆志が行った。
5. 本書を編集するにあたり下記の諸氏(五十音順)、機関よりご協力を賜った。心より御礼申し上げる次第である。

植田真(株式会社パスコ)・上條信彦(弘前大学教授)・小池茜(國學院大學学生)・

篠田浩輔(府中市教育委員会)・関根達人(弘前大学教授)・高橋桃子(茅ヶ崎市教育委員会)・

富山悠加(國學院大學大学院博士課程前期修了)・

樋口典昭(奈良国立文化財研究所都城発掘調査部考古第二研究室 アソシエイトフェロー)

目次

例言	i
弘前大学所蔵「成田彦栄氏旧蔵『蓑虫山人筆 埴輪写生図』について 新井端	1
はじめに	1
1 蓑虫山人と根岸武香	1
2 蓑虫山人は青山へ来たのか	2
3 描かれた埴輪について	2
4 写生埴輪の実態	4
小 結	15
『榎園好古図譜』と柏木貨一郎 内川隆志	21
はじめに	21
1 『榎園好古図譜』の内容	21
2 『榎園好古図譜』第2冊・第3冊と『石器寫図』との比較	23
おわりに	26
根岸家古物陳列場の建築について 金出ミチル	29
はじめに	29
1 建物の特徴	33
2 陳列場の造作	41
3 塀を改造して建てられた陳列場	41
4 復元考察	43
埼玉県熊谷市中条古墳群出土埴輪の考古学史的意義 徳田誠志	45
はじめに	45
1 『埋蔵物録』に残された記録	45
2 神田孝平が入手した埴輪について	47
3 人物形埴輪の研究史	51
まとめ	52
『榎園好古図譜』所載の中世在銘金工品 深澤靖幸	55
はじめに	55
1 「武州梶田神明」銘の懸仏	55
2 「上総州伊北庄中郷」銘の鱗口	57
おわりに	60
京都の学塾山本読書室と“古物蒐集家”松浦武四郎 三浦泰之・山本命	63
はじめに	63
松浦武四郎と山本読書室について	63
山本読書室資料にある松浦武四郎関係資料について	64

弘前大学所蔵「成田彦栄氏旧蔵『蓑蟲山人筆 埴輪写生図』 について

新井 端

はじめに

弘前大学博物館に明治時代に描かれた埴輪群像の一幅があるとの情報を國學院大學博物館の内川隆志教授より知らされた。題材の埴輪は関東地方出土の埴輪が主体であり、武蔵国大里郡青山村（当時）の好古家として知られた根岸武香の蒐集していた多くの埴輪が描かれていたことに興味が湧いた。考古遺物の絵画資料として、また好古家間の交流を考える新資料の発見であり、作画者の蓑蟲山人（以降「蟲」は「虫」と略記する）にも関心が深まった。描かれた人物埴輪は何れかを特定し、何時何処でこの画軸を蓑蟲山人は描くことができたのかを中心に考えながらこの作品を紹介したい。幸運なことに内川隆志教授・関根達人弘前大学教授・井上裕太弘前学院大学講師の各氏に様々な便宜をいただき弘前大学にて資料の閲覧・検討のうえ小考をまとめることができた。各氏には厚くお礼を申し上げたい。なお、本稿はともに資料を閲覧・検討をいただいた関西大学徳田誠志教授と共働にて成稿したものです。

1 蓑蟲山人と根岸武香

蓑蟲山人こと土岐源吾（1836～1900）は美濃国安八郡結村（現在の岐阜県）の素封家に誕生したが家運の衰退により、14歳で郷里を離れて以来48年間余、九州から岩手・秋田・青森を遊歴し作品を製作していた放浪の画家といわれる。滞在地の有力者や寺社などへの寄宿を繰り返し長期に及ぶこともあった、そこで見聞した生活や風土などを伝える「絵日記」を製作しており民俗学研究の貴重な資料ともなっている（文32.39）。考古遺物に興味を深めた契機には、明治19（1886）年青森に来県した同郷人でもあった神田孝平（当時文部技官）と出会い古代石器の蒐集依頼を受けたことらしく、以降縄文時代遺物の蒐集に強い関心を向けている。翌20年には雪解けを待って4月早々に亀ヶ岡遺跡の発掘を始め大量の遺物を蒐集し、同年8月には上京のうえ神田孝平に報告している。次に秋田でも蒐集をはじめ、明治21（1888）年には秋田県長者屋敷遺跡での石器採集を神田孝平に報告するなど蒐集活動は北奥羽地域に及んでいたようだ。なお、亀ヶ岡遺跡の発掘状況については東京人類学会雑誌に神田孝平を介して紹介され（文8・9）、その後の発掘を進展させる契機となった。好古家蓑蟲山人の一面を見せるが本来は絵師であり茶人であった文化人として歓迎され、書画会や古物の展覧会を通じて多くの作品を滞在先に残した（文35・45）。明治29（1896）年には秋田を引き払い郷里の岐阜に戻り、明治33（1900）年に名古屋で死去した。自身の蒐集品を収蔵する博物館建設を構想していたという（文50）。その蒐集資料の多くは散逸した（文44）。

根岸武香（1839～1902）は武蔵国吉見郡甲山村（明治期には大里郡青山村に編成、現・埼玉県熊谷市）の素封家に誕生し、幕末期の名主から明治期の地方自治を担い縣議會議員から貴族院議員に任命された政治家である一方、考古資料から古銭・古文書類まで幅広く蒐集し私設の陳列室を私邸内に設置した好古家としても、また新編武蔵風土記稿などの出版を事業化した編集・出版者などいくつもの顔を持った文化人であった（文38）。父友山・武香の二代にわたり根岸家の蒐集した考古資料には亀ヶ岡遺跡出土の土偶・土器をはじめ縄文時代の土器・石器や古墳時代の埴輪・玉類など多種多量の遺物や図譜類を所蔵していた。考古資料の多くは明治初年から明治30年代までに集中していたようで、中条古墳群や三千塚古墳群などの近郷近在の出土品が主体をなす。明治10年に黒岩横穴の発掘、明治20（1887）年には坪井正五郎に

協力して吉見百穴（両所、現・吉見町）の発掘を実施し、その後の保存活動を進め文化財保護に尽力した（文 38・49・51）。根岸武香と蓑虫山人はほぼ同時代人であり、直接・間接に好古家の接点があったのかもしれない。

2 蓑虫山人は青山へ来たのか

蓑虫山人は各地を遊歴する中で青山の根岸家を訪問しただろうか。根岸家所蔵品の埴輪を実見してこの画軸が描かれたのだろうか。根岸家の記録や蓑虫山人の残した絵日記など、両者の接点を示す記録や資料は今のところ知られていない⁽¹⁾。両者を結ぶ人物には日本考古学研究の先駆者とされる神田孝平を挙げることができるので、神田孝平と根岸武香と蓑虫山人の関係性は重要である。蓑虫山人と神田孝平とは前記したように資料蒐集面での連携があった。明治 19 年に神田が青森を訪れた際に蓑虫山人に面会して以降、関係が続いたようだ。一方の根岸武香とその父友山と神田孝平は根岸家の蒐集資料を神田の刊行した「日本大古石器考」（文 6）に多数掲載するなど好古家として交流が早くからあった⁽²⁾。神田が会長となって発足した「東京人類学会」には根岸武香は早々に入会している⁽³⁾。また、根岸が蒐集にかかわった中条古墳群出土人物埴輪の一部（写生図 19・26）（文 7・12）が神田の所蔵するところとなった経緯には根岸の関与が想定されるなど、古物会や学会を通じての好古の交流は密であったと思われる。

三者が同時に会する場面は想像でしかないが、蓑虫山人は明治 20 年には蒐集報告のために上京しており、中条古墳群出土人物埴輪を知る機会を得たであろうし、当時人物埴輪を多数所蔵していた根岸家の存在も神田から知っていたのではないかとの推測は許されるだろう。東京での滞在は 20 日余りだがその間の動向は知られていない、神田との懇談以外には古物会や書画会への出席、或いは作画のための遊歴などがあったかもしれない⁽⁴⁾。当時、上野―熊谷間の鉄道は通じており日帰りも無理ではない。

3 描かれた埴輪について

蓑虫山人の描いた「埴輪写生図」（一2）は弘前大学博物館で熟覧し、収蔵への経緯や作品の状態を確認させていただいた。本作品は弘前市在住の成田彦栄氏旧蔵資料の一つで『蓑虫山人之筆 埴輪写生図』の題がある。成田氏の蒐集資料は青森県域を中心に縄文時代遺物の一大コレクションを成しており後晩期資料の質量とも群を抜いている。その中に唯一蓑虫山人のこの埴輪絵が含まれていたのである。来歴は不詳のままだが、蓑虫山人の作品に埴輪を題材とする作例はほとんど知られておらず大変珍しく、群像の人物埴輪は関東地方出土埴輪が主体であることも特徴である（文 48）。

軸の装丁は当初のままと思われる、軸背に「蓑虫山人之筆 埴輪写生図」の墨書題字がある（一1）。画面は幅 67.4cm×縦 114.7cmを測る。紙本に墨画細筆で灰色・朱の淡彩を加筆し、ほぼ画面いっぱいには 28 体の人物埴輪を下方前面から上方奥へ 3～4 体を横並びにして 8 段ほど重ね描いている（一2・3）。

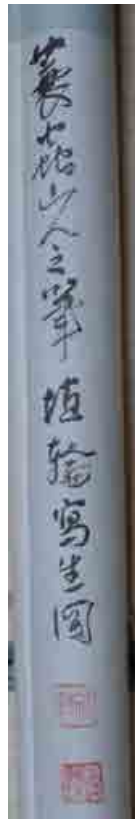
前面の埴輪が背面の埴輪に上乗り重なっており、前面を先に描き背面埴輪は前面埴輪の輪郭を避けて描いている。埴輪の肩、頸、割れ口等の変換点は墨継が目立つが、腕や顔の曲線は一気に引かれる例が多く、あまり迷いが見えない。埴輪の表情に特有な孔目表現は採らず、細く小さい杏形の墨点を置く。一体一体に筆数は多くはなく全体を短時間に描いたと思われる。蓑虫山人の通例の画法と思われる（文 33）。

埴輪頭部の位置を見ると左下方より右上方向に配列する構図が意図され、個々の埴輪が安定した位置に据えられ、どの埴輪が中心というわけでもなく全部の埴輪に視線が向けられるようになっている。蓑虫山人の他の作品に通例な個々の遺物（本図では埴輪）は大まかに簡略化され印象を映すように描かれる。模写図や実測図とは異なる描き方で推測や想像による簡略や補筆が加えられた写生画となっている。そのため本図の埴輪の何体かは対象の埴輪を特定することは困難であった。次節では作画の対象となった個々の人物埴輪を検討する。



蓑虫山人
(文 32 より転載)

蓑虫山人之筆 埴輪写生図 印 印



1. 軸背 墨書

2. 「埴輪写生図」画面



3. 1~28 対象番号



4. 1~28 埴輪の典拠図・写真

図1 蓑虫山人・埴輪写生図

4 写生埴輪の実態

本節では描かれた埴輪の原資料を特定し、その埴輪が何時何処で発見され、如何に報告又は保管されていたか等を蓑虫山人の活動時期の中で考えてみることにする。好古家にとっての埴輪という考古資料への関心の広さや興味の深さも知られようか。以下、28体の埴輪について模写図や古写真等のアーカイブ資料や現存埴輪の来歴等から照合作業を行った。それら資料の特徴は、何れの資料も明治30年までには模写図や刊本などで知ることができた資料である(一4)。発見間もない資料も含まれており、それは根岸家にかかわる埴輪群が中心となっていることである(表1)。

第1表には写生図から28体の人物埴輪を番付抽出し属性をまとめた。第2～8図に各埴輪図を並置して比較照合している。表と図の埴輪番号は連動しており、典拠図等はA～Eの記号で示した。

なお、典拠図の区分、Aは「蓑虫山人筆【埴輪写生図】」一弘前大学蔵一文48」、Bは「【土器諸図】一国会図書館蔵一根本武香旧蔵一文55」、Cは「【榎園好古図譜】一國學院大学蔵一根本武香旧蔵一文52」、D1は「【東京人類学会雑誌】一第207号の掲載図一文16」が中心となっている。B・C・D1図は加彩色され細部まで細かく描かれている。D2は「【日本考古提要】一文11」、D3は「【葬礼私考】一文2」、D4は「【日本考古学】一文13」、D5は「【桂林漫録】一文1」、D6は「【発掘埴輪図】一文27」、D7は「【成山帖】一早稲田大学図書館蔵一文56」、D8は「【發雲余興】一文3」、D9は「【集古図】一文54」、D10は「【英語版一日本考古学一文5】」、D11は「【古代刀鋒図説】一文4」、D12は「【古図類纂】一文27」である。E【写真資料】は、E1は「【日本埴輪図集】一文19」、E2「【英語版一日本考古学一】一文5」、E3は筆者撮影、文献14.18.20～25を参照し補足している。なお、【土器諸図】は【古器物図】一ハニワ出土稿(東京帝室博物館史伝部編)⁽⁵⁾の根岸家に残された模本と考えている(文49)。

各埴輪図の「」名称は初出文献の記事を参考とした。

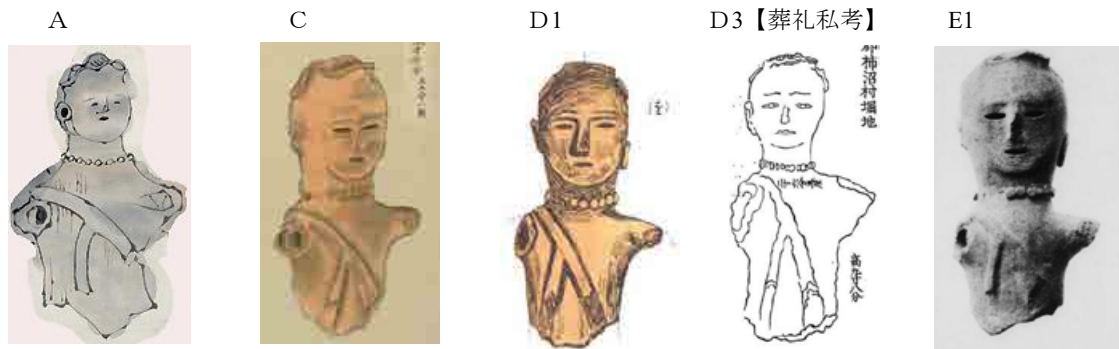
※照合番号1～28は下方左隅より上方右隅に任意に数置したもので個別に抽出して典拠図と対比させている(第1表、第1～10図参照 本文説明中の表示番号と照合)。

1. 「備前国磐梨郡本村一人物」、振分髪の子男子像。出土時期・現存不明。現在の岡山県和気郡和気町地内の出土とされる。明治22年に出版された【日本考古提要】服飾の項に挿図がある。同図は蓑虫山人画と同画角で左腕・胴部下半は欠損と同一である。同書には蓑虫山人画に共通する人物埴輪が他にも掲載されており、根本武香蔵品と明記している埴輪もある。編集者・校訂者は東京人類学会会員の鳥居邦太郎・磯部武者五郎・山岸輯光等がおこなっている。
2. 「大幡村柿沼一襷掛人物」江戸時代末出土か。現在の埼玉県熊谷市柿沼地内の出土。根本武香から柏木貨一郎に譲られ、後に根本武香に返されたもの(文49)。【土器諸図】と同画角。【葬礼私考】に図が【英語版一日本考古学一】【日本埴輪図集】に写真が掲載される。現在は所在不明となっている。
3. 「上中条村一武装人物」、明治9(1876)年12月2日出土。現在の埼玉県熊谷市上中条地区に所在した鹿那祇古墳の出土とされる。出土の翌年には根本武香の蒐集品となり、長く同家に収蔵されていた。五姓田義松、山名貫義等に写生され(文49)、その模写図が多くの好古家たちに傾かたれている(文27.49.47.54.55)。現在は東京国立博物館に所蔵され日本を代表する埴輪の一つ「短甲武人」である。画角は正面で各図ほぼ同一。
4. 「大谷村串引一人物腰部分」明治10(1877)年2月出土。現在の埼玉県東松山市大谷地区に所在する三千塚古墳群の第Ⅲ支群から根本武香が発掘したもので、腰から膨らんだ襠部分は所在不明となり脛以下の基部部分が遺存し、現在は埼玉県立歴史と民俗の博物館に寄託されている(文31)。画角は正面ではなく【土器諸図】【榎園好古図譜】と同じ側面図であることは注意される。

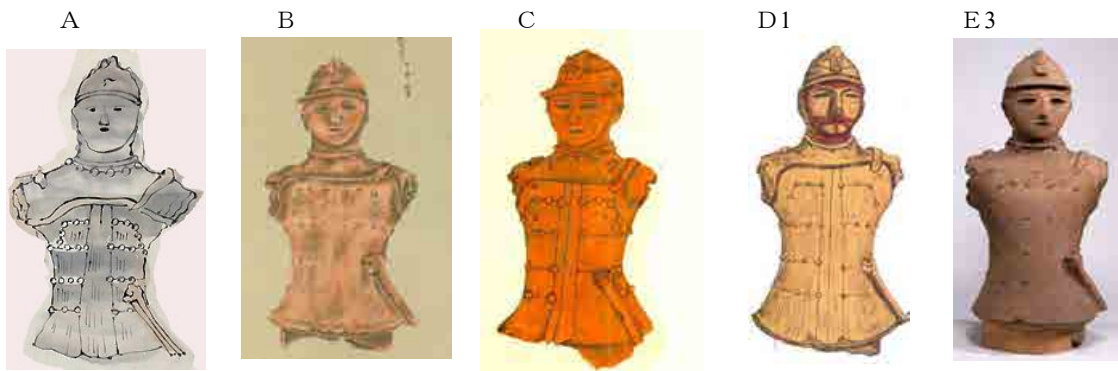
A 【埴輪写生図】 B 【土器諸図】 C 【榎園好古図譜】 D1 【人類学会雑誌・他図】 E 【写真】



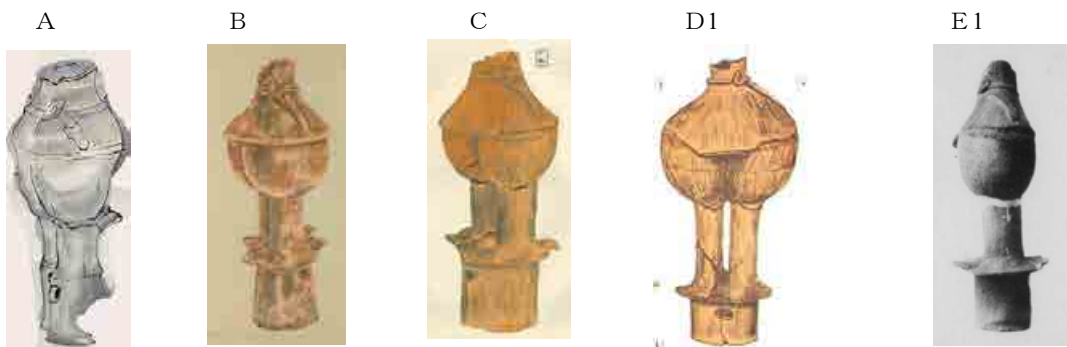
1 備前国磐梨郡本村出土人物一（岡山県和気郡和気町）



2 大幡村柿沼出土人物一（埼玉県熊谷市柿沼）



3 上中条村出土人物一（M9.12.2 出土 埼玉県熊谷市上中条・中条古墳群）



4 大谷村串引出土人物一腰部分一（M10.2 出土 埼玉県東松山市大谷・三千塚古墳群）

図2 埴輪写生図との比較図譜類・写真（1～4）

5. 「大谷村花ノ木一人物」明治10(1877)年2月19日出土。女性の半身像。由来は4.と同じだが、【土器諸図】【榎園好古図譜】【東京人類学雑誌】に來歴記載がある。画角は【土器諸図】に二点ある図の右図に近い。現在は埼玉県立歴史と民俗の博物館に寄託されている(文31)。
6. 「大谷村串引一人物」明治9(1876)年2月15日出土。鬢を持つ人物の半身像。來歴は4.と同じ、左腕や首の折れは描かれるが右腕を欠き、左右の鬢は耳状に張出してみえる。腰に鎌を付けた農夫埴輪とされる(文31)。現在は所在不明。
7. 「大幡村柿沼一人物」江戸時代末出土か。根岸武香から柏木貨一郎に譲られ、後に根岸に戻された。【土器諸図】【榎園好古図譜】と同画角で描かれる。また、シーボルト著の【英語版一日本考古学一】に紹介された写真の埴輪三体中の一体である。なお、蓑虫山人画では円筒部が書き加えられている。現在は埼玉県立歴史と民俗の博物館に寄託されている(文31)。
8. 「上野国那波郡波志江村相山一人物」江戸時代末出土か。同所は現在の群馬県伊勢崎市波志江地内に想定される。土偶人(人物埴輪)三体が出土しているとされ、寛政12(1800)年刊行された桂川中良の【桂林漫録】に挿図と共に紹介されている。紐の結ばれたコート状衣服表現の人物埴輪はほとんど知られていない。同書によると出土後間もなく破壊されてしまったといい現品は伝わらない。【葬礼私考】【日本考古提要】【古代刀鋒図説】【英語版一日本考古学一】に参照され【土器諸図】にも納められていた。黒川真頼は【古代刀鋒図説】に埴輪の腰に佩く刀の例示に本図を掲載している。本図については、原資料の埴輪が失われたとされることから、いずれかの模写図を参考する外には描くことはできないと思われる。
9. 「上野国那波郡波志江村相山一人物」江戸時代末か。8.と同時に出土した三体中の一体とされる。本品も8と同形だが、胸部に残る円文表現が特徴で乳房なのか円形装飾なのか不詳である。蜷川式胤の手稿【玉考】に本図譜が綴られている(文26)。
10. 「冑山村霞沢一人物上半身」明治9(1876)年11月出土。根岸武香の居住地冑山に所在した大境古墳群からの出土が想定される。他に同古墳群から出土の埴輪は根岸の蒐集品に含まれ、【土器諸図】【榎園図譜】【東京人類学雑誌】には顔面に彩色模様の描かれる人物埴輪二体が描かれるが、蓑虫山人画では採られていない。本図は頸飾の玉緒が描かれる背面であって、前面は特徴に欠けることから背面を描いたのであろうか。【榎園好古図譜】には前面と背面が描かれている。この埴輪は現在所在不明となっている。
11. 「松山町元宿一人物半身像」。明治9(1876)年10月13日出土。現東松山市元宿地内の出土と思われる。同所には水鳥冠を頂いた人物埴輪が出土した岩鼻古墳群が所在している。当該人物埴輪は頭部の小欠損、両腕を欠く姿は【榎園好古図譜】に近い。本品は根岸武香の蒐集品に含まれていたが現在は所在不明となっている。
12. 「常陸国平磯村一人物上半身」文化9(1812)年同所の三つ塚付近からの出土と伝わる。現茨城県ひたち那珂市平磯地内とされる。【土器諸図】ではやや左向きに描かれる。【葬礼私考】【日本考古提要】には【土器諸図】と同図を掲載するが、蓑虫山人画では正面を向くようだ。現在は当該埴輪は所在不明となっている。
13. 「大谷村一人物上半身」出土時期は不詳だが他の三千塚古墳群出土埴輪群に近い明治初期(明治10年代)と思われる。腰部分に付された縄状の表現は【土器諸図】ほか各図とも共通する。農夫か、馬子像とされる(文31)。根岸家に現存している。
14. 「下総国相馬郡岡村一人物上半身」出土時期不明 現、茨城県取手市出土か 【発掘埴輪図】【日本考古提要】に記載された上半身図に近似する。両腕を欠くこと、頸玉を巡らすこと、鉢巻状の帯に3点の円文を置くことなどが共通している。但し、蓑虫山人画では基部円筒まで描いているので、蓑

A 【埴輪写生図】 B 【土器諸図】 C 【榎園好古図譜】 D1 【人類学会雑誌・他図】 E 【写真】



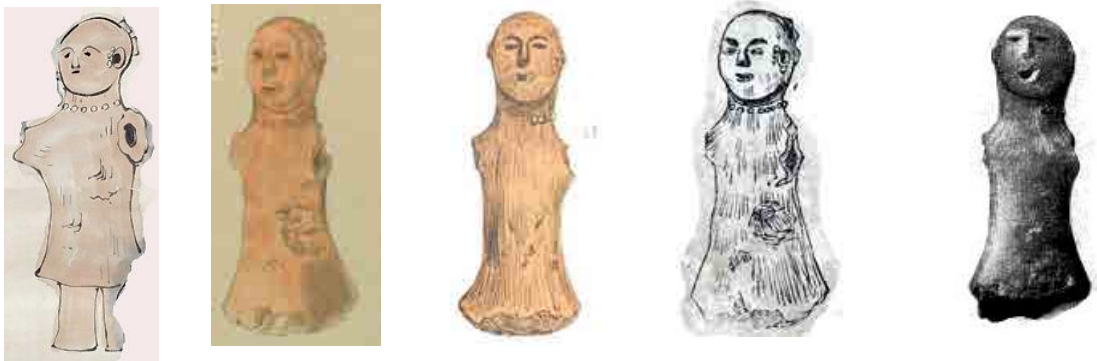
5 大谷村花ノ木出土人物一 (M10.2.19 出土 埼玉県東松山市大谷・三千塚古墳群)

A B C D1 E1



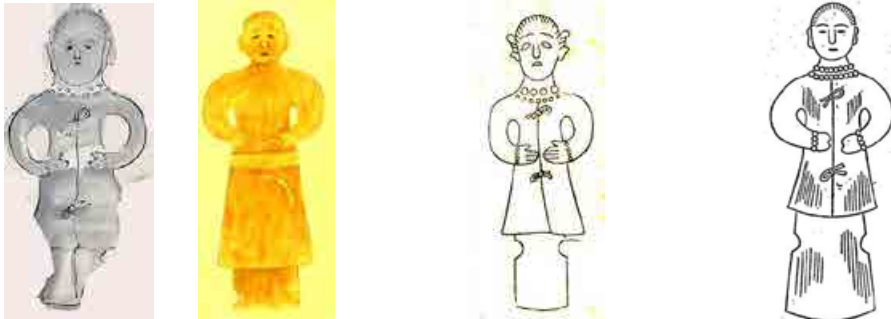
6 大谷村串引出土人物一 (M9.2.15 出土 埼玉県東松山市大谷・三千塚古墳群)

A B D1 D4 【日本考古学】 E5



7 大幡村柿沼出土人物一 (埼玉県熊谷市柿沼)

A B D5 【桂林漫録】 D2 【日本考古提要】



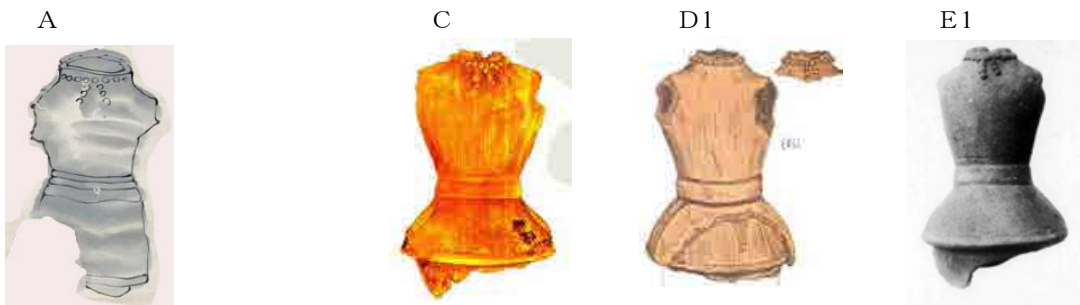
8 上野国那波郡波志江村相山出土人物一江戸時代末出土 (群馬県伊勢崎市波志江)

図3 埴輪写生図との比較図譜類・写真 (5～8)

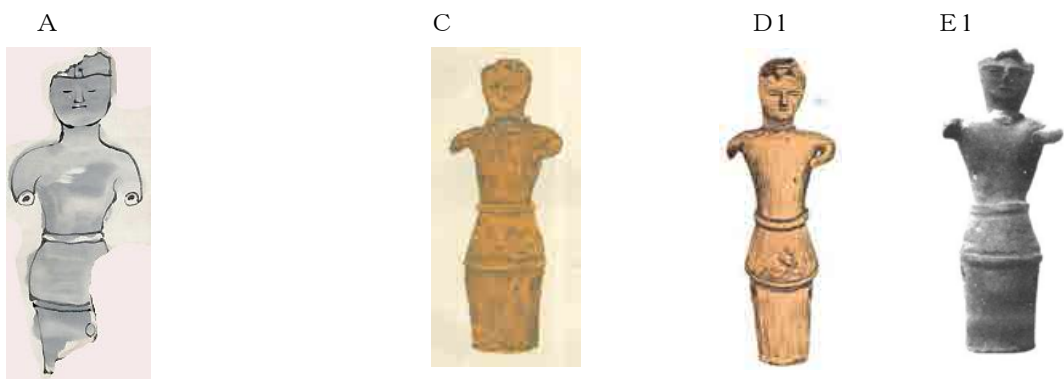
A【埴輪写生図】 B【土器諸図】 C【榎園好古図譜】 D1【人類学会雑誌・他図】 E【写真】



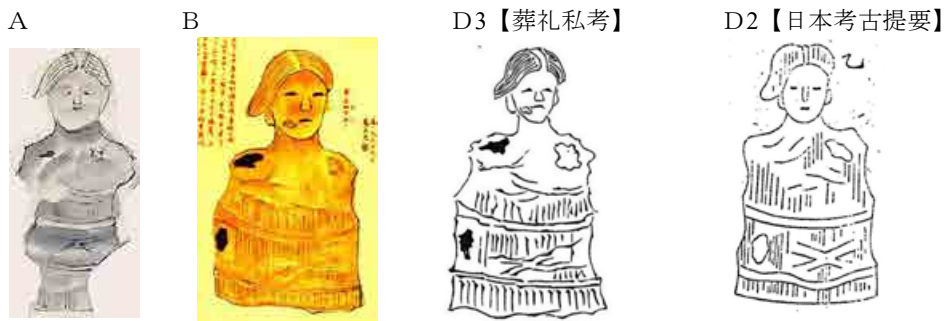
9 上野国那波郡波志江村相山出土人物—江戸時代末出土（群馬県伊勢崎市波志江）



10 青山霞沢出土人物—背面—（M9.11 出土 埼玉県熊谷市青山・大境古墳群）



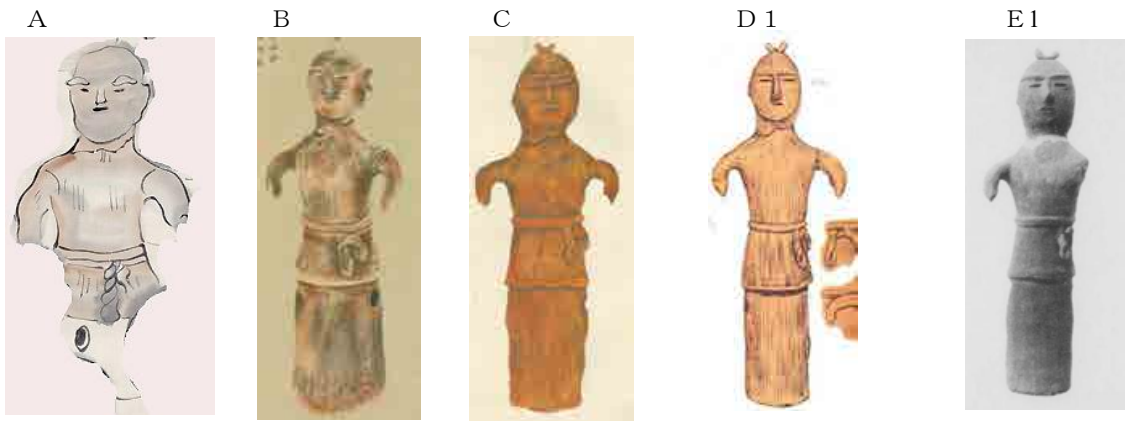
11 松山町元宿出土人物—（M9.10.13 出土 埼玉県東松山市元宿・岩鼻古墳群）



12 常陸国平磯村出土人物—（文化9年出土 茨城県ひたち那珂市）

図4 埴輪写生図との比較図譜類・写真（9～12）

A【埴輪写生図】 B【土器諸図】 C【榎園好古図譜】 D1【人類学会雑誌・他図】 E【写真】



13 大谷村出土人物一（明治10年代出土 埼玉県松山市大谷・三千塚古墳群）

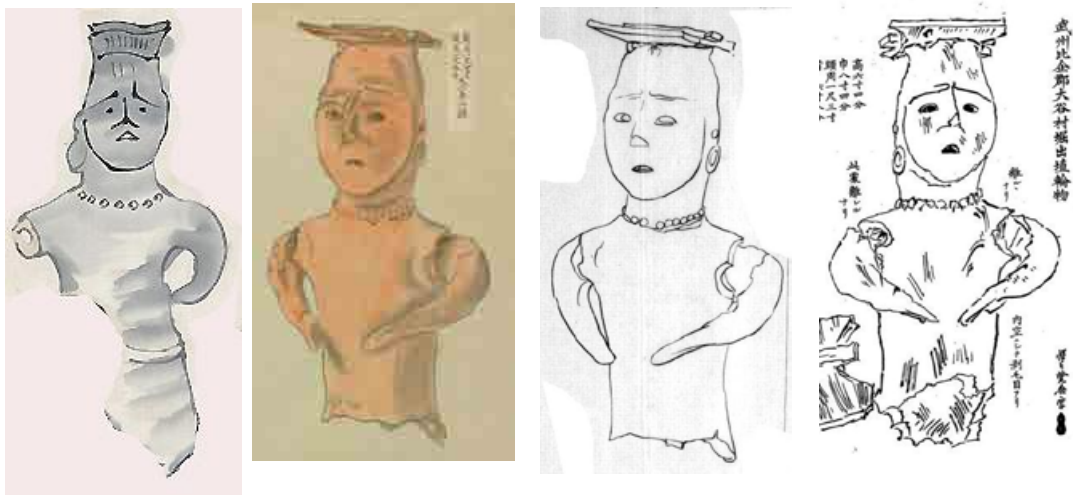
A D6【発掘埴輪図】



15 不明人物

14 下総国相馬郡岡村出土人物一（茨城県取手市）

A B D7【成山帖】 D8【發雲余興】



16 大谷村串引出土人物一（M9.1.3出土 埼玉県東松山市大谷・三千塚古墳群）

図5 埴輪写生図との比較図譜類・写真（13～16）

虫山人の描き足しなのか埴輪自体が別物であったかもしれない。当該の埴輪は所在不明となっている。

15. 「不明—人物頭部」出土時期、出土地など不明。人物埴輪の頭部正面を描く。頭頂から右側に板状の髪（振分髪）が遺り、左側は欠失しているようだ。額のU字形は髪か櫛を表したとすると女性人物か。類似例の埴輪を絞り込めず来歴・現存とも不詳である。
16. 「大谷村串引—人物上半身」明治9（1876）年1月3日出土。現在の埼玉県東松山市大谷地区に所在する三千塚古墳群の第Ⅲ支群から根岸武香が発掘した埴輪であり、同年2月に松浦武四郎に譲られた人物埴輪である。【土器諸図】【成山帖】に類似図が見られる。【成山帖】図は【土器諸図】図を複写した図と考えているのでほぼ同画角・同寸。蓑虫山人画はやや正面向きで右腕を欠き腰部まで描く点に差異があるものの、張り出した髪（島田髷か）や悲しげな表情をした顔の形状が類似する。なお、松浦武四郎は明治9（1876）年に刊行した【發雲余興】に「22. 人物埴輪」とともに図を掲載している。松浦は明治21（1888）年に亡くなり、所蔵品の多くは伝わるがこの埴輪の所在は不明となっている。
17. 「常陸国平磯村—人物上半身」文化9（1812）年。12と同じ来歴を持つ。【土器諸図】と【葬礼私考】【日本考古提要】の図は近似しており、蓑虫山人画には左腕の一部が描かれ円筒状の下半身とする。胸像のような12・17人物埴輪図と体部の表現が大きく異なっているが、傾けた顔や髪の表現はほぼ一致している。現在、当該埴輪の所在は不明となっている。
18. 「上中条村—人物頭部」、明治9（1876）年12月2日出土。現在の埼玉県熊谷市上中条地区に所在した鹿那祇古墳の出土とされる。来歴は「3. 人物埴輪」と同様に根岸武香の蒐集品に収まり同家に現存する。蓑虫山人画は左面を向いており、【土器諸図】と同一画角で描かれている（文49）。
19. 「上中条村—人物頭部」、明治9（1876）年12月2日出土。現在の埼玉県熊谷市上中条地区に所在した鹿那祇古墳の出土とされる。中条古墳群出土埴輪群の一つで根岸武香の蒐集以後、明治20年までに神田孝平の手元に渡ったと思われる。頭部装飾に特徴のある埴輪で、蓑虫山人画は頭部の右側面から遺存していなかった体部までを書き加えている。同様な横顔の図は明治22（1889）年刊行の【日本考古提要】、明治30（1897）年刊行の【日本考古学】にも掲載されている。頭部には笄帽、或は特殊な髷にからむ鉢巻装飾が表現され盾持ち人と考えられている（文40.49）。現在この埴輪は神田から本山彦一を経て関西大学博物館の所蔵となっている（文34）。
20. 「大谷村花ノ木—人物」明治10（1877）年2月出土。東松山市の三千塚古墳群出土埴輪の一群であり、根岸武香の蒐集品となっていた。頭部を失い両手で持物を捧げる半身像として【土器諸図】【日本考古提要】【東京人類学会誌】には描かれるが、蓑虫山人画では下半身の円筒部を描き加えている。本品は昭和初年ころまで根岸家の所蔵を【日本埴輪図集】から知られるが現在は所在不明となっている。
21. 「武蔵国橘樹郡大曾根村出土—人物半身」出土時期不明。現在の横浜市神奈川区地内の出土。【日本考古提要】に素図が見え、円頭は冠帽か冑の表現としたら男性埴輪の可能性もあるが、胸部の円文が乳房の表現であるとしたら女性の人物埴輪になるだろうか。【日本考古提要】では胸部円文ではなくU字形であり刻線なのかもしれない。当該埴輪については類似例を含め現在のところ所在不明である。
22. 「大谷村串引—人物頭部」明治8（1875）年11月8日出土。東松山市の三千塚古墳群出土埴輪の一群であり、根岸武香の蒐集品となっていた。根岸から松浦武四郎に譲られており、【發雲余興】に掲載された振分髪の人物で髪裾が反り上がり気味であることが特徴と思われ、【土器諸図】【榎園図譜】【東京人類学雑誌】にも近似した形状で描かれている。本資料は松浦の没後に根岸へ戻っていることが【東京人類学雑誌】【日本埴輪図集】から知ることができるが、現在は所在不明となっている。

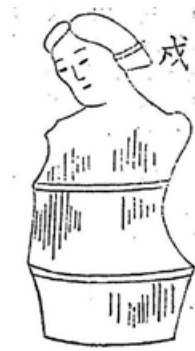
A 【埴輪写生図】 B 【土器諸図】 C 【榎園好古図譜】 D1【人類学会雑誌・他図】 E【写真】

A

B

D2【日本考古提要】

D3【葬礼私考】



17 常陸国平磯村出土人物一（文化9年出土 茨城県ひたち那珂市）

A

B

C

D1

E3



18 上中条村出土人物一（M9.12.2.出土 埼玉県熊谷市上中条・中条古墳群）

A

B

D2【日本考古提要】

D4【日本考古学】



E 1

E 2



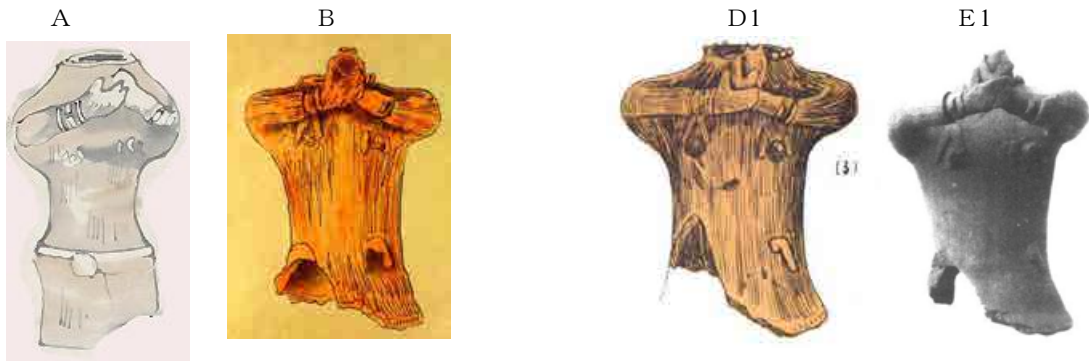
19 上中条村出土人物一（M9.12.2 出土 埼玉県熊谷市上中条・中条古墳群）

図6 埴輪写生図との比較図譜類・写真（17～19）

23. 「常陸国茨城郡青山村一人物頭部」江戸時代末の出土か 現 茨城県城里町青山地内、出土地は同所青山神社傍の古塚とされ、【葬礼私考】、【古図類纂】【日本考古学】等に紹介されるなど早くから好古家には知られた埴輪であったらしい。本図は【土器諸図】【葬礼私考】画と同じ画角で描かれており、原資料の実写ではなく【土器諸図】【葬礼私考】等の模写図を見ての作画と思われる。当該資料は同所の青山神社に所蔵されている（文 36）。
24. 「下総国関宿村一人物上半身」出土時期不明 現在の千葉県野田市の出土、【日本考古提要】に上半身図がある。「21. 人物埴輪」に似た円頭だが額の帯表現から冑とも冠帽とも見える。頭部中央の小円は遺存する鋳の表現とすると冑であろうか。肩の線以下は彩色を胸部まで広げており、【日本考古提要】図での胸部遺存部分にあたる。
25. 「河内国石川郡 山中古墳一人物上半身」か 大阪府富田林市付近の出土か 一段上がる頭頂部は冑の座金や島田髻の残欠など頭部・頭髪表現かもしれない、明瞭な眉筋から鼻梁の表現から巫女埴輪とも想定される。但し、類似する【集古図】【日本考古提要】では茄頭形状、襟合わせの衣服を着る半身像で手足の表現は無いか欠失するようだ。この図に対して【日本考古提要】では衣服表現に不信感を示している。蓑虫山人画は本図を参照したとすると胸部以下は省略したものと思われる
26. 「上中条村一人物頭部」、明治9（1876）年頃の出土か。現在の埼玉県熊谷市上中条地区に所在した古墳からの出土とされる。上中条出土埴輪群の一つで根岸武香の蒐集以後、明治20年までに神田孝平に渡った衝角付冑を装着した埴輪である。蓑虫山人画では冑の鋳を細かく描き込んでいる。現在この埴輪は神田から本山彦一を経て関西大学博物館の所蔵となっている（文 34）。
27. 「上中条村一人物頭部」、明治9（1876）年12月2日出土。現在の埼玉県熊谷市上中条地区に所在した鹿那祇古墳の出土とされる。中条古墳群出土埴輪群の一つで根岸武香の蒐集以後も同家で所蔵される。蓑虫山人画はやや面長な鉢冑装着の埴輪となっており右側の鋳部分も簡略だが描き込んでいる。本埴輪は「3. 人物埴輪（短甲武人）」等の中条古墳群出土埴輪群と共に【土器諸図】以降の諸書（文 11～25）に掲載されている。
28. 「上野国南勢多郡西大室村一人物上半身」出土時期不明。現在の群馬県前橋市大室地内 大室古墳群からの出土と想定される。同古墳群からは多量の埴輪が出土するが本例の類品は知られていない。蓑虫山人画は三角形の冠帽状に表現するが【日本考古提要】では卵頭状に表現し頭頂に丸星を置く。遺存部位は上半身と同一であり、耳はやや大きく描かれる。本埴輪は頸の長さ肩の線から盾持人埴輪であったかもしれない。他に類似の埴輪は、栃木県甲塚古墳例（同古墳出土品の人物 15）に見る山高帽を被る農夫の例に近い（文 41）。同古墳は明治期に盗掘に会っており類似埴輪の出土が想定される。

描かれた埴輪の原資料は何かを、類似埴輪を現存資料や模写資料に求め広く検討し、明治期には発見（出土）が知られていた資料との照合作業を試みた。予想通り根岸武香に関わる埴輪が蓑虫山人画の埴輪図では大半を占めていることが解った。根岸武香に関わる埴輪とは、①根岸家所蔵の埴輪、②根岸家所蔵の埴輪図・図書などの図譜類に記載を認められた埴輪が挙げられる⁽⁶⁾。その内訳数は、描かれた埴輪28体中16体が根岸の所蔵（旧蔵）埴輪であって、中条古墳群出土埴輪群がNo.3・18・19・26・27の5体、三千塚古墳群出土埴輪群No.4・5・6・13・16・20・22の7体、熊谷柿沼・冑山等の隣接地域出土群No.2・7・10・11の4体であった。図譜類は6体で、好古家の多くが所蔵していたと考えるNo.8・9・12・17・23・25である。この図譜類には前記の根岸所蔵埴輪も描かれた【土器諸図】【發雲余興】等で、後に根岸家から国会図書館に寄贈された資料に収められている。なお、当時刊行されていた【葬礼私考】【桂林漫録】【日本考古提要】【集古図】等の図書類は蓑虫山人も実見していた可能性は高いだろう。対象埴輪

A【埴輪写生図】 B【土器諸図】 C【榎園好古図譜】 D1【人類学会雑誌・他図】 E【写真】



20 大谷村花ノ木出土人物一 (M10.2 出土 埼玉県東松山市大谷・三千塚古墳群)

A D2【日本考古提要】



21 武蔵国橘樹郡大曾根村出土人物一 (横浜市神奈川区)

A B C D1 E1



22 大谷村串引出土人物一 (M8.11.8 出土 埼玉県東松山市大谷・三千塚古墳群)

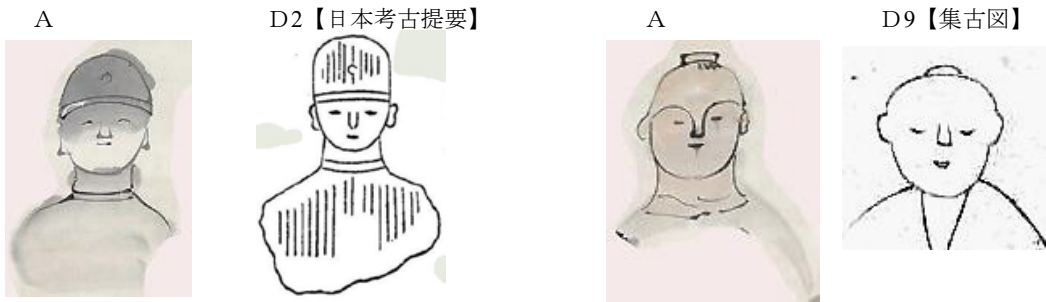
A B D3【葬礼私考】 E4



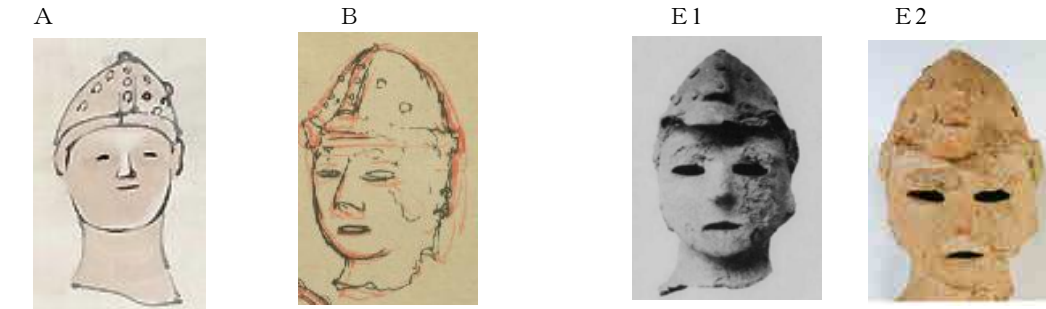
23 常陸国北茨城郡青山村出土人物一 (茨城県城里町)

図7 埴輪写生図との比較図譜類・写真 (20～23)

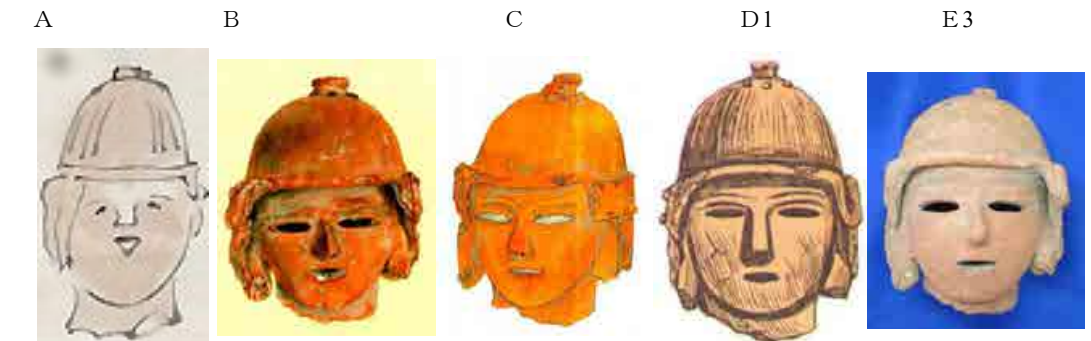
A 【埴輪写生図】 B 【土器諸図】 C 【橢園好古図譜】 D1 【人類学会雑誌・他図】 E 【写真】



24 下総国関宿村出土人物一 (千葉県野田市) 25 河内国石河郡 山中古墳一 (大阪府富田林市)



26 上中条村出土人物一 (M9~10 出土 埼玉県熊谷市上中条・中条古墳群)



27 上中条村出土人物一 (M9.12.2 出土 埼玉県熊谷市上中条・中条古墳群)



28 上野国南勢多郡西大室村出土人物一 (群馬県前橋市西大室)

図8 埴輪写生図との比較図譜類・写真 (24~28)

を特定できない不明埴輪 15. を除くと約八割に当たる 21 体の埴輪が根岸家において現物と図譜で実見できたとの想定が可能になる。見方を変えれば不明埴輪 15 を除く 27 体の埴輪写生図は図譜類を典拠にして描くことも可能だったと考えられるのである⁽⁷⁾。描いた場所は図譜類を閲覧できる場所であれば良いことになる。

構図について、「埴輪写生図」では全身像の 4～17 埴輪の頭部や身体の比率はほぼ等しく、その配置は全身像の埴輪を前後列に並び描いた後に、その隙間を埋めるように頭部破片の埴輪を描き足しているようだ。頭部の大きさは全身像、頭部破片でも同程度の大きさがあり、身体の下半を失う埴輪を背側に配置したことも欠損部を隠すことになり自然な配列状態を見せている。ただ、25 は体部を省略しており、後筆と思われる。各埴輪のスケール感は図譜による印象が影響しているのではないだろうか。やや違和感を生ずる 1. は他と比してやや小ぶりに描かれ、なんとなく落ち着かない、隙間に書き込まれたようにも見えてしまう。本来 1. 埴輪の位置には款記と印章を配置するつもりではなかったか。

再度全体を見直すと男子、女子、武人、農民（庶民）、巫女、貴人など、明治期に知られていた埴輪に映された人物層を網羅しているようにも見える。教科書的な説明的な絵図の作成を意図したか、埴輪人物曼荼羅といった作品を仕上げたかったのではないかと想像してしまう。

小 結

最初の疑問であった蓑虫山人は何時・何処でこの埴輪画を製作したのかについて前節の検討からまとめてみた。16. 「大谷村串引一人物」は出土直後の明治 9 年 2 月には松浦武四郎の手に所在していた状況から。実見は松浦家となるため、同年刊行の【發雲余興】や【土器諸図】等の図譜に拠った可能性を考えられること。他の埴輪も図譜類に近似した構図（画角）がとられていること。

次に、5. 「大谷花ノ木出土の人物」が明治 10 年 2 月 19 日の出土であって、出土時期が明確な他の埴輪の中で最も新しい時期になる。このことは明治 10 年 2 月以降でなければ蓑虫山人はこの埴輪を描くことができない。同時期には蓑虫山人は東北・奥羽地方に旅立った頃とされ、明治 19 年に神田孝平と出会うまで遊歴の中にあっただ。明治 20 年には上京して神田孝平を訪ねており、明治 20 年 8 月～9 月の間に、根岸邸に來訪していたとした場合には作画も可能だったと思われる。もし、この機会を得たとすると仲介者は神田になるか。しかし、根岸家に残る「來訪者名簿」には蓑虫山人の名は見えない（註（1）参照）といって、蓑虫山人が冑山根岸家を訪問した可能性は完全に否定できない。今のところこの「埴輪写生図」は図譜類を元に描いた可能性が高いと思われ、描画の画角に図譜類との共通例が見えることによりその感が強い。埴輪の所蔵先であった冑山の根岸邸（古物陳列場）に赴いてはいないと思われる。

なお、根岸家の埴輪類の最も早い図譜は【古器物図一ハニワ出土稿（東京帝室博物館史伝部編）】で【土器諸図】の元図と考えている（文 49）。さらに【土器諸図】を元に好古家間に摸写図が多数交換されたらしく、根岸家の所蔵埴輪などは【成山帖】【尚古写生一文 47】等に残されていた。果たして蓑虫山人は帝室博物館で【古器物図】を見る機会を得たかは不明だが、前記の写生図譜や刊本等に接していたことは想像に難くない。

蓑虫山人の作画動機を知ることは想像でしかないが、考古資料の中でも特に縄文土器や石器に興味を深める契機となったのは奥羽地方の遊歴の途次、亀ヶ岡遺跡を発掘し多大の成果を獲たことが大きいとされる。著名な遮光器土偶に接し、土偶も埴輪も「土偶人」と同一視された頃であれば人物埴輪へも関心が注がれただろう。神田孝平所蔵の中条古墳群出土埴輪に触発され、当時多数の埴輪を所有していた根岸武香の評判を知り根岸家の埴輪に興味を抱いたのかもしれない。現在のところ蓑虫山人の作品に埴輪を題材にした作品は知られていない。蓑虫山人自らの興味の上での製作か、依頼作品なのかなど経緯はやはり不詳であって、款記・印章を欠く点も未完成、或は下書きではないかという疑問も残る。これらの点について

表 1 「埴輪写生図」対象埴輪一覧

No.	種別・形状	典拠埴輪・発見地(当時・時期)・作画資料(細部表現)				
		出土地・(年)・【所在地】	A 葦虫山人埴輪写生図	B 土器諸図	C 権園図譜	D 他図譜類
1	人物(男子) 上半部	備前国磐梨郡本村(不明) 【岡山縣和気郡和気町】	左顔 振分髪 左手欠 腰下欠	無	無	日本考古提要 28 図
2	人物(女子) 上半部	大幡村柿沼(江戸末) 【埼玉県熊谷市柿沼】	右顔 袈裟禪 両手欠 頸玉飾 頭部破損?	構図同	無	人類学会雑誌を・葬礼私考 日本考古提要 30 図乙
3	人物(武装) 上半部	上中条村 M 9.12.2 【埼玉県熊谷市上中条】	正面 両手欠 下半部欠	構図同	左顔	人類学会雑誌い 日本考古提要 27 図丙
4	人物(男子) 下半身部	大谷村串引 M 10.2 【埼玉県東松山市大谷三千塚古墳群】	左体 大刀残欠 左手先	構図同 三角文禪	構図同	人類学会雑誌な 日本考古提要 22 図
5	人物(女子) 半身立像	大谷村花ノ木 M 10.2.19 【埼玉県東松山市大谷三千塚古墳群】	正面 耳(鬢か) 左手先欠? 手玉 頸玉飾 乳房 腰下円筒	構図同 手の位置異あり	構図同	人類学会雑誌よ 日本考古学 日本考古提要 21 図甲
6	人物(男子) 半身立像	大谷串引 M 9.2.15 【埼玉県東松山市大谷三千塚古墳群】	正面 右手欠 左手折 首折 腰 下円筒	正面 右腕直	正面 両腕曲	人類学会雑誌に 日本考古学
7	人物(女子) 上半部	大幡村柿沼(江戸末) 【埼玉県熊谷市柿沼】	左顔 両手欠 頸玉飾 腰下円筒 島田鬘残欠?	同構図 円筒部欠	無	人類学会雑誌そ・日本考古学 日本考古提要 21 図乙
8	人物(男子) 全身像	那波郡波志江村相山(江戸時代) 【群馬県伊勢崎市波志江】	正面 頭髪 耳 衣袷紐 腰下円筒 両手拱手 手・首玉飾 腰刀	正面 腰帶頸飾	無	桂林漫録・日本考古提要 23 図 日本考古学
9	人物(男子) 全身像	那波郡波志江村相山(江戸時代) 【群馬県伊勢崎市波志江】	正面 頭髪 耳 円文 腰下円筒 両手拱手 首玉飾	正面 頸飾服紐 同○印	無	桂林漫録・玉考 日本考古提要 21 図丙 日本考古学
10	人物(不明) 半身像	青山村霞沢 M 9.11 【埼玉県熊谷市青山】	正面 頸玉飾 玉緒 両手欠 首欠 腰絞る 腰帶	無	腹带状	人類学会雑誌れ・日本考古学 日本考古提要 24 図乙
11	人物(男子) 全身像	松山町元宿 M 9.10.13 【埼玉県東松山市元宿岩鼻古墳群】	正面 頭部小欠損 両手欠 腰下 円筒 腰带状	無	構図同 全姿	人類学会雑誌た 日本考古提要 24 図丙
12	人物(男子) 半身立像	常陸国平磯村(文化9) 【茨城県ひたち那珂市】	正面 両手欠 腰下円筒	同姿	無	葬礼私考 日本考古提要 29 図乙
13	人物(男子) 半身立像	大谷村 M 10 年代 【埼玉県東松山市大谷三千塚古墳群】	正面 頭部丸 耳 腰下円筒 腰 下げ縄 両腕 首折	同姿 鬢	全姿 頭部に鬢	人類学会雑誌へ・日本考古学 日本考古提要 24 図甲
14	人物(男子) 半身立像	下総国相馬郡岡村延命寺(江戸末) 【茨城県取手市】	正面 冠帽 鉢巻 玉飾 頸玉飾 右手欠 腰下円筒	無	無	日本考古提要 27 図戊・発掘埴輪図 清野 1955
15	人物(不明) 頭部	不明	正面 頭部片 振分髪? 左側欠 額櫛表現?	無	無	不明
16	人物(女子) 半身立像	大谷村串引 M 9.1.3 【埼玉県東松山市大谷三千塚古墳群】	やや右顔 顔下膨れ 島田鬘 頸 玉飾 右腕欠 腰下円筒	両腕	無	發雲余興 成山帖
17	人物(不明) 半身立像	常陸国平磯村(文化9) 【茨城県ひたち那珂市】	左顔 振分髪 左腕 腰下円筒	右腕無	無	葬礼私考 日本考古提要 29 図戊
18	人物(女子) 頭部	上中条村 M 9.12.2 【埼玉県熊谷市上中条】	左顔 島田鬘 頭部 耳	同構図	正面	人類学会雑誌の
19	人物(不明) 頭部	上中条村 M 9.12.2 【埼玉県熊谷市上中条】	右顔 弁帽 結紐 首折 耳	同構図	無	日本考古学 挿図ハ左顔日本考古提要 30 図甲
20	人物(不明) 体部半身像	大谷村花ノ木 M 10.2 【埼玉県東松山市大谷三千塚古墳群】	頭部欠 頸玉飾 両腕前面拱手胸 部乳房表現	腰下欠	無	人類学会雑誌る 日本考古提要 25 図
21	人物(不明) 半身立像	武蔵国橋本郡大曾根村(不明) 【横浜市神奈川区】	正面 冠帽(冑)? 胸部円形(乳 房)? 腕欠か 体部下円筒	無	無	日本考古提要 27 図庚
22	人物(男子) 頭部	大谷村串引 M 8.11.8 【埼玉県東松山市大谷三千塚古墳群】	正面 振分髪 首折	首欠 右向	正面 頸玉飾	人類学会雑誌み・發雲余興 日本考古提要 29 図丙
23	人物(女子) 頭	常陸国北茨城郡青山村(江戸末) 【茨城県城里町】	左顔 後頭部欠 首折 鬘	同構図	無	葬礼私考 日本考古学
24	人物(不明) 胸像	下総国関宿村(不明) 【千葉県野田市】	正面 丸帽(冑)? 鬢(耳か) 頸部(あかべ甲)?	無	無	日本考古提要 27 図癸
25	人物(不明) 頭部	河内国石川郡 山中古墳(不明) 【大阪府富田林市】	正面 頭頂部(島田鬘)? 眉鼻線線 耳(耳環)?	無	無	日本考古提要図 116 頁 集古図巻 2
26	人物(武装) 頭部	上中条村 M 9~10 【埼玉県熊谷市上中条】	正面 山形冑(衝角付冑 鉞)	左顔	無	日本考古提要 27 図・東京大学総合資 料館古写真明治 19 年
27	人物(武装) 頭部	上中条村 M 9.12.2 【埼玉県熊谷市上中条】	正面 眉庇付冑 首折 左頬欠	同構図	同構図	人類学会雑誌く・日本考古学 日本考古提要 27 図乙
28	人物(不明) 胸部像	上野国南勢多郡西大室村(不明) 【群馬県前橋市大室】	正面 冠帽(三角状・冑)? 耳 (鬢)? 体部上半	無	無	日本考古提要 27 図甲

○現存 ●所在不明

描画の特徴	典拠埴輪との相違（創意）		備考（現状・補遺）
	除去・欠失	付加	
ラフ 腕太	左髪 首玉飾	胴下半部裾広	Dと同構図参照か 振分髪の子か ●
細部を表現			B Cと同構図参照か 禪女子 ●
細部を表現		頸回り広く	○東京国立博物館 短甲武人
細部を表現	つま先略か		Bと同構図参照か 男子下半身 ○台部存 根岸家
両手の位置	髪簡略		Bと同構図参照か 巫女 ○根岸家
		耳形状	鬘 腰鎌 農夫 ○根岸家
		円筒部（足？）の付加	Bと同構図参照か ●根岸→柏木→根岸へ
袷 腰帯		両足表現？	B、Dと同構図参照か●
細部を表現		胸部の円文	B、Dと同構図参照か●
背面を描く			C Dと同構図参照か●
			Cと同構図参照か ●根岸家
			B、Dと同構図参照か●
腰縄共通			B、Dと同構図参照か ○根岸家
細部を表現		胴下半補筆	正装男子か ●
簡略表現			該当品不明 女子（巫女）か ●
苦悶の表情	右腕先	下半身台部	根岸家→松浦武四郎 ●
髪長表現		左腕付加	B、Dと同構図参照か●
萎縮表情			Bと同構図参照か ○根岸家
細部表現		上半身	Dと同構図参照か 根岸→神田孝平→ 本山彦一→○関西大学
細部表現		腰縁取、下半円筒付加	B、Dと同構図参照か●
簡略表現			ヘルメット状頭部 性別不明 ●
髪裾の反り		首～肩補筆	C、Dと同構図参照か根岸家→松浦武四郎●
細部表現 断面を表記			Bと同構図参照か ○青山神社
ヘルメット状頭部			上州殖蓮村 下植木飯玉山か ●
簡略表現 巫女か	袷の体部を省略か		藤貞幹「集古図」に類似 巫女か ●
胄右側破損を補筆		首が長い 胄・鉞補筆	Dと同構図参照か 根岸→神田孝平→ 本山彦一→○関西大学
やや簡略	左右鋳簡略		○根岸家
三角帽表現			姫塚古墳・甲塚古墳冠帽男子に類似 ●

はさらに調査・検討が必要になる。一方、蓑虫山人の唯一の作品「埴輪写生図」は好古の資料として古代人の姿をとどめた人物埴輪群を題材に新たに想像された美術作品と云っていいように思われる。

註

- (1) 根岸家の記録「明治九年 千秋日誌」(林家文書 7537 一埼玉県立文書館)、「自明治十七年至明治二十年 根岸武香日誌」(林家文書 7536 埼玉県立文書館)が知られるが、蓑虫山人との関わりを窺わせる記述は見えないようだ。後者では明治 20 年 8 月 5～7 日の記事に坪井正郎・若林勝邦等が根岸家を訪れ黒岩横穴・吉見横穴を案内した記事が見える。また、「人名録」(根岸家文書 1058 一埼玉県立文書館)は、根岸家を訪問した人々の署名又は名刺が貼り込まれた冊帳となっており、280 名余りを確認できる。明治 10 年代前半から同 20 年直前までの期間と考えられ、シーボルト、モース、ビゲロー等も含まれている(文 42.43)。なお、蓑虫山人(土岐源吾)の名は確認できない。
- (2) 『日本大古石器考』を刊行する以前、神田孝平は明治 11 年 6 月 20 日付、那珂通高より根岸友山武香あての書中に神田孝平文部少輔が根岸家の古物に関心を寄せ実見したいとの意向を伝えていた。(根岸家文書 5061 一埼玉県立文書館)「一前略一神田文部少輔とも話し居候大古之跡をも尋見申度所存、其節ハ參堂御厄介傍、御所蔵の古物をも拝見仕度志二御座候、一後略一」(文 29)とあり、『日本大古石器考』の出版準備のための資料収集と思われる。実際同書には根岸家所蔵の石器が多数使用されていた。
- (3) 東京人類学会の結成は明治 19 年に神田孝平を会長に東京帝国大学人類学研究室の坪井正五郎ら中心となっていた。根岸武香は明治 20 年 4 月には入会をしていたことが会費領収書等(根岸家文書)からも知られる。
- (4) 亀ヶ岡遺跡での発掘成果を神田孝平に報告することが主目的であったろうが、明治 20 年 8 月 2 日に上京し 9 月 2 日には東北へ戻っている。東京では神田の住まいに近い淡路町の駿河屋旅館に宿泊していた(文 39・57)。当時根岸家は本郷に居所を持っており、家業の事務や古物会の開催時に使用していた。埴輪等の考古遺物のほとんどは青山の居宅に所蔵していた。明治 20 年代には青山の本邸に古物陳列場を整備しており、私設博物館としての機能を備えていた(文 51)。なお、明治 23 年 5 月 16 日より 20 日余り上京している。この上京は上野公園を会場に開催された第 3 回内国勸業博覧会を見るためとされ、宿は前回と同じ神田であった。前後 2 回の上京時に根岸武香との接点は未確認のままだ。
- (5) 土器諸図の描画は山名貫義(皇室博物館史伝部)の調査により描かれたと考えており、黒岩横穴の調査に並行して根岸邸の古物模写の依頼が明治 10 年 4 月 22 日付けの柏木貨一郎から根岸武香に寄せられていた(文 42.43.49)。山名は当日から根岸邸に滞在して、中条古墳群・三千塚古墳群の埴輪などを描いたと思われる(文 49)。
- (6) 清野謙次 1955 『日本考古学・人類学史』下巻には『観古図録』、『発掘埴輪図』、『古図類纂』等明治期に作成されたと思われる図譜が引用・掲載されている。また、清野謙次 1944 『日本人種変遷史』小山書店 には「玉考」が引用され、波志江出土埴輪図が掲載される。
- (7) 【日本考古提要】には、埴輪写生図に描かれた 28 体の埴輪中 21 体が描かれていた。その人物埴輪は 2・3・4・5・7・8・10・11・12・13・14・17・19・20・21・22・24・25・26・27・28 が該当するが、非常に簡略化された素図で、果たして参考図となったかはやや疑問が残る。

掲載図・写真の出典等

A【埴輪写生図 1～28】

- B【土器諸図 3～9.12.13.16～20.22.23.26.27】
 C【榎園好古図譜 2～6.10.11.13.18.21.26】
 D1【東京人類学会雑誌 2～7.10.11.13.18.20.22.26】
 D2【日本考古提要 1.8.9.21.24.28】
 D3【葬礼私考 2.12.17.23】
 D4【日本考古学 7.19】
 D5【桂林漫録 8.9】
 D6【発掘埴輪図 14】
 D7【成山帖 16】
 D8【發雲余興 16.22】
 D9【集古図 24】
 E1【日本埴輪図集 2～6.10.11.13.19.20.22.26.】
 E2【関西大学博物館蔵 19.26】
 E3【根岸家蔵 筆者撮影 18.27】
 E4【青山神社蔵 23】
 E5【Japan AErchology 7】

引用・参考文献一覧（本文中の（文-No.）と一致）

No.	著者・編者・機関	年次	「論文名」・『図書名』・巻号数
1	桂川 中良	1800	『桂林漫録』国会図書館デジタルアーカイブ 請求番号 837-68
2	栗田 寛	1866	『葬礼私考』国文学資料館図書データベース
3	松浦 武四郎	1876	『發雲余興』国会図書館デジタルアーカイブ 根岸家寄贈本 7
4	黒川 真頼	1879	『古代刀鉞図説』国会図書館デジタルアーカイブ請求番号チ 61-02363
5	H.v.Siebold	1879	『Notes on Japanese Archaeology with especil referenceto the stoneage 』日本考古学 英語版
6	神田 孝平	1884	『NOTES ON ANCIENT STONE IMPLEMENTS, & c, OF JAPAN (日本名) 日本大古石器考』
7	淡崖 (神田孝平)	1887	「埴輪の事」『東京人類学会報告』第2巻第11号 東京人類学会
8	神田 孝平	1887	「陸奥瓶岡ニテ未曾有の発見」『東京人類学会報告』第2巻16号
9	神田 孝平	1887	「奥羽巡回報告」『東京人類学会報告』第2巻第11号
10	坪井 正五郎	1888	「埴輪土偶に基づいて古代の風俗を宣ぶ」『東京人類学会雑誌』第23号
11	鳥居 邦太郎 他	1889	『日本考古提要』国会図書館デジタルアーカイブ 請求番号 38-87
12	坪井 正五郎	1889	『埴輪考』東洋社 日本考古学選集『坪井正五郎』再録
13	坪井 正五郎・八木 奘三郎	1898	『日本考古学』嵩山書房 国会図書館デジタルアーカイブ 請求番号 79-83
14	沼田 頼輔 大野 雲外	1898	『日本考古図譜』嵩山書房 国会図書館デジタルアーカイブ請求番号 400-75
15	坪井 正五郎	1901	『埴輪考』東洋社 日本考古学選集『坪井正五郎』再録
16	柴田 常恵	1903	「武蔵の古埴」『東京人類学会雑誌—根岸武香特集号』第18巻207号
17	高橋 健自	1911	「古見の百穴と根岸武香の蒐集品」『考古学雑誌』第2巻第4号
18	日本考古学会	1912	『日本考古資料写真集』国会図書館デジタルアーカイブ請求番号 339-46
19	高橋 健自 編	1920	『日本埴輪図集』上下 東京帝室博物館御蔵版 歴史参考図刊行会
20	高橋 健自	1927	『埴輪及装身具』考古学講座 第11号 国史講習会
21	大野 延太郎	1930	『考古学大観』春陽堂 国会図書館デジタルアーカイブ請求番号 605-90
22	柴田 常恵・内藤 政光	1930	『埴輪』日本考古図録大成第7輯 日東書院
23	帝室博物館 編	1942	『埴輪集成図鑑』第1回～第5回 日本古典全集刊行会
24	野間 清六	1942	『埴輪美』聚楽社 国会図書館デジタルアーカイブ請求番号 E 210.02.N94 ウ
25	後藤 守一	1942	『埴輪』アルス文化叢書 15
26	清野 謙次	1944	『日本人種変遷史』小山書店 ※明治6年 蜷川式胤「玉考」引用
27	清野 謙次	1955	『日本考古学・人類学史』上・下巻 岩波書店 ※図譜類引用掲載
28	小林 行雄	1974	『埴輪』陶磁大系 第3巻 平凡社
29	斎藤 忠 編	1978	『復刻日本考古学文献集成 6—「日本大古石器考」』収録 第一書房
30	群馬県史編纂室	1981	『群馬県史 資料編3 古埴』
31	金井塚 良一	1983	「県立博物館が収蔵・保管する比企郡出土の形象埴輪について」『埼玉県立博物館紀要』10

No.	著者・編者・機関	年次	「論文名」・『図書名』・巻号数
32	青森県立郷土館	1984	『特別展図録 蓑虫山人』土器図石器図録
33	太田 和夫	1986	「蓑虫山人の作画の様式と態度」『秋田県立博物館研究報告』第 11 号
34	関西大学博物館	1995	『展示図録』
35	庄内 昭男	2002	「資料紹介『蓑虫山人画紀行』から」『秋田県立博物館研究報告』第 27 号
36	茨城県立歴史館	2002	「江戸から明治時代の考古学者－栗田寛」『特別展 考古紀行いばらき－考古学に魅せられた人々』図録
37	塩野 博	2004	『埼玉の古墳一大里』『埼玉の古墳一児玉』『埼玉の古墳一比企・秩父』さきたま出版
38	根岸友山・武香顕彰会 編	2006	『根岸友山・武香の軌跡』さきたま出版会
39	青森県立郷土館	2008	図録『蓑虫山人と青森』－放浪の画家が描いた明治の青森－
40	大竹 和	2014	「関西大学博物館所蔵上中条出土人物埴輪 (M Y-K2006 巫女) について」『阡陵』No.67
41	日高 慎 他	2014	『甲塚古墳』下野市埋蔵文化財調査報告書 1 1
42	重田 正夫	2014	「明治期における武蔵の「好古家」根岸友山と武香」上『熊谷市史研究』第 6 号
43	重田 正夫	2015	「明治期における武蔵の「好古家」根岸友山と武香」下『熊谷市史研究』第 7 号
44	山口 卓也	2018	「蓑虫山人の片口土器」『阡陵』77
45	大田原 慶子	2016	「(研究ノート) 蓑虫山人とゆかりの人々」『青森県立郷土館研究紀要』第 40 号
46	新井 端	2019	「好古家根岸武香の文化活動とその交友」『熊谷市史研究』第 1 1 号
47	徳田 誠志	2020	「尚古写生と根岸武香の所蔵品について」『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究Ⅲ』近代博物館形成史研究会
48	弘前大学	2020	図録『弘前大学の考古学』弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター
49	新井 端	2021	「上中条出土埴輪群像」について―人物埴輪のイコノグラフィー―」『熊谷市史研究』第 13 号
50	大田原 慶子	2021	「蓑虫山人が夢見た博物館」『青森県立郷土館研究紀要』第 45 号
51	新井 端	2021	「根岸邸の古器物陳列場について」『人文資料形成史における博物館学的研究 Ⅰ』－根岸友山・根岸武香旧蔵資料の研究と公開－ 近代博物館形成史研究会
52	内川 隆志	2022	『『榎園好古図譜』第一冊について』『人文資料形成史における博物館学的研究 Ⅱ』－根岸友山・根岸武香旧蔵資料の研究と公開－ 近代博物館形成史研究会
53	山名 貫義 他	～ 1878	『古器物図一ハニワ出土稿』明治時代 東京国立博物館列品番号 P-4095
54	国立国会図書館	1789～1798	藤貞幹『集古図』国立国会図書館デジタルアーカイブ 請求番号 玄 201
55	国立国会図書館	明治	「土器諸図」『甕山文庫』国立国会図書館デジタルアーカイブ
56	早稲田大学図書館	明治	「成山帖」乾坤 市島春城寄贈資料
57	望月昭英・田附勝	2020	『蓑虫放浪』国書刊行会 ※蓑虫山人の生涯と画業をまとめた最近の好著

『榲園好古図譜』と柏木貨一郎

内川 隆志

はじめに

根岸武香が編んだ『榲園好古図譜』⁽¹⁾は、彼が蒐集した埴輪や土器・古瓦・武具・玉類などの考古遺物を中心とした四冊から成る。大きさは、縦 37.3cm × 横 26.5cm を計り、布貼りの表紙と裏表紙には手書きの桜花・菊花・杜若・撫子・桔梗など各種の花柄が描かれ、右上端には 2cm × 1.2cm の貼紙が糊付けされ、墨書の符号が記されている。本紙は折本ではなく厚葉の鳥の子紙を小口で 2 枚張り合わせ施風葉状に仕立て、背もくるまずに直に張り合わせた装丁を採用している点が特徴である。制作年代は第三冊に「上野國碓氷郡豊岡村大字豊岡字馬引明治三十一年五月五日所出」と記載されるところから少なくとも武香が没する明治 35 (1902) 年の 4 年前まで続いていたことが理解できる。名称については、明治 36 (1903) 年 6 月 20 日の武香没後一年の追悼号として編まれた『東京人類学会雑誌』に柴田常恵が「根岸君が所蔵品を圖寫せし題號未定の古物畫帖」と記しているように⁽²⁾、この時点でも同図譜の名称は不明のままであった事が理解できる。一方、同年 12 月 10 日に催された集古會有志が武香の一周忌として催した「故根岸武香翁追悼會」の記録⁽³⁾によると絵師の廣田華州が『故榲園根岸翁遺墨古物寫生帖』を出陳しており、これが本稿で紹介する『榲園好古図譜』四冊の内の一冊を示すもので、追悼会参加者に示す必要性から暫定的に命名したものなのか、あるいは現在国会図書館の青山文庫に収められている『骨董集』⁽⁴⁾のうち、各地の旅先で古物の模写び加えて墨書で細かく記録した部分が所載されている一冊を指しているのかは判然としない。後者であるなら「遺墨古物寫生帖」の名称に合点がいくところである。いずれにしてもここに記録された『故榲園根岸翁遺墨古物寫生帖』は、『榲園好古図譜』を指したものでなさそうである。よって本図譜は、恐らく未完成の段階で主を失った後は、命名されないまま紆余曲折を経て今日に伝わったものである。また、武香は生前考古図録の出版を企画していたことが山中笑 (1850-1928) によって記録されており、本図譜はその私家版ともいえる位置付けであったことが想定される⁽⁵⁾。本稿では『榲園好古図譜』図譜に描かれた数多の蒐集品を詳細に描いた絵師について若干の考察を試みるものである。

1 『榲園好古図譜』の内容

具体的に『榲園好古図譜』四冊の内容をみていくこととする。第一冊は、表紙の右上端に 2cm × 1.2cm の貼紙が糊付けされ、墨書の記号「出一二四」が附されている。見返しには「古物図根岸出品四帖」とあり、何処かに貸出した時の控えとも取れる紙片が残っている。1 頁から埴輪の描写が続いており、個々の埴輪には一・二を除いて「三」～「七四」まで割印のある貼紙による墨書の通し番号がふられている。所載されている埴輪のうち、現状で所在が判明しているものについては、すでに報告したが冒頭の「四」には、「武蔵国北埼玉郡上中条村堀地一ツケ獲 明治九年十二月二日」とあるように埼玉県熊谷市上中条字日向島出土 (鹿那祇東古墳) で武香の寄贈によって帝室博物館に寄贈され、現在重要文化財指定を受けている短甲武人埴輪が描かれる⁽⁶⁾。「七」と「八」の間には、柴田常恵 (1877-1954) がこの図譜を見て「根岸君が所蔵品を圖寫せし題號未定の古物畫帖に、其發掘の模様等に就き詳細に自記せらるゝこと左の如し」として『東京人類学会雑誌』に全文を紹介している⁽⁷⁾。「七二」と「七三」の間には、明治 11 (1878) 年、H.v. シーボルトが根岸家を訪問した記念として贈ったテラコッタ人形が描かれる⁽⁸⁾。これには箱書きが残っており、「グリシャ国土偶人 二千年外墓二埋葬セシモノ ヘンリーフホンシーボルト寄贈 榲園主人

」とあり、武香自らが揮毫している。「七四」以降には須恵器、土師器、山茶碗などの遺物が掲載される。またここに描かれた重圏文鏡・双孔円盤（鏡形石製品）、勾玉形石製品についても根岸家で所在が確認できた資料であり、すでに新井端によって報告がなされ『武蔵国大里郡吉見村誌』に「甲山村字雷船木山下明治十一年五月廿五日 堀地所獲 大サ如图」と記録されている事から、その出土地と出土年月日が明らかとなっている⁽⁹⁾。特に令和3（2021）年に、実物が根岸家で再発見された重圏文鏡については、徳田誠志によって古墳時代前期における列島全体の地域間交流や用途を考える上で極めて貴重な資料であることが指摘されている⁽¹⁰⁾。

第二冊の表紙の右上端には2cm×1.2cmの貼紙が糊付けされ、同じく墨書の記号「出一二四」が附されている。冒頭には、現在も根岸家で所有される全長96cmを計る大型石棒が描かれその両端部の形状は原寸大の大きさで面相筆による薄墨で描写されている。以下石棒類が21点ほど描かれこれらのうち9点と独古石1点が神田孝平の『Notes on Stone Implements of Japan』に所収されている⁽¹¹⁾。また、縄文時代の打製石斧6点、磨製石斧55点、脚付石皿1点、石鏃361点、石匙22点、石錐3点その他の石器類が描かれ、これらのうち石鏃3点が神田孝平の『Notes on Stone Implements of Japan』に所収されている。また、土偶1点、縄文土器19点が描かれ、このうち縄文土器10点が根岸家に現存する。

第三冊の表紙の右上端には2cm×1.2cmの貼紙が糊付けされ、やはり墨書の記号「出一二四」が附されている。1頁から瑪瑙や碧玉勾玉・管玉・ガラス小玉・切小玉が連なる装身具や子持勾玉、金環などが描写され、明治6（1873）年に伊勢神宮や大和天皇御陵を巡拝し老婆から三輪山で拾った大白石（紡錘車）を譲り得た話などの回顧談を記している⁽¹²⁾。さらに、弥生時代の銅矛、剣形の石製模造品や明治31（1898）年5月5日に上野国碓氷郡豊岡村大字豊岡字馬引から出土した頭椎太刀や古墳時代の刀装具・馬具類・馬鐸・鈴釧・直刀・刀子・鉄鏑・鉄鏃・冑、古代の百万塔・八綾鏡、中世の鰐口・懸仏・和鏡・江戸時代の鉄鏡など武器、武具、仏具等がまとめられている。これらのうち、古墳時代の六鈴鏡については現在國學院大學博物館の所蔵資料となっており、文化年間に発掘され、柴田常恵（1905）、富岡謙蔵（1920）、考古学会（1920）、後藤守一（1926）、森本六爾（1928）らによって紹介されていることが新井端によって明らかにされている⁽¹³⁾。

第四冊の表紙の右上端には2cm×1.2cmの貼紙が糊付けされ、同じく墨書の記号「出一二四」が附されている。ここには武香が蒐集した古瓦102点の原拓が貼り込まれている。その仕様は個々の瓦を26.5cm×37cmの版面に一枚の宣紙に数点の古瓦を採拓したものを軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦・堤瓦などを混在させ無造作に配置したものとなっており、種別に分類整理したものではなく、どちらかという見た目のデザイン性を重視したものと言える。ここに掲載されている古瓦については、根岸家に現存する119点のうち軒丸瓦10点中4点、軒平瓦20点中13点、平瓦18点中12点、文字瓦（軒平瓦・平瓦・丸瓦・堤瓦）62点中56点、総計85点が確認できる。これらの古瓦の来歴に関しては、すでに新井端による研究によって友山・武香とも交流の深かった吉見の内山作信や比企郡幾川の小室元長、国学者の畠山如心齋ら好古家た



図1 『榎園好古図譜』第一冊の表紙（個人蔵）

ちとの交流によって入手し、武蔵国分寺の訪問や集古会への出陳など、関係文献を紐解いて明らかにしている⁽¹⁴⁾。

2 『榎園好古図譜』第二冊・第三冊と『石器寫図』との比較

四冊に及ぶ多数の蒐集品を詳細に描いた『榎園好古図譜』の絵師についての具体的な情報はどの図譜にも認められないものの、根岸家と関わりの深かった廣瀬華州の関与が濃厚であるが、あきらかに広瀬とは異なる技法も認められることから別絵師との関係性も推定される。特に第二冊の石器類や第三冊の武器・武具類の作画に関しては、武香とも親交のあった柏木貨一郎⁽¹⁵⁾の作風に極めて近似する筆法で描かれていることが指摘できる。柏木貨一郎は、明治8(1875)年に武香から土偶人の譲渡をうけ、明治11(1878)年には、根岸家を訪問、吉見百穴、黒岩横穴墓群を踏査し16基の横穴について平面、断面、側面について実寸を添えた詳細な記録を残し、これを機にH.v.シーボルトの現地案内を乞うなど武香との関係性が深い人物である⁽¹⁶⁾。柏木は、町田久成らに卓越した画技が認められ、明治5(1872)年の壬申検査の一員となった人物として知られている。また、明治4(1871)年に開催された大学南校物産会、古物之部に「一勾玉雷斧石磐石釧類九十六品右柏木政矩出品」と記録されているように、魚類化石と共に96点に及ぶ石器類を出品し、その内49点を柏木が自ら図化した『石器寫図』として記録され現存している。関西大学博物館の本山彦一蒐集資料には、その内独鈷石と両頭石斧など17点の石器が確認されている。『石器寫図』に記録された勾玉や石器の描写と『榎園好古図譜』第二・三冊に描かれた表現等の類似性から柏木の濃厚な関与を想定し得るところである。とりわけ第三冊に所載される勾玉2点が『石器寫図』に柏木の藏品として描かれている点は柏木が武香の蒐集品である子持勾玉を譲り受け、自ら記録したものと推定され(図3)、描写の類似性から『榎園好古図譜』第2・3冊の遺物を記録した人物としての蓋然性は高いものと思われる。その他の石器図から技法的な共通性を見てみよう。

両者の絵画表現に共通する筆法として、まず面相筆による細い輪郭線によって外形を描写した後、質感、色彩を忠実に表現する点で共通性が認められる。輪郭線の描き方にも実線の間を抜く癖などが一致する(第4図)。『石器寫図』には、遺物の外形を写し取る際に現物を紙面に置いて細い針による測点の痕跡が観察され、近代考古学における実測図の製作と同様の手法が採用されていた事実が認められる。第5図に示した実物の子持勾玉(関西大学博物館本山彦一コレクション)と『石器寫図』の図を比較しても、ほぼ正確な測点によって形状を写し取っている事が理解でき、第6図の磨製石斧などは、顔料の滲みを上手く利用して石質の表現を工夫している点などは技術的にみても両者は極似することが指摘できる。また、第7図に示した根岸家に現存する磨製石斧2点と『榎園好古図譜』第二冊に所載される図を見ても、外形の正確さや色調の繊細な表現など実物の入念な観察によって描かれていることが理解でき、『石器寫図』の作者と同一人物による絵画技法が『榎園好古図譜』にも反映されている事が明らかであろう。



図2 『石器寫図』(個人蔵)

おわりに

以上、『榧園好古図譜』第二冊・第三冊と柏木貨一郎著『石器寫図』との比較から、両者の類似性を絵画技法の側面から指適した。幕末維新时期から明治にかけて好古家として名を馳せた柏木貨一郎は、明治5(1872)年の社寺宝物調査(壬申検査)に文部大丞町田久成、文部省六等出仕内田正雄(1839-1876)、文部省八等出仕蜷川式胤(1835-1882)らと共に古器物の写生のために同行するなどその画技が中央にも認められるほどの腕前であった。またその最中、仁徳天皇陵古墳の前方部で竪穴式石槨と長持形石棺、金銅製甲冑、ガラス器などが発見された際の石棺、甲冑等の作画者として柏木の名が知られている。石棺発見時に柏木がその記録の任に就くことになった経緯は、社寺宝物調査で正倉院の勅封開扉にあたり、京都滞在中の宮内少丞世古延世に、税所県令が使いを送り指示を仰いだ事にある。この時、まさに仁徳陵における石棺発見の報が入り、随行していた柏木に直接記録の要請があったのだろう⁽¹⁷⁾。当時の実際の動向記録として、天理大学附属図書館が蔵する小杉楡邨(1835-1910)編纂の稿本『徴古雜抄』図画一上に収録された『古川躬行大山陵より出でし石槨甲冑刀劍玻璃等の事に就ての考案』に小杉が明治5年の発見に際し実見する機会を得た顛末を記し、さらに小杉が柏木とともに現地を見たこと、図の写しを柏木に依頼したことが記されている⁽¹⁸⁾。このように世に知られた好古に通じた作画者である柏木と親交のあった根岸武香が自身のコレクションの作画を依頼するのは実に自然の流れであったに相違なからう。両著に残された柏木の手がその事実を物語っているのではなからうか。

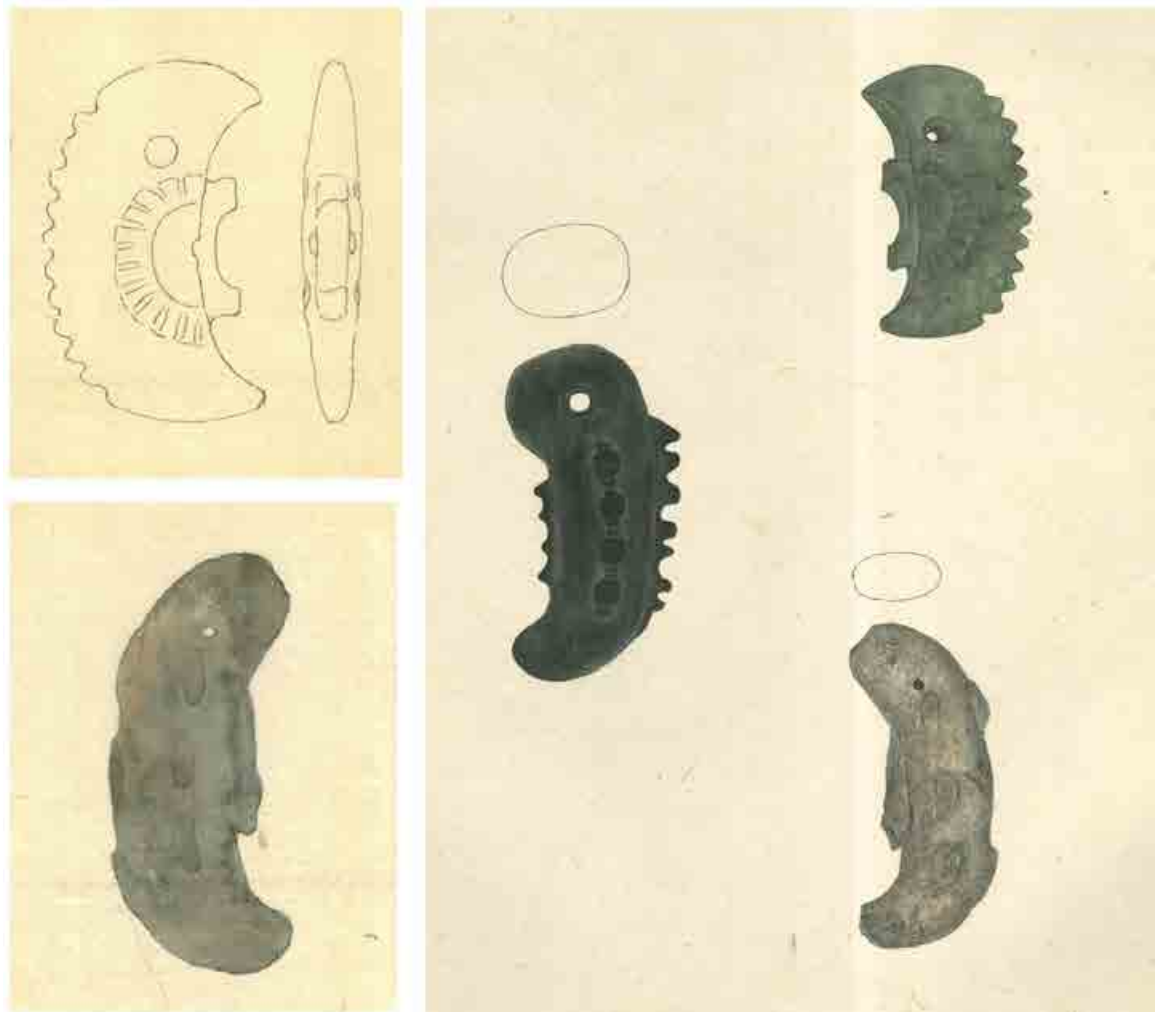


図3 子持勾玉『石器寫図』所載(左上下2点)と『榧園好古図譜』第三冊所載(右上下2点)

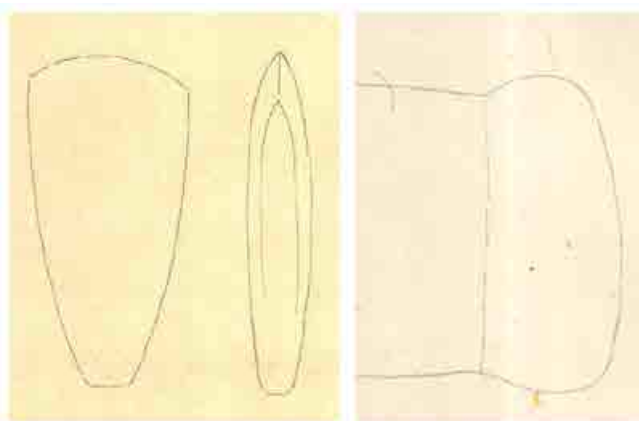


図4 『石器寫図』(左)と『樞園好古図譜』第二冊



図5 子持勾玉(模作)右写真(実物)(関西大学博物館蔵)左『石器寫図』

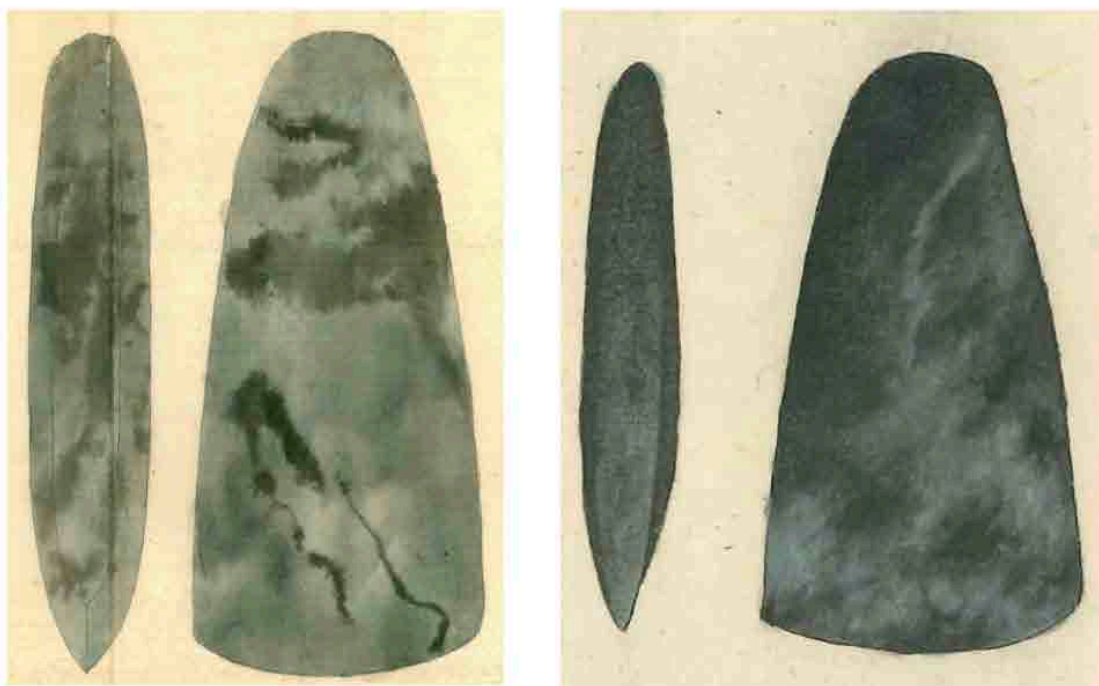


図6 『石器寫図』(左)と『樞園好古図譜』第二冊所載の磨製石



図7 磨製石斧 右写真(実物) 左『榲園好古図譜』第二冊所収図

註

- (1) 名称がなかったこの図譜を武香の雅号である「榲園」と好古をよくした武香の業績を称える意味を込めて、『榲園好古図譜』と命名することとした。
- (2) 柴田常恵 1903「武蔵の古墳」『東京人類学会雑誌』第18巻第207号 p.345
- (3) 集古會記事「故根岸武香翁追悼會」1903『集古會誌』甲辰卷之一 p.20-21
- (4) 大沼宜規 2012「ある好古家のコレクション 根岸武香と甲山文庫—国立国会図書館デジタル化資料搭載を契機として」『国立国会図書館月報』No.620 p.29
- (5) 山中笑 1903「故根岸武香君の辭世に就いて」『東京人類學會雑誌』第207号 p.374
- (6) 内川隆志・樋口典昭 2022「『榲園好古図譜』第一冊について」『人文資料形成史における博物館学的研究Ⅱ—根岸友山・武香旧蔵資料の研究と公開—』
- (7) 柴田常恵 1903「武蔵の古墳」『東京人類学会雑誌』第18巻第207号 p.345
- (8) 内川隆志 2020『古物を守り伝えた人々好古家たち』國學院大學博物館 p.14
- (9) 新井端 2015「甲山根岸家資料報告(1) — 考古資料・古瓦 —」熊谷市調査研究報告書第1集
- (10) 徳田誠志 2022「根岸武香旧蔵の重圈文鏡について」『人文資料形成史における博物館学敵研究 - 根岸友山・武香旧蔵資料の研究と公開』Ⅰ 近代博物館形成史研究会 pp.12-26
- (11) 神田孝平 1884『Notes on Stone Implements of Japan』
- (12) 註(7) pp.365-366
- (13) 新井端 2021「國學院大學博物館蔵「六鈴鏡」- 根岸武香遺愛の鈴鏡について -」『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究Ⅳ』平成29年度科学研究費助
- (14) 新井端 2015「第Ⅰ章 根岸家資料について」『青山根岸家資料報告(1) — 考古資料・古瓦 —』熊谷市史調査報告書 第一集 熊谷市教育委員会 pp.6-15
- (15) 幕末から明治にかけて古美術鑑定家、蒐集家として知られた柏木貨一郎(1841 - 1898)(諱は政矩、号は探古斎)は、義父柏木因幡から江戸幕府小普請方大工棟梁を継いでまもなく明治維新後をむかえて職を失い乍らも、古美術蒐集家として悠々閑々の日々を過ごした。明治5(1872)年には、蒐集家としての才と画の技量を見込まれ、町田久成(1838 - 1897)、蜷川式胤(1835 - 1882)

等と共に古社寺宝物調査（壬申検査）に随行し、後に博物館御用掛のポストに就いた。古美術や古書などの鑑定に長じ、国宝「源氏物語絵巻」を所持した高名な美術品蒐集家、古代史研究者、画技に優れた文化財の記録者でもあり、建築家としては、維新後も日本建築に拘り、その作品としては三井有楽町集会場、飛鳥山渋沢邸などが有名である。その事績については、内川隆志 2020「好古家柏木貨一郎の事績」『「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究 III」「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究」（基盤研究 B 研究課題番号 17H02025 研究代表 内川隆志）に詳しい。

- (16) 鎌形慎太郎 2020「古銭収集をめぐる明治期好古家の様相 - 根岸武香の蒐集とその交友 -」『「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究 III」「好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究」（基盤研究 B 研究課題番号 17H02025 研究代表 内川隆志）によると。明治 8（1875）年に根岸武香より「土偶人」を譲り受けて以降接点を持った貨一郎は、古銭蒐集の面でも影響を持って交流した。武香の古銭蒐集は晩年に編じた『榎園泉史稿本』『榎園泉貨稿本』（国会図書館青山文庫）などの未定稿本が残されているように熱の入ったものであった。明治 13（1880）年の「愛泉家一覧」には前頭に位置付けされた柏木貨一郎を筆頭に、松浦武四郎と共に名を連ねるほどであった。特に柏木没後その遺言によって幾度かに分けて所蔵の銭貨が譲渡されている。
- (17) 蜷川式胤の『奈良の筋道』には、「柏木モ用事是迄ト申渡ス也（中略）柏木氏ハ夜船ニテ上京也」とあり、明治 5 年 9 月 7 日にはお役御免となっている。また、17 日には「柏木モ今夕ヤ大坂へ出立ノ事」とあり、同月 19 日に仁徳陵で石棺と甲冑の絵を描いている（米崎清実 2005 『奈良の筋道』中央公論出版部 p.294・326）。
- (18) 白神典之 2012 「明治壬申年仁徳御陵前方部石槨顛末考Ⅱ - 天理大学附属天理図書館蔵『徴古雑抄』図一上及び『古制徴証』より -」『堺市博物館研究報告』第 31 号 堺市博物館 p.83 (51)-82 (52)

根岸家古物陳列場の建築について

金出ミチル

1. はじめに

根岸家長屋門の西側に続く塀の先に、明治時代中期に設けられた古物陳列場が現存していることが、近年の調査によって明らかにされている。代表的な既往研究として、宮瀧交二「大里町兜山・根岸家の「蒐古舎」について—埼玉県博物館発達史の研究 1」『埼玉県立博物館紀要』29（2004.3）所収及び新井端「根岸邸の古器物陳列場について」近代博物館形成史研究会『人文資料形成史における博物館学的研究 I—根岸有山・武香旧蔵資料の研究と公開—』（2022.2）所収があげられる。

本稿では、現地で行った陳列場の観察、実測、写真撮影にもとづき、建築の特徴を明らかにし、往時の形式の復元を試みる。ここでは便宜的に、陳列場の各室を中央部・南棟・西棟と呼び分けることとする。

絵図に見る屋敷地

根岸家の屋敷の状況を示す史料として、天保 12（1841）年の銘のある絵図「甲山村根岸氏校内之図」（埼玉県立文書館所蔵根岸家文書、根岸家 3592。本稿では天保図と呼ぶ。）が参照されてきた。敷地全体を対象とし、建築の略平面と外構を描いたこの図が江戸時代末における状況を示すと考えられ、今までに埼玉県及び旧大里町の主催による企画展などで紹介されてきた。

古物陳列場出現の半世紀前に精度高く描かれた天保図には、主屋、土蔵、酒造施設、長屋門及び三餘堂書院を含む建物群が見られ、屋敷地周囲には塀が回されている。現在の敷地と比較すると、西塀の位置が現状より内側に描かれ、この北方には生垣がある。根岸家の土地境界の変遷や道路の拡幅について精査が必要であるが、当時の屋敷の構成が後年建てられる陳列場の配置に影響を及ぼした可能性がある。

2023 年には明治 31（1898）年に作成された「家屋台帳」（根岸家所蔵）の存在が明らかになり、ここに古物陳列場の名称が略平面図とともに初見されることを新井端氏よりご教示いただいた。台帳には各建物の規模や構造が詳細に記され、図面には建物ごとに間と尺による寸法値が入っている。ここに見られる陳列場平面の形状と規模が現況と一致することから、この時点までに完成していたことが裏づけられる。



図 1 根岸家の正面を南から見る

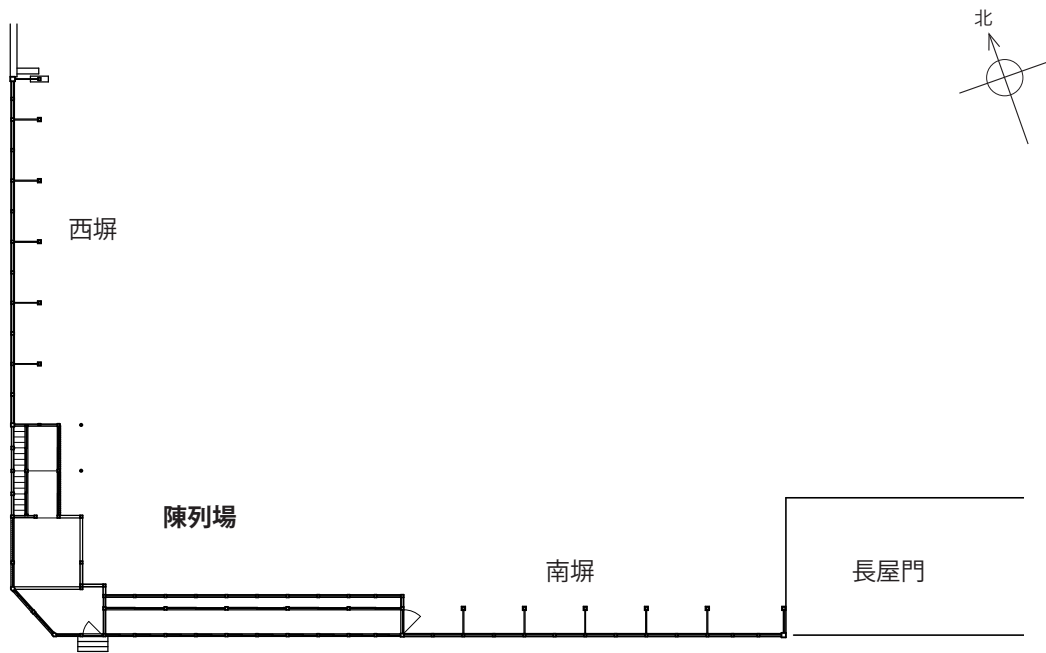


図2 根岸家陳列場 配置図 s=1/300

※ 本章で用いる名称を示す

陳列場は尺寸を単位として計画されている
 1尺=303ミリ
 南棟 棚奥行 455ミリ (1.5尺)
 西棟 棚奥行 545ミリ (1.8尺)

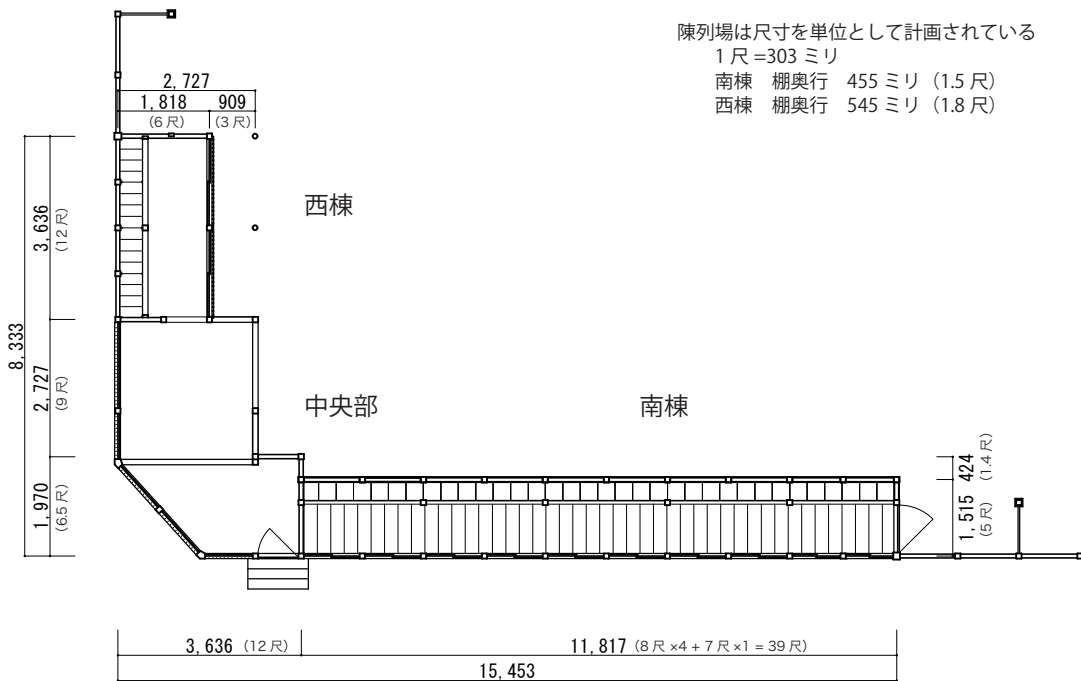


図3 根岸家陳列場 現況平面図 s=1/150

陳列場はいつ建てられたか

今までの研究では、根岸家古物陳列場への訪問が記述された文献資料に基づき、建物は明治20年代後半までに建てられたと想定されている。今回の調査を通して、建築時期を直接示す資料は発見されなかったものの、建物に使われている釘に注目したい。一般的に、開港地のような特殊な環境を除けば、手打ちの和釘が機械製造の洋釘に置き換わっていったのは明治20年頃からとされる。この経緯には地域差があり、また在庫の釘が使用されることもあるので決定的な根拠とはなりにくい。参考にはなる。目視で確認できた範囲では、南棟の陳列棚の床板が洋釘で打たれている。これに対して南棟東端外部では、土台の隅に幕板を打ちとめる釘に大きな巻き頭の和釘の使用が見られる。後者は、長押のような化粧材を扱う意識のもとで、大工が手持ちの釘の中から選んで用いたのかもしれない。他の部位については未確認ながらも、建築当初から洋釘の使用が確認されているので、陳列場建設時期の上限を明治20年代以降とすることと矛盾しない。今後、修理などの機会に、建設の経緯を示す墨書が構成部材に発見される可能性もある。

2. 建物の特徴

古物陳列場は、敷地の南西角を回る塀とひと続きの構造からなる。両端に塀が続くL字型平面の平屋は、玉石積みの基壇上に立つ。陳列場の各棟は、塀同様に土台の上に立つ。柱の断面は3.5寸角を標準とするのに対して、隅柱は他より太く5寸角とし、直接基礎石に立つ。

屋根は葺き足の短い棧瓦葺に目地漆喰を施す。棟積みは熨斗瓦^{のし}2段に雁振瓦^{がんぶり}、熨斗瓦下には面戸漆喰を塗る(図8)。軒廻りは疎垂木^{まぼらだるき}、中央部隅の通り側では化粧垂木を扇状に配置する。

中央部(図7,9)

西棟の東面に取りつく杉磨き丸太の柱と桁からなる下屋^{げや}が、陳列場へのアプローチとなる。庇下の地面に古瓦を敷き詰めた先に沓脱石が置かれ、開き戸を経て室内に入る(扉と沓脱石は欠損)。

平面を大きく隅切りされた中央部は、大正から昭和初期にかけて郵便局として使用された際、南面に出入口と階段が設けられ、室内が部分的に改造されたものの、痕跡や古写真より旧状を知ることができる。

敷地外部に面する窓は閉鎖的で、上下に開閉する擦り上げ戸と内側に障子戸を建て込み、この外側に亀甲網と鉄格子を嵌めていた。一方、庭に向けては開放的で、池に張り出す縁があり、腰付きの障子戸と雨戸が建て込まれていた。他と比べて建具類が重厚でないことから、中央棟の入隅にある池には防犯上の機能を持たせたことが考えられる。なお池の護岸は、陳列場外周の基壇と同じ構造であることから、池は陳列場と同時期に造られたと考えられる。陳列場建設時には、塀を含めて基礎全長を造り直していることから、かなり大きな工事であったと想像できる。

室内の壁は土壁に鼠漆喰塗、天井は細い丸太に桜の樹皮を張った棹縁天井、壁の足元周囲に畳寄せが残ることから床は畳敷きであったことがわかる。(現在床は撤去されている。)

西棟(図6,10,11)

梁間6尺に奥行3尺の下屋が取りつき、桁行は12尺である。

室内から西棟への入口開口部は、上方に左官仕事で茶室の給仕口のような半円をかたちづくり、扉はない。土壁は鼠漆喰で仕上げられている。床板は節穴も見られる荒床^{あらゆか}で、周囲に畳寄せがあることから、部屋は畳敷きであった。西壁全長2間にわたる陳列棚には中段がなく、せいの高い展示品にも対応できる。棚前の空間の幅が南棟と比べて広く取られていることから、特別展示室のような用途がうかがえる。しかしながら、人が行き違いできる幅はあるものの、畳に座って展示品を鑑賞するほどの広さはない。庇の奥に位置する室内は昼間でも薄暗かったと思われ、何らかの灯具が用いられたのだろうか。

天井は木摺下地、砂漆喰に白漆喰上塗。漆喰塗のひび割れを防止するスサが塗り伏せられている。(木摺間の隙間が小さく、天井の漆喰仕上げはほとんど落下している。)

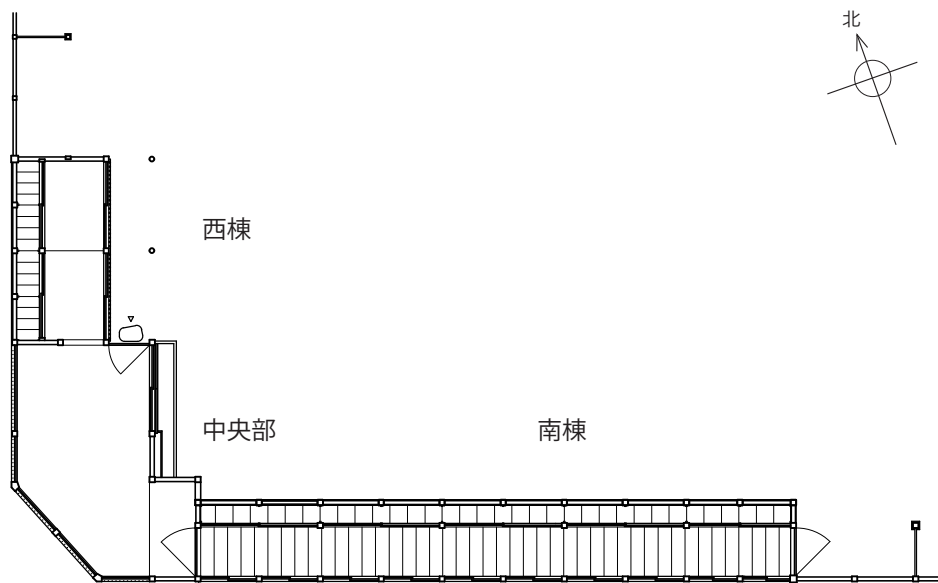


図4 根岸家陳列場 復元平面図 s=1/150

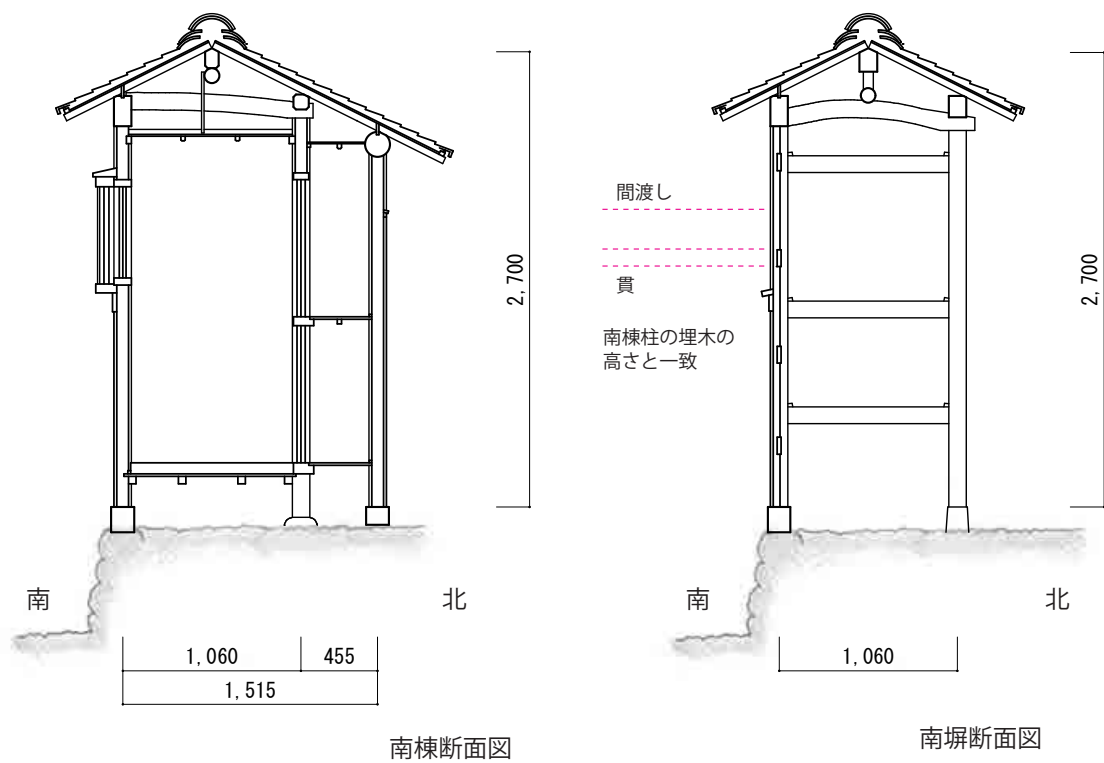
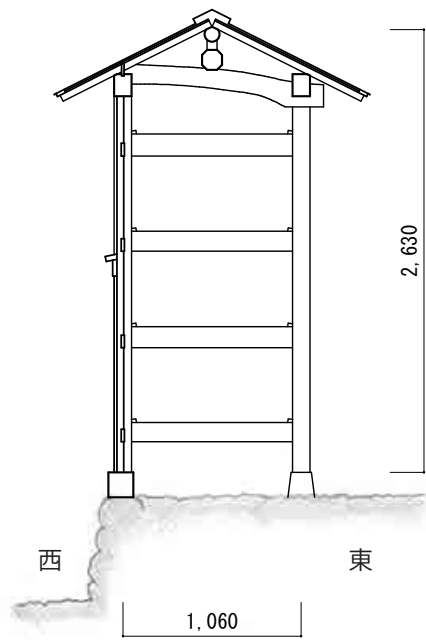
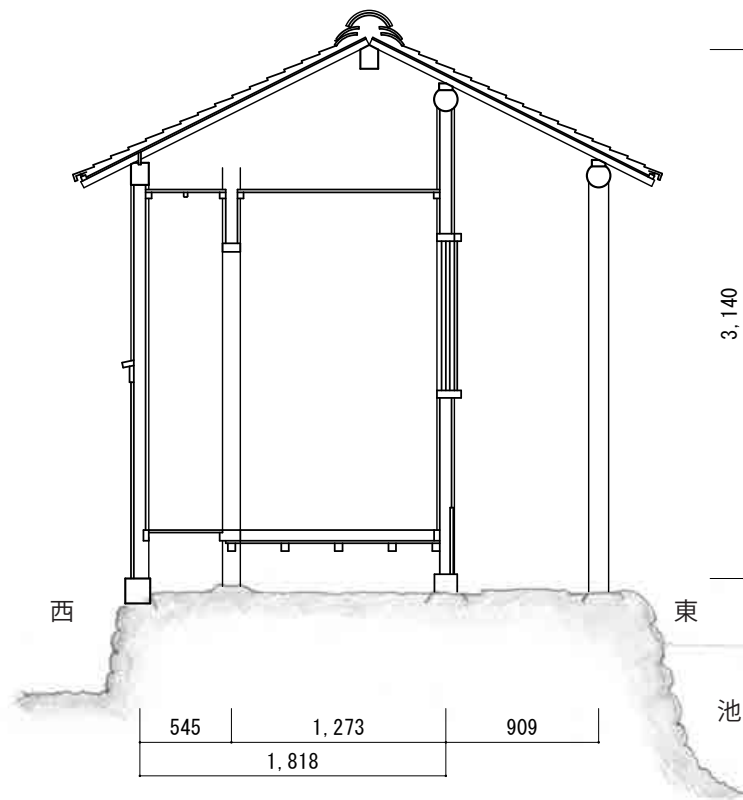


図5 根岸家陳列場 断面図(1) s=1/50



西塀断面図



西棟断面図

図6 根岸家陳列場 断面図(2) s=1/50



天井竿縁は桜の樹皮を張った丸太からなる

画面中央の南棟陳列場への入口は現在ふさがれている。南棟の奥行5尺より幅を広げて6尺（1間）の間口を確保している。点線で示す範囲を地板とし、床（とこ）のように飾られたのか



中央部 室内南を見る。周囲の壁に畳寄せが残る

図7 陳列場中央部 室内（1）



屋根に葺かれている棧瓦が
西堀内に保管されていた。刻印はない
(上) 葺足の短い深切り瓦
(下) 軒唐草瓦の紋様



(上) 隅切りされた中央部の屋根
(下) 中央部庭側の屋根

図8 陳列場 屋根の棧瓦葺



雨戸を下ろした状態



←障子戸の溝

雨戸を上げ止める仕掛け
下方には障子戸用がある
←

←雨戸の溝

窓両脇の柱には2本溝があり、
外側に雨戸、内側に障子戸の擦り上げ戸
が建て込まれている

図9 陳列場中央部 室内(2)



西棟北側に続く西塀



古瓦敷き詳細



西棟の底下を進み、出入口に至る。画面左は池



出入口前は古瓦敷き



上図遠景 陳列場を北東から見る

図 10 陳列場西棟 外部



西棟入口を見る。この右手が陳列場への入口、当初は開き戸
画面右には障子戸が建て込まれ、池に張り出す小さな縁があった



西棟入口から奥を見る。西壁全長2間が展示棚。床は畳敷き、天井は白漆喰塗
窓には障子戸、外側に格子が取りつく

図 11 陳列場西棟 室内



南棟 南面全景



鉄格子敷居 雨戸敷居
窓外側には使用されなくなった敷居が残存。戸袋はない



南棟北面外壁 全長に竹網代が張られている



色に濃淡のある竹からなる網代



南塀

南棟

南棟東側に続く南塀は、南棟と棟続きである

図 12 陳列場南棟 外部



| 西棟 | 中央部 | 南棟 |

図 13 陳列場全景

なお、屋敷地内に面する窓は、障子戸の外側に一本溝の敷居・鴨居に格子建具を建て込むだけであり、南棟および中央部における鉄格子の採用とは対照的である。

西棟では、柵奥の柱には土壁が取りつき、柱表面の痕跡の有無を確認できない。一方、西棟の北に接続する塀は、棟通りの位置と高さが西棟とは異なり、小ぶりの屋根は鉄板葺であることから、後述する南棟に見られるような塀との共通点はない。なお、塀北端の屋根は寄棟で納められている。

南棟 (図 5,12,14-15)

南棟は、梁間 5 尺、桁行 39 尺、室内北側全長が上下 2 段からなる展示棚になっている。室内は土壁に白漆喰塗、棹縁天井。床周囲に畳寄せはなく、床板も西棟と比較すると仕上げがきれいであることから板敷きで使用されたようだ。薄縁のような敷物を用いたのかもしれない。側廻りの柱に見られる埋木補修は、後述するように陳列場が既存塀の柱を転用して造られた跡である。

現在開口部の外側には、後設の幅広縦格子が打ちつけられている。この内側には引き違いの障子戸が入っていた (建具は陳列棚に保管)。外部には雨戸用の 1 本溝からなる敷居・鴨居と、鉄格子をはめ込んだ敷居・鴨居が残っており、旧状がわかる。雨戸袋の痕跡は確認できず、今は敷居・鴨居の両端が塞がれている。

現在南棟への出入口は東端の外開き戸だけであるが、ここからは南塀の内側に降り立つようになり、通常来客を案内する場所ではない。陳列場に入る前にいったん沓脱ぎをしていることを考えると、ここは通用口のような扱いで、中央部から南棟西端に直接出入りするようになっていたと考える。

3. 陳列場の造作

陳列棚

西棟・南棟とも、陳列棚内の互いに向かい合う柱の一部に、高さ方向 1.6 寸 (49 ミリ) 間隔で稲妻型の段が加工された棚受けが残っている。他のすべての柱にも同じ位置に釘跡が確認できたことから、同材が各柱に取りついていたことが判明した。前後の棚受け間に、木材の目を長手方向とする角棒の先端をそぎ落とした棚板受けを嵌め込み、棚板を架け渡すことで、棚の高さを変えられる仕様である。図 14 の模式図のようにすれば、棚板厚さの制約もなく、板幅が乾燥により縮んでも脱落することはない。前後の傍



南棟室内 西を見る



棚には窓の障子戸が多数残されていた



桁

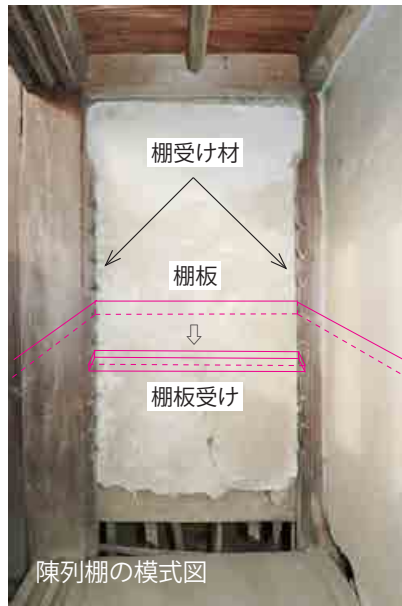
陳列棚の奥に見える杉磨き丸太長尺材の桁



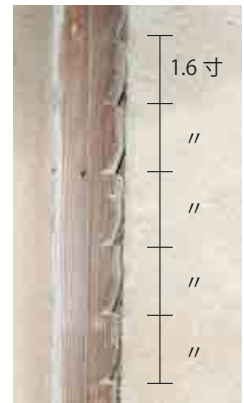
東端出入口上 墨書のある円盤(内容不明)



棚前面下り壁 土器をとめつけた額



陳列棚の模式図



棚受け材には
高さ方向1.6寸
(49ミリ)間隔で
刻みが入っている

図 14 陳列場南棟 室内

を斜めにして納める棚板では、精度高い加工が必要なうえ破損しやすく、経年による変形があれば使用上不都合が生じる。

棚の間口は7～8尺(2,121～2,424ミリ)と広いのであるが、棚板が中央でたわまないように棚受け材を立てる穴が棚下段の床及び上段の前端にあり、上方ではこれを棚内側の部材に釘打ちして止めつけたのであろう。対面する位置にある間口中央の棚奥のすべての柱にも、棚受けを止めつけた釘跡が確認できる。棚前面には2本溝の敷居・鴨居があり、ガラス戸のような内部の見える建具であったと思われる。

床はあったか

既往研究では、根岸家古物陳列場への訪問記で触れられた床の存在が取り上げられている。中央間から南棟への入口(がかつてあったと思われる)手前の空間はちょうど一畳の大きさで、天井も下り壁によって区切られている。床を地板とし、開き戸表面を壁に近い仕上げにすることで、踏み込み床として飾ることもできるだろう(図7左上)。南棟に行くために、明らかに床の形式をとる場所に踏み込むのは、身体の動作としてはばかられ、畳と同じ高さで続く地板であれば使いやすい。

向かって左の柱には後年床を張るための柱が添えられ、右の柱は合板で塞がれているため、柱足元の痕跡が確認できない。今後、南棟西端と共有される柱足元にある板じゃくりとあわせて納まりを調べたい。

他には、床に利用された場所として、西棟の陳列棚が考えられる。棚のしつらえ方によっては床に見立てた展示もできただろう。ただし、前述のように陳列棚前の空間は狭い。

4. 塀を改造して建てられた陳列場

南棟南面開口部の柱を見ると、すべての柱が同じ高さ・大きさで埋木補修されていることに気づく(図15)。これらは柱間に土壁を設けるための貫の仕口と間渡し穴の跡である。この痕跡は、陳列場の東側に続く塀の貫と間渡しの高さに一致し、屋根の構造も塀と共通する。また、棚前側の柱の一部には、痕跡を隠すために薄い板が打ちつけられた転用材が見られる。すなわち陳列場南棟は、塀の柱を巧みに取り入れて、増築されたものであることが判明した。

柱同士を繋ぐ梁も使用すれば効率的で、柱の位置を変えずに改造された可能性が高い。一方、回廊南側の柱の室内に見える面には、塀の控え柱とを繋ぐ貫穴がないことから、柱を180度回転して使用したのかもしれない。陳列場の外部では、窓上の下り壁は柱を見せない大壁、窓より下方は板張りとし、痕跡がある高さの柱表面は覆い隠されている。経緯は不明ながらも、塀の建設途中の計画変更として陳列場が建てられることとなり、既に貫穴が加工されていた柱を利用したことも考えられる。

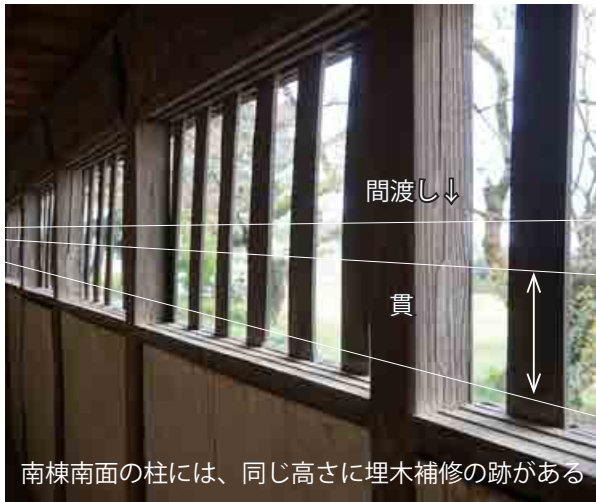
今後の課題として、陳列場の建設の経緯を示す痕跡や当初材に見る部材の新旧や風化の具合もあわせて詳細に観察することと、修理の機会があれば各部材の状態を調査することをあげておきたい。

塀の骨組を用いて建てられた陳列場には、厳選された数寄屋趣味の材料が新たに導入されている。中央部出入口前庇の柱と桁は杉材の磨き丸太からなる。また南棟庭側の桁には、同材の長尺ものが用いられている。さらに南棟の北面外壁全長は、濃淡の色合いの竹材からなる繊細な網代張りの贅沢な仕様となっている。中央部の細い丸太に桜の樹皮を張った天井棹縁とともに数寄屋趣味になっている。西棟への入口の意匠もこの一環である。

5. 復元考察

陳列場以降の改変

現地の観察より、古物陳列場に改変が加えられたのは、比較的近年の維持修理を除けば、大正から昭和期に郵便局、その後貸し家としての利用に際して間仕切り装置が変更された時に限られることがわかった。既往研究では、南面への階段と出入口の新設、及び中央部と南棟間出入口の壁への変更が指摘されている。



間渡し穴

貫穴

南塀の軸部 東を見る。画面右が南面

南棟柱の埋木跡と南塀では、貫と間渡しの高さが揃う。

図5 南棟と南塀の断面図参照

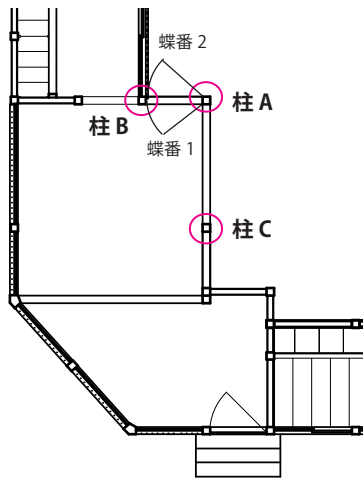
図15 陳列場南棟 南面柱の埋木詳細と南塀



図16 庭から見る陳列場



柱 B 柱 A 柱 C



蝶番 1：当初の内開き扉
柱 B には、蝶番 1 の開き戸
戸締り金物が残存
蝶番 2：後設の外開き扉



柱 A の痕跡



柱 B の痕跡

図 17 陳列場中央部 出入口痕跡



南面 鴨居及び下り壁
柱 A の痕跡



南面 敷居



東面 縁持ち送り

図 18 陳列場中央部 開口部痕跡

郵便局時には、中央部を南北に分ける位置に後設された無目敷居と根太掛けより、北半分を板敷き床の事務室としたことがわかる。南半分はモルタル塗土間（残存）の客溜まりとし、床面は南面出入口の内開き扉が開く高さにある。

他にも以下の変更があったことが判明し、痕跡より当初の姿を考察した。

中央部への出入口の扉の変更（図 17）

庭から中央部への出入口のある北東隅柱 A には、開き戸蝶番の痕跡が 2 組ある。当初の扉は、室内側に開いていた。無目鴨居下端にはこの戸当たりが見られ、柱 A に向かい合う西棟の南東隅柱 B には戸締り金物が残る。これに対して後設の扉は外開きであった。マイナスのビスで止めた蝶番は大きく、厚く重い扉に交換されている。今までの華奢な扉による戸締りでは心許ないと考えたのであろう。

この出入口に至る底下には、出土品の古瓦の破片が敷き詰められ、失われた沓脱石の足跡が残る。出入口を外開きに変更した時に、扉が沓脱石上の履き物と干渉するなどの不都合があって移動されたことが推測される。

庭に面する開口部の復元（図 18）

柱 A の南面には、2 本溝の敷居と鴨居の取りつき仕口、鴨居上には下り壁の痕跡が見られ、障子戸が建て込まれていたと考える。柱 A から 1 間南に立つ柱 C は新材に取り替えられているが、この南方の半間に雨戸袋が設けられ、障子戸 2 枚もこの裏に引き込めば、間口 1 間の開口部より、古物を観察するための採光と庭への眺望が得られる。

ここに 1 間半の開口部がとれるとさらに室内は開放的になるのであるが、柱 A - 柱 C 間の桁も柱と同時に取り替えられているので、柱の位置を含め旧状を知ることのできる痕跡は、もはや確認できない。

また柱 A の足元には、手摺付き縁の持ち送りの仕口がある。縁は人が降り立てるほど幅がなく、建物から少し離れた位置に池への落下防止の手摺を張り出すためであろう。古写真ではこの上に小庇がかかる。

以上を反映し、復元平面図の作成を試みた（図 4）。今後の課題として、建物が修理される機会が得られたならば、関連する資料・情報の参照とあわせて、時代を超えて継承されてきた希少な建物についてさらに研究を深めたい。

根岸家の古物陳列場の建築を通して、2 人の考古家根岸友山と根岸友香の兜山における活動拠点のひとつの詳細が明らかになってきた。三餘堂書院で接待され、縁から庭に降り出た来客たちは、樹木の合間から池越しに陳列場を目にし、これから数多くの宝物を目の当たりにする期待に胸を膨らませたことだろう。根岸家の屋敷地の一角をまもる建物は、この歴史を静かに、力強く伝え続けている。

陳列場現地調査 2023 年 3 月 27 日・11 月 4 日
調査者 太田陽子、金出ミチル

埼玉県熊谷市中条古墳群出土埴輪の考古学史的意義

徳田 誠志

はじめに

明治9(1876)年12月2日、現在の埼玉県熊谷市上中条の畑から多数の人物形埴輪が出土した。その中には現在東京国立博物館が所蔵し、重要文化財の指定を受けている武装男子埴輪と馬形埴輪も含まれている。そして同じ頃にこの地域で出土した埴輪の多くが、根岸武香の手元に帰することとなった。このことが今日まで続く、埴輪研究の第一歩となったものと考えている。

根岸武香についてはこれまでの研究成果においても報告されているように、埼玉県の名士として政治、経済に大きな貢献を果たしただけでなく、地元の遺跡や遺物の保護に大いに活躍したことが知られている。中条古墳群出土埴輪についても根岸がいち早く出土した埴輪を入手し、資料の散逸と破壊から救ったことはまさに僥倖であった。さらに根岸は埴輪を死蔵するのではなく、全国の好古家と情報を共有し、埴輪が考古学研究において重要な役割を果たすものであることを実証していった。

本稿では中条古墳群から埴輪が出土した経緯やその後の処理、そして好古家として交流の深かった神田孝平が入手した埴輪を紹介しながら、この資料が果たした考古学史的な意義を考えていくこととしたい。

1 『埋蔵物録』に残された記録

中条古墳群から出土した埴輪の詳細な出土地やその経緯については、すでに先学によって明らかにされている(犬竹2013、新井2021)。その研究によれば、明治9年12月2日に埴輪が出土した地点は、当時の上中条村字日向島1876番地であることが明らかにされている。さらに埴輪が出土した古墳については、鹿那祇東(かなぎひがし)古墳である可能性が高いことも指摘されている。但し古墳そのものは既に滅失しており、埴輪がどのように配置されていたかなどの詳細は不明である。また、埴輪が出土した日付についても同日だけでなく、何回かに分けて出土があったことが報告されている。

このように埴輪の出土地点、出土経緯についてはおおむね明らかになっているといえるが、本章では改めて出土の経緯とその後の処理について『埋蔵物録』に残された公文書によって見ていくこととしたい。この『埋蔵物録』についても先行研究があり(本村1991、時枝2001)、そのうち時枝の研究成果に導かれながら記述を進めていく。

それではまず『埋蔵物録』とは何かであるが、時枝が端的にまとめているように本史料は明治7(1874)年から昭和17(1942)年までに事務処理が終わった埋蔵物をめぐる公文書の綴りであり、全部で119冊に上る。公文書の内容については、各地において開墾等により土中から埋蔵物(現在の埋蔵文化財)が出土した際、当該の府県から博覧会事務局(後に内務省)宛てに報告がなされ、その報告に対する指令等が記された公文書が時系列に沿って編纂されているものである。

埋蔵物に関する明治新政府の課題としては、大きく2つの方向性が認められる。1つは未治定の陵墓を考証し決定していくために、陵墓の可能性のある土地や伝承地、あるいはその可能性のある墳墓を開墾などから保存するという課題である。そのための指令としては、明治7年5月2日に太政官達第五九号「古墳発見ノ節届出方」がある。もう1つが埋蔵物発見の届出先が「博覧会事務局」になっている通り、開設まもない博物館で展示すべき「古器旧物」を収集することを目的とするものである。この陵墓の治定と埋蔵物の取り扱いについては、明治14年以降には陵墓の考証資料として宮内省においても古墳等からの出土品を購入し所蔵することになるが、今回は明治9年に出土した埴輪についての論述であるので、この点は深く立ち入らないでおくこととしたい。

今少し明治初期における埋蔵物をめぐる法的な状況を見ていくと、明治9年4月19日太政官布告第五六号「遺失物取扱規則」が公布され、その「第六条」において土地に埋蔵された物品に関する規定が定められた。すなわちこの布告によって、埋蔵物を発見した場合には落とし物として公に届けことが定められた。このことは今日でも基本的には踏襲されているものであるが、この規則が公布されて以降は届け出を怠った場合や故意に隠匿した場合には罰せられることとなった。この「規則」の交付によって埋蔵物の届け出が義務となり、さらに明治10年9月27日 内務省甲第二〇号布達「遺失物取扱規則中埋蔵物ヲ掘得ル者処分方」により、埋蔵物のうち「古代の沿革を徴す」べきものについては、代価を支払ったうえで内務省が買い上げ、博物館の収蔵品とすることが規定された

このように中条古墳群から多くの埴輪が出土した時期における埋蔵物取扱いの法的根拠を理解したうえで、『埋蔵物録』に残されている公文書を見ていきたい。中条古墳群から出土した埴輪については、次の『埋蔵物録』に公文書が綴られている。

『埋蔵物録』明治13年（館史691）第8号「埼玉県黒岩村及北埼玉郡上中条村ニ於テ発掘ノ土器泥塑馬献納又ハ買上竝群馬県勢多郡西大室村ニ於テ土器其ノ他発掘ノ旨届出及同県緑野郡白石村ニ於テ発掘ノ劍鏡ノ他買上ノ件」

この表題からもわかるように、埼玉県・群馬県両県において複数の古墳から出土した埋蔵物についての報告と、その後の指示に関する公文書である。そのため膨大な史料となっているので、この中から上中条から出土した埴輪に関する記述を中心に見ていきたい。

綴られている最初の公文書は、明治12年4月17日に起案された「群馬埼玉両県江掘出器物届方之儀ニ付御照会」という博物館長町田久成から群馬埼玉両県の県令へ宛てたものである。内容を簡単に記述すると、両県において一昨年来古墳などから古器物の出土が話題となっていることから、明治10年の内務省甲第二〇号布達に従い報告することを求めたものである。すなわち明治10年に根岸らによって調査された黒岩横穴群から今日という須恵器などが出土したことは、新聞でも報じられたように広く世間に知られる事実となっていた。ところがこの件に関して埼玉県から報告がなかったために、内務省から状況を報告するようにとの指示がなされた。この照会に対し埼玉県からは黒岩横穴墓群から土器1個が出土しており、このことは博物館に所属している山名貫義（1836－1902年）も関与していることを報告している。そのうえで博物館に陳列するほどのものではないと考えたとの弁解を記す。この史料に登場する山名貫義は紀州和歌山藩の絵師山名広政の子として江戸に生まれ、明治維新後は内務省に出仕し、博物館の画工として活躍した人物である。そして明治9年には埼玉郡上中条から「泥塑馬」が出土しているが、これは明治10年の布達以前であったことを記述した後、地元から埼玉県令にあてた報告書が添付されている。

このやり取りから分かることは、博物館においては明治10年の布達に従って埋蔵物を処理するように求めていることと、黒岩横穴墓群の調査や上中条から埴輪が出土したことが中央政府の耳にまで届いているという事実である。もっとも埼玉県から提出された公文書にその名前があるように博物館所属の山名貫義が現地を訪れている以上、当然博物館の知る所であったといえる。そのうえで明治10年の布達に従って出土品を処理するという、内務省博物館の強い意識が働いたと考えられる。

その後の博物館と埼玉県のやり取りを見ていくと、同年8月19日の起案文において、黒岩横穴墓群出土した土器と上中条から出土した「泥塑馬」を博物館へ回送できるか否かを問い合わせている。埼玉県からは送付が可能であること、さらには送付にかかる費用についてのやり取りが綴られている。そして同年12月24日に起案された博物館から埼玉県へ宛てた文書では、「泥塑馬」は「博物館ニ可備置品柄」であるので、「代価金壱拾五円」で博物館が買い上げることが記されている。黒岩横穴墓から出土した土器については「代価金壱円」にて買い上げる旨指令されているが、この土器に関しては埼玉県から無償譲渡することとなった。このようなやり取りを経て明治13年3月5日に起案された文書において、博物館から

埼玉県へ「泥塑馬」と土器 1 個について、その代金 15 円と送料 4 円 95 銭の支払いについて指令している。そして最後に綴られている文書は、同年 3 月 17 日付の埼玉県から博物館に送付された文書であり、先の金額を受領したことが記されている。

これらの公文書に記されている「泥塑馬」が、「馬形埴輪」であることは言うまでもない。そしてこの馬形埴輪は、現在でも東京国立博物館に所蔵されており（列品番号 J-838）、さらに重要文化財に指定されている（指定番号 00177）。

以上のように上中条から出土した埴輪について『埋蔵物録』に残された公文書を通して、その取り扱い状況を見てきた。これらの公文書からは、明治 9 年 4 月 19 日太政官布告第五六号「遺失物取扱規則」や、翌年の内務省甲第二〇号布達「遺失物取扱規則中埋蔵物ヲ掘得ル者処分方」に則って出土した埴輪が処理されたことが明白である。そしてもっと重要なこととしては、埴輪が「古代の沿革を徴す」べきものであり、なお且つ「博物館ニ可備置品柄」という認識が芽生えたことを指摘できる。この時期においてはまだ「考古学」という用語が用いられることはないが、埴輪が単に好古家が収集するものではなく、博物館に収蔵すべき埋蔵物であることを明確に位置づけることとなった。すなわち埴輪が愛玩するもの、あるいは珍奇なもの、あるいは信仰の対象とするものではなく、学術資料として博物館に収蔵された最初の事例となったものである。このことをもって、今日に続く埴輪研究の嚆矢として位置づけておきたい。

但し、疑問点も少なからず残っている。それは『埋蔵物録』に残されている公文書には地元から埼玉県への報告にある通り、上中条からは馬形埴輪だけではなく「土焼軍人形」、すなわち武装人物埴輪等他の出土品があったことが記されており、このことは博物館も当然承知していたものと思われる。しかしながら、公文書に取り上げられる埴輪は「泥塑馬」だけであり、ほかに出土した埴輪を改めて回収するような指示はなされていない。すなわちこの時点で根岸武香や、あるいは後述する神田孝平やほかの好古家の手元に収蔵された埴輪の存在は『埋蔵物録』からは知ることができない。なぜ博物館が馬形埴輪だけを購入したのか、ほかの埴輪については等閑視したかについては不明である。考えられる理由としては、すでに個人が入手したものを敢えて購入する意思がなかったこと、あるいは代表的な優品だけを博物館に収蔵することとしたため、あるいは一括出土資料としてすべての埴輪を入手する意思がなかったことも考えられよう。なお、冒頭に取り上げた武装男子埴輪（重要文化財）は明治 12 年の段階では根岸が所蔵しており、彼が逝去した後に東京国立博物館が所蔵することとなったものである。

2 神田孝平が入手した埴輪について

今回取り上げている上中条から出土した埴輪が現在どこに収蔵されているかについては、新井端によって詳細な追跡がなされている（新井 2021）。その研究によれば所蔵先が分からなくなっているものもあるが、判明しているものでいえばそのまま根岸家に残されているもの、東京国立博物館が所蔵するもの、そしてもう一つは神田孝平が入手し、その後に本山彦一の手を経て関西大学博物館に収蔵されているものに大きく分けられる。本章では関西大学博物館が所蔵する上中条から出土した埴輪を紹介していくこととしたい。

まず、神田孝平(1830 - 1898 年)について、略歴を記しておく。神田は美濃国(現在の岐阜県)に生まれ、晩年は淡崖と名乗る。したがってこの淡崖として、『東京人類学報告』にも寄稿している。職歴としては幕末に蕃書調所の教授方として出役し、明治維新後は新政府に出仕する。役人として兵庫県令、文部少輔、貴族院議員などを歴任し、明治政府を支えた有能な官吏であったといえよう。

そして神田は公務に励む一方で考古資料の収集に邁進し、その過程で各地の好古家と交流を深めていく。その一人が根岸武香であったことは間違いない。役人生活を引退後には明治 19 年に設立された、東京人類学会の初代会長に就任する。彼の収集した資料とその研究成果の集大成としては、明治 17 年に英

文にて出版された『Notes on Ancient Stone Implements, &c., of Japan』(和書名『日本大古石器考』)があり、本書は江戸時代の神代石研究から脱し、考古学的な観察によるわが国初の石器研究書として位置づけることが可能である。

さて、関西大学博物館では上中条から出土した3点の埴輪を所蔵している。この埴輪について神田の報告文を見ていきたい(神田 1887)。「埴輪ノ事」と題された報告文では、自身が所蔵する埴輪2点について記述する。出土地と時期については「明治八九年ノ頃、武蔵国埼玉郡中條(ママ)村ノ古墳ヨリ掘出セル埴輪ノ残缺ナリ。」とある。続いて、次のように記す。やや冗長ではあるが、当時の埴輪に対する理解を知ることができるので、全文を引用しよう。「初メ掘出シタル時ニハ数体アリシガ、掘出シタル者携帰リテ庭前ニ建置キケレバ、遠近来リ観ル者日ニ夥シク香花ヲ供スルニ到リタレバ、縣吏来リテ打碎キタリト云。予其事ヲ伝聞シ直ニ人ヲ遣ハシ其残缺ヲ索メシタルニ、残缺ノ首二個ト其余ノ破片数枚トヲ得タリ。尋デ首一個ハ同志ノ人ニ譲リタレバ、今ハ此二個ト破片トヲ蔵セリ。」この文章によれば埴輪の出土は大きな話題になったようであり、いつしか信仰の対象になったことも窺える。その一方、文化財的な価値は認められず、役人によって破壊されたものもあったことが分かる。

神田が所蔵した埴輪の数量については、矛盾のあるものとなっている。埴輪頭部2個と破片を入手したのち1個は人に譲ったとするが、実際には2個の埴輪頭部を所有しており、当初は「3個」であったことも考えられるような記述である。「破片」については後述する通り、笄帽をかぶった埴輪頭部は首から肩部の破片が接合しており、この破片のことを指している可能性が考えられる。

神田の報告は埴輪の年代観について『日本書紀』「垂仁天皇三十二年秋七月条」にある埴輪の起源説話から推論し、さらには人物形埴輪が関東において多く出土することを記す。また、埴輪が出土する古墳と出土しない古墳にあって、副葬品に違いがあるか否かを研究すべしとする。このように神田の報告は短文ではあるけれども、明治20年頃には埴輪が考古学の研究対象となっていることが指摘できる。

もう一度神田がこの埴輪を入手した時期を考えていくこととしたいが、神田の官歴を見ると、明治4(1871)年11月20日から明治9年9月3日までは兵庫県令として勤務しており、東京を離れている。帰京後は同日付で元老院議官に翌年の明治10年2月6日まで就任し、同日に文部少輔に補せられる。すなわち明治9年12月に中条古墳群から多数の埴輪が出土した時に神田は東京に居住しており、埴輪の出



写真1 (武装人物埴輪)



写真2 (人物埴輪頭部)



写真3 (人物形埴輪胴部)

上中条出土「人物形埴輪」(関西大学博物館所蔵)

土した情報はほどなく耳に入ったことであろう。あるいは根岸から直接情報を得た可能性も考えられる。神田の報告にあるように「直二人ヲ遣シ」となれば、出土後早々に入手した可能性が考えられる。そして新井が指摘したように、市島兼吉（春城）がまとめた『成山帖』には神田報告にある2点の埴輪が掲載されており、所蔵者は「神田従四位蔵」となっている。すなわち神田が従四位にあった明治9（1876）年10月から正四位に叙される明治18（1885）年10月までに入手したとことが分かる。

この2点の埴輪についてはこれまでも紹介されてきたものであるが、観察所見を簡単に記述しておきたい。写真1に示した武装人物埴輪（所蔵番号 MY-K2004）は、現存高約24.9cmを測る（現状では修復後に木製の台に固定されているため正確な測定が難しい）。次に述べる人物形埴輪頭部と比べると器面は平滑に仕上げられていないところも見受けられるが、胎土は白粒子を含む点等の特徴は同様である。頭部には衝角付冑を着装しており、円形浮文が貼り付けられていることから鋳留式の冑であったことが考えられる。両側面と背面を見ると、もう一段帯金が廻らされていたようであり、本来は鋳（しころ）の表現がなされていたものと思われる。眼孔は横4cmほどのやや切れ長に削り抜かれており、刀子状の工具が用いられたものと想定できる。同様の工具において口も3.7cmほどの幅に切り込みがなされている。さらに鼻孔、耳孔も刀子の先端を刺し込むようにして切れ目を入れて表現している。頸部の破面部分を見ると器厚は1.0cmほどを測り、粘土紐を輪積みにして成形していることも確認できる。これらの特徴から現在東京国立博物館が所蔵する武装男子埴輪と製作技法が近似しており、このことはすでに多くの研究者が指摘している通りである（犬竹2013・新井2021）。

続いてもう一つの人物埴輪頭部（所蔵番号 MY-K2006）であるが（写真2）、この埴輪も修復後に木製の台に固定されており正確な現存高を計測し難いが、おおよそ31.5cmを測る。現在は頭部部分と頸部から肩部分を接合して修復がなされている。神田が入手した破片とはこの部分を指している可能性があるが、神田の図には頭部のみが描かれており『東京人類学会報告』が刊行された明治20年の時点では接合されていないことが分かる。この埴輪の特徴は何といても頭部の被り物であるが、近年では笄帽（こうがいぼう）であると考えられている。実物はおそらく有機質のものであると考えられ、現物が遺存する可能性は少ないと考えられるので、あくまでも埴輪に表現されている形状を紹介しておく。額部分には幅1.2cmほどの鉢巻状のものが表現されており、背後で結んでいるような表現となっている。頭部の被り物とこの鉢巻状の表現が一体のものか否かは不明である。笄帽は頭頂部に幅7.4cm、径4.0cmほどの筒状のものを表現し、その中央部に額部分と同様の粘土紐が貼り付けられており、上から結束しているようにも見える。この粘土紐から額にかけて斜めに伸びる粘土紐が貼り付けられており、この表面には列点状の切込みが施されている。背後にも交差するように列点のある粘土紐が貼り付けられている。この文様を見ると額部分にある鉢巻状のものとは材質が異なっていることを表現している可能性もあろう。衝角付冑とは異なり現物が出土する可能性は低いためどのようなものであるかを想定し難いが、同じ中条古墳群に所在する女塚1号墳出土の盾持人物埴輪にも同様の表現を認めることができる。このような笄帽の表現はこれまでに出土している男子埴輪にしか認められないため、本個体も男子埴輪の可能性が高い。これまでは頭頂部の表現を髷であるとし、巫女の埴輪であると紹介されることが多かったが、再度検討していく余地があろう。但し、盾持人物埴輪であるかといえば、本個体は右手を上にあげ左手は下におろすように復元した図も残されており、現物の観察からも腕の存在が予想できるため、通常盾持人物埴輪には腕が表現されていないことを考えると全体像の復元については今後の課題としておきたい。

今少し埴輪の観察を続けていくと、眼孔や口の表現、さらには鼻孔、耳孔も刀子の先端を刺し込むようにして成形する点など、上中条から出土した埴輪の特徴を備えている。また、両耳の下には円形の剥離痕が認められることから耳環の表現がなされていたことわかる。頸部には首飾りが表現されており、1本の粘土紐と円形の浮文を数センチおきに貼り付けている。また、右肩から左下にかけて襷状のものを身に付

けていることが表現されている。このようにこの埴輪は端正な顔立ちと装飾性の高い表現とも相まって、上中条から出土した埴輪の中でも優品として紹介されることが多い。

次に、写真3に示した人物形埴輪胴部（所蔵番号 MY-K2012）を紹介していく。この埴輪については神田自身がその存在に触れていないため、これまで出土地不詳として取り扱われてきたこともある（関西大学博物館 1998）。そこでまずこの埴輪の来歴を見ていきたいが、この埴輪が神田のもとにあったことを最も早い段階で紹介した書物としては、大正9（1920）年に東京帝室博物館が編集した『日本埴輪図集』である（東京帝室博物館 1920）。その上巻「第五十一版」に「男子腰部」として掲載されており、出土地は「武蔵国北埼玉郡上中条村（？）」、所蔵者は「男爵神田乃武氏旧出品」とある。この時点で出土地に疑問点があったことが窺えることと、神田孝平が逝去した後その養子である乃武がこの埴輪を所蔵していたことを示している。その後、神田の所蔵品が古物商「竹田玩古洞」に売却された際に、大場磐雄がその内容を記録した文章の中にもこの埴輪と考えられる記事が掲載されている。その文章とは『楽石雑筆』巻九、昭和五年「故神田孝平氏所蔵品」というものであり、次のとおりである（大場 1976）。

古墳時代遺物（a）埴輪。土偶首二個、下部片一個、円筒片一個、土馬頸部一個、何れも武蔵国崎（ママ）玉郡中条村出土、土偶首は衝角付兜を破（ママ）れるもの、一は頭部に輪鬚を結び、且つ鉢巻をせるもの、下部は帯をたれしものにて下は円筒となれり。馬は飾馬の頸部なり

この文中にある「土馬頸部」については、上中条村の出土品ではないことは別稿で述べたとおりである（徳田 2019）。この文中にある「土偶首二個」はそれぞれ写真1・2に示したものに間違いない。そして「下部片一個」が「帯をたれしもの」という表現から判断して写真3に示した個体であると判断したい。この古物商から入手した人物が本山彦一であったことについてもかつて紹介したことがあるので、詳細はそちらを参照されたい（徳田 2013）。そして本山が逝去したのち、関西大学がその資料を購入することになるのだが、この移管業務を担当した末永雅雄が残した購入台帳が関西大学博物館に残されている。その台帳の記述は、次のとおりである。

埴輪土偶胴部1個 本山考古資料購入 円筒部完存し帯を表す。高サ一尺四寸五分 武蔵国上中条（ママ）

以上のように写真3に示した埴輪が神田孝平のもとにあり、現在は関西大学博物館が所蔵している経緯をたどってきた。この来歴を見る限り本個体も上中条から出土した埴輪の1つとして取り扱ってもよいものと判断しておきたい。但し神田孝平自身がこの埴輪について何ら記述を残していない理由は不明であるし、先の2点と同時期に入手したものであるかについても厳密には不明である。

この埴輪についてもすでに紹介されているが、簡単に観察所見を述べておきたい。現存高は45.5cmを測り、底部の直径は18cmから19cmである。胴（腰）部以下を残すのみであって、上衣の裾端部も破損している。腰部分には幅約4.2cmほどの粘土帯が貼り付けられており、右側は欠けているものの「ハ」の字状に垂れ下がっている帯の表現となっている。表面には刀子状の工具により中央に一条の沈線を施し、その上下に鋸歯文様を刻んでいる。このような「ハ」の字状に垂れ下がっている帯は巫女形埴輪に認められる表現であり、本個体もこのことから巫女を表現していると考えておく。この帯を正面とした場合に本個体の左腰付近には、別の粘土帯が貼り付けられている。そしてこの粘土帯は腰部の帯よりも幅が狭く、厚いため帯以外のものを表現していると考えられ、表面に刻まれた文様も鋸歯文ではなく、綾杉文のように見える。この文様表現は現在所在が不明となっているものの、上中条から出土した巫女形埴輪の肩部分の絵図に似た文様表現があることから、右肩から左腰に架けられた襷状の装飾品の可能性があろう。

基部にあたる円筒部分については、底部から16cmほどのところに1条の凸帯がめぐらされており、その凸帯に接するように直径4cmほどのスカシ孔が穿たれている。器壁の厚さは円筒部では1.2cmほどを測る。胎土と焼成状況については先述した人物形埴輪と大差は認められない。

この埴輪については関西大学博物館においても出土地が曖昧になっており、また腰部以下の円筒部分だけの個体であったために、紹介はされてきたが十分に評価がされてきたとはいえない状況にあった。今後は改めて上中条から出土した埴輪群の一つとして、他の個体と共に研究対象とすべきものであることを記しておきたい。

3 人物形埴輪の研究史

本章では上中条から出土した埴輪について、考古学史的な意義を考えていく。これまでも述べてきたように、明治9年12月2日に出土した埴輪群は根岸武香や神田孝平ら好古家の手元に帰するとともに、現在の東京国立博物館へ法的な処置に則して収蔵されることとなった。また、翌年の明治10年にはE. S. モース(1838 - 1925年)による大森貝塚の発掘が実施されるなど、わが国に「考古学」が芽生えつつある時期でもあった。このような時期に出土した埴輪群が、今日に続く埴輪研究の土台となっていく状況を見ていくこととしたい。

埴輪の中でも人物形埴輪については、江戸時代から人々の関心を集めていた器物であるといつてよい。この人物形埴輪の研究史については、考古学史研究の全般についても詳しい清野謙次が極めて詳細に記述しているので、その著作を参考に記述を進めていく(清野1955)。江戸時代において人物形埴輪を図と共に紹介した人としては、森島中良(1756? - 1810年)があげられ、桂川中良の名義で執筆した『桂林漫録』(寛政12(1800)年刊行)には「上埜国那波郡波志江村(現在の群馬県伊勢崎市波志江町)」から出土した人物形埴輪を「瓦偶人」として紹介している。このことは18世紀後半から盛んとなっていた「物産学」の対象として、埴輪など出土品にも注目が集まっていたことを示している。

続いてこの18世紀後半における埴輪を取り上げた事項として、藤貞幹((1732 - 1797年)の著作を取り上げたい。その書物は『衝口発』であり、天明元(1781)年に刊行されている。内容は日本の古代にあっては皇統・言語・風俗などの様々な点において、中国や朝鮮半島の文化的な影響を受けていることを論じたものである。その中で図11に示した「河内國石河郡山中古塚」から出土した「埴物」の図を示し、その衣服が左衽(さじん)、すなわち左前になっていることから韓服の影響があると自説の論拠としたものである。

この図を見ても明らかなように、ここに描かれている「埴物」は実際の人物形埴輪とは到底考えられないものであって、藤貞幹の説を裏付ける資料としては適切でないものといえる。それゆえ国学の立場から本居宣長(1730 - 1801年)は、天明五(1785)年に『鉗狂人』を著し、その中で「土物のたぐひはただ人の大よその形を造れる迄にて衣服などの細かなるをさまで細しく造りわくべきにあらざれば證とするに足らず。」として『衝口発』を徹底的に論破した。この件については貞幹の研究成果を考古学史的な観点から言及した竹居明男も指摘するように、貞幹自身の資料操作に問題があると言えよう(竹居1985)。



図1 『衝口発』所載「埴物」(国立国会図書館所蔵)

藤貞幹と本居宣長の論争について詳述することはしないが、貞幹が今日でいう埴輪という考古資料を用いて過去を復元する試みを実践したことについては認めておきたい。

貞幹は「小片ノ毀瓦トイヘドモ、古製ヲ考ルニ足ル」（『好古小録』）という立場から『古瓦譜』や『集古図』などの膨大な著作を残している。彼の研究成果については、実証的な研究方法により考古学の先駆的な業績として評価すべき部分と、疑いをもたれるような史資料を用いて論拠を構築している点があることを正確に見極めて判断しなければならないと考える。

その後の埴輪についての研究成果としては、栗田寛（1835－1899年）が著した『葬礼私考』に埴輪の記述があり、本書の『付録』にはこの時点で知られていた人物形埴輪の図が紹介されている（中澤2011）。本書は慶應年間中には脱稿していたが、明治9年に刊行された。この頃には武蔵国埼玉郡や比企郡において開墾に伴って埴輪の出土件数が増加し、根岸武香のもとに集積していった。そして根岸から好古家仲間であった柏木貨一郎（政矩）や松浦武四郎のもとに、人物形埴輪が「土偶人」として譲渡されていく（内川・宇野2013）。松浦は彼の著作である『撥雲餘興』（明治10年刊）の首巻に、「武州比企郡大谷村掘出埴輪物」を掲載している。このようにこの時期は埴輪が好古家の収集対象となり、さらに根岸が積極的に情報を発信したことから多くの人が埴輪への興味を持つこととなる。その一人が根岸とも交流のあったH.v.シーボルト（1852－1908年）であり、彼は著書『日本考古学覚書』（英書名『Notes on Japanese Archaeology - with Especial Reference to the stone Age -』）において「第七章 Tsuchi Ningio or Clay Figures（土人形あるいは埴輪）」を執筆している（徳田2003）。このように明治維新以後明治10年代の中頃までには資料の増加と、人々の興味がより一層高まった時期といえよう。

そして埴輪が歴史資料として取り扱われることのきっかけは、明治17（1884）年に「じんるいがくのともし」という団体が結成され、その後「東京人類学会」に名称が変更し、機関誌である『東京人類学会報告』が刊行されたことが大きい。この雑誌を舞台に埴輪が人類学（当時はまだ考古学という概念が定着していない）の研究対象となり、先に取り上げた神田の報告はその先駆けとなるものであった。続いて明治21年には坪井正五郎（1863－1913年）が、「埴輪土偶に基いて古代の風俗を演ぶ」を発表する（坪井1888）。この論文において「土偶の風俗は其時代の風俗を写したもので我々は是に因て古代の衣服服飾を推考する事を得ます。」と記した。すなわち藤貞幹の試みから約100年を経て、埴輪が古代の服飾を検討していくための研究材料であることを論証した。そしてその論証に使用した埴輪の一覧表を示しており、実物を観察したものと図だけを見たものが掲示されている。その中で実見したもののほぼ半数が根岸武香の所蔵品であって、東京国立博物館の所蔵品も含め、上中条から出土した埴輪が坪井論文の基礎資料になっていることが分かる。

坪井はこの論文を発表した翌年から3年間イギリスに留学し、帰国後に帝国大学理科大学教授として人類学の講座を開設する。そして明治34（1901）年に単行本として『埴輪考』を刊行する（坪井1901）。ここに至って坪井の埴輪研究が一つの到達点を迎え、今日に続く埴輪研究の礎が完成したといえよう。

まとめ

弘前大学人文社会学部北日本考古学研究センターには、放浪画家蓑虫山人（1836－1900年）が描いた「埴輪写生図」が残されている。この作品については本誌の新井報告を参照されたいが、この写生図は明治20（1887）年に蓑虫が神田を訪れた際、神田や根岸の所蔵していた埴輪や、江戸時代以来の書物に掲載されていた人物形埴輪の絵図に刺激を受けた結果として出来上がったものと考えている。描かれている埴輪の図自体は決して正確とはいえないが、それぞれの埴輪が生き生きとした表情をしていることが印象的である。まさにこの写生図に描かれた埴輪が、「古物」ではなく「古代の沿革を徴す」歴史資料として進化したことを示す記念碑のように感じられる作品となっている。

参考文献

- 新井 端 2021「上中条出土出土人物埴輪群像について—人物埴輪のイコノグラフィー—」『熊谷市史研究』第13号 熊谷市史教育委員会
- 犬竹 和 2013「関西大学博物館所蔵上中条出土人物埴輪（MY-K2006）について」『阡陵』No.67 関西大学博物館
- 内川隆志・宇野淳子 2013「明治前期における好古家の実相—松浦武四郎と柏木貨一郎の土偶人の周旋をめぐって—」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第5号 國學院大學研究開発機構
- 大場磐雄 1976「故神田孝平氏所蔵品」『大場磐雄著作集 第7巻 楽石雑筆（中）』雄山閣出版
- 関西大学博物館 1998「152 人物埴輪胴部」『博物館資料図録』関西大学博物館
- 神田孝平 1887「埴輪ノ事」『東京人類學會報告』第11号 東京人類學會
- 清野謙次 1955「第四篇 埴輪研究史」『日本考古學・人類學史』下巻 岩波書店
- 竹居昭男 1985「藤原貞幹の古代研究」『考古学の先覚者たち』中央公論社
- 坪井正五郎 1888「埴輪土偶に基いて古代の風俗を演ぶ」『東京人類學會報告』第23号 東京人類學會
- 坪井正五郎 1901『埴輪考 附・土偶土馬模型説明』東洋社
- 東京帝室博物館 1920『日本埴輪図集』上・下巻 歴史参考図刊行会
- 時枝 務 2001「近代国家と考古学—「埋蔵物録」の考古学史的研究—」『東京国立博物館紀要』第36号 東京国立博物館
- 中澤伸弘・宮崎和廣 2011『好古研究資料集成』巻六 考古官職編
- 徳田誠志 2013「神田孝平から本山彦一へのバトンリレー」『阡陵』No.66 関西大学博物館
- 徳田誠志 2019「関西大学博物館所蔵 木村兼葭堂旧蔵の馬形埴輪について」『阡陵』No.79 関西大学博物館
- 徳田誠志 2003「H.V. シーボルトと関西大学博物館所蔵資料」『関西大学博物館紀要』第9号 関西大学博物館
- 本村豪章 1991「古墳時代の基礎研究稿—資料篇（Ⅱ）—」『東京国立博物館紀要』第26号 東京国立博物館

『榧園好古図譜』所載の中世在銘金工品

深澤靖幸

はじめに

『榧園好古図譜』は、榧園と号した根岸武香（1839～1902）が編んだ、蒐集品の写生図集である。武香は武蔵国大里郡青山村（現埼玉県熊谷市）の名主の家に生まれ、その財力を活かして幕末から明治にかけて大きな足跡を残した好事家である。その興味関心は考古ばかりでなく古銭、古印、典籍、古文書、古地図など多岐にわたった。『榧園好古図譜』は現在4冊が確認され、数多くの考古資料を収録している。その特長は、彩色された実測図ともいべき精緻な写生図にある。このうち、第三冊は装身具、石製模造品、武器・武具、馬具などの古墳時代遺物を主にしながら、古印や和鏡、百万塔など多彩な資料を収録し、二つの在銘の中世金工品も掲載されている。一つは「武州桐田」銘のある懸仏、いま一つは「上総州伊北庄山中郷明王堂」銘の鰐口である。ともに、鑄の状態までも丁寧な描いている。

また、府中市郷土の森博物館では、根岸武香蒐集とされる拓本一括を収蔵しており、上記2件の金工品を含んでいる（深澤2023）。小稿では、これら拓本から得られる情報もあわせ、2件の中世在銘金工品を紹介する。

1 「武州桐田神明」銘の懸仏

本懸仏は、『榧園好古図譜』第三冊に載るが、これまで公開されることのなかった、いわば新出資料である（1～3）。また近時、根岸家で所蔵していることが明らかになった資料でもある。

本懸仏は、尊像が表されているわけではなく、「桐田神明」の社名を刻銘した銅造の作品である。一般に懸仏は、①円形で、②立体的な尊像を付け、③懸垂できることを基本要件とする。本例は②を満たしていないことになるが、社名を刻すことによって代えた、きわめて簡略化された作品といえる。鏡板直径も144mmと小さい。鏡板は中央に向かってやや盛り上がり、周囲に覆輪状の造形を作り出している。鏡板厚は1.8mm前後、覆輪状の部分の幅は4.2mm、厚さは2.6mmで、鏡板と覆環状の部分は一鑄でつくられている。鏡板の上部左右に付く一對の吊環は半円形の素環で、こちらは鏡板に鍛接されている。大きさは左右でやや異なるが、幅13～16mm前後、高さは7mmほどである。このように本懸仏は、尊像を持たないことを含めて、きわめて簡素な造りである。なお、やや赤みを帯びていることから、火中した可能性がある。

銘文は、両肩に付く吊環に対してやや反時計回りに傾くように、3行にわけて次のように刻まれている。

（陰刻・表）
（梵字）神明
武州桐田
享祿十五日



図1 『榧園好古図譜』第3冊所載の懸仏



図2 根岸家所蔵の懸仏（写真）



図3 根岸家所蔵の懸仏（拓影・実測図）

奉納者に関する銘はないが、武州梶田の神明社に奉納されたことがわかる。神明社の祭神はいわずとした天照大御神で、その本地仏はふつう大日如来ないし十一面観世音菩薩であるから、これを略したものと判断できる。1行目の「神明」の上部の刻まれた梵字は、板碑や墓標、庚申塔などの文字や梵字の上部に稀にみることのある符号「イー」だろうか⁽¹⁾。3行目の「享禄十五日」は年・月を欠き、理解に苦しむ記銘である。享禄は大永8年（1528）8月20日の改元で、享禄5年（1532）7月29日には天文に改元されている。また「十五日」の表記は10月5日ないし15日を示す可能性があり、どちらかに特定できない。ともあれ、享禄年間（1528～32）の奉納ととらえておくほかない。

なお、現在の二つの吊環には荷札が括り付けられている。右の荷札には「第三三号／鏡／根岸伴七蔵」、左の荷札には「一三三」と記されており、蒐集品の登録台帳に類するものの存在を推測させる。また、「伴七」は根岸家の当主の世襲名である。根岸家当主のなかで古物蒐集に注力したのは武香であるから、本鏡

口も武香の蒐集品とみてよかろう。

また、図譜の写生図は極めて精緻で、寸法も正しく写し取っている。

さて、銘文中の「武州栲田」は、戦国期の史料に散見する地名である。永正元年(1504)の上杉房能感状⁽²⁾に「栲田要害」とあるのが初見で、高尾山薬王院有喜寺旧蔵の元龜2年(1571)の燈籠銘⁽³⁾によって「横山庄栲田郷」と称されていたこともわかる。その名は、現在の東京都八王子市栲田町に継承されている。もっとも、現行の栲田町の範囲がそのまま中世の栲田郷ではない。近世には上栲田村と下栲田村があり、中世栲田郷は二村に分立していたことがわかる。しかも、上栲田村は現行の初沢町・東浅川町・西浅川町・南浅川町、下栲田村は現行の栲田町・狭間町に当たるから、中世栲田郷はかなり広域に及んでいたといえる(平凡社地名資料センター編 2002)。

しかしながら、現在この地域に神明社は確認できない。『新編武蔵風土記稿』や『武蔵名勝図会』といった近世地誌にも、両村に神明社は見出せない。これらが編まれた近世後期にまで存続することなく廃絶したと考えるのが素直な解釈だろう。

ただ、上栲田村や下栲田村の周辺に目を広げれば、神明社(神明神社)は複数見出せる。このうち八王子市裏高尾町にある神明神社は、近世には上長房村に属していたものの、上栲田村に近接している。武蔵国と相模国の国境である小仏峠の東方に設けられた小仏(駒木野)関所の北方至近に位置し、今も祀られている。『新編武蔵風土記稿』百巻之三には「神明社 除地、五畝、字森ノ前にあり、百姓の持」と記されるにすぎず、中世にさかのぼる証左は見出せないのだが、本懸仏の奉納先の候補となるかもしれない。ちなみに、府中市郷土の森博物館が入手した武香収集の拓本には、神明神社と指呼の距離にある薬王院有喜寺の銅鐘銘(寛永8年銘(1631))がある。上述のとおり薬王院有喜寺は中世には栲田郷に、近世には上栲田村に属した。この拓本を武香が入手した経緯は不明だが、武香は栲田と何らかの関係を有していたとみることもできよう。

2 「上総州伊北庄中郷」銘の鰐口

本鰐口は、『榎園好古図譜』に表面、裏面、側面の3図を載せている()。今、根岸家の所蔵を確認できないが、府中市郷土の森博物館の所蔵となった武香蒐集拓本には、「根岸武香珍藏」の朱印が捺されており、鰐口そのものが武香の蒐集品であったことを教えてくれる。

ところが、本鰐口は古く香取秀真の『金鼓と鰐口』(香取 1923)に「根津伴七蔵」として銘文が紹介され、以来、根津伴七蔵として『千葉縣史料 金石文篇 2』(千葉縣史料調査会編 1977)や『勝浦市史 資料編 中世』(勝浦市史編さん委員会編 2003)などに引用されてきた⁽⁴⁾。しかしながら、前述した通り「伴七」は根岸家当主の世襲名である。『金鼓と鰐口』が「根岸」とすべきところを「根津」と誤り、これが永く踏襲されてしまったものと判断できる。つまり、本鰐口は武香蒐集品であり、早くに香取秀真の知る所となったが、所蔵者が誤って記録されたことにより佚亡資料となってしまったのであろう。

鰐口そのものは今もって所在不明だが、銘文が知られるにすぎなかった本鰐口の基礎情報は、『榎園好古図譜』の写生図と府中市郷土の森博物館所蔵拓本(5)によって豊かになったといえよう。また、写生図と拓本の照合により、写生図がほぼ原寸で描かれていることも確かめられた。ここでは両者によりながら、鰐口の基礎的な情報を記しておく⁽⁵⁾。

本鰐口は、表裏の外型を合わせたものである。材質は不明というほかないが、常識的に考えて銅鑄製と判断する。鼓面は直径24cmほどである。目は鼓面の水平中軸線上にあり、その張り出しは小さく、縁下半部に開く口につく断面三角形の唇の張り出しと大差ない。鼓面の膨らみは低平で、鼓面中央の撞座での厚さは約8.4cmである。吊手となる耳は断面略円形を呈したいわゆる両面式である。

鼓面の意匠は、表裏ともに同じで、圏線によって外区、内区、撞座区の三区に分けられている。その圏

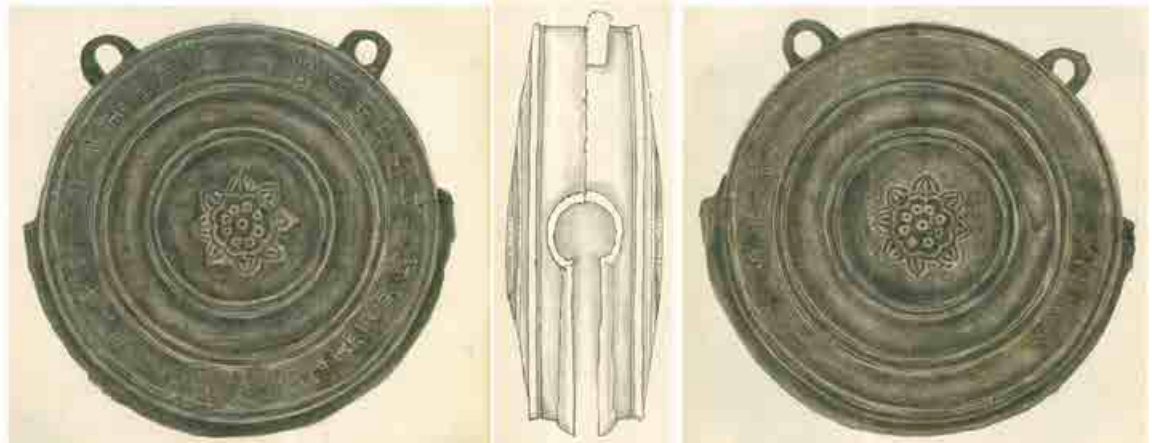


図4 『榧園好古図譜』第3冊所載の鱈口

線は、側面と外区の間は二重隆線、外区と内区の間、内区と撞座区の間はともに二重隆線を採用している。撞座は八葉の蓮華文で、中房は八花形で、中心に1顆、その周囲に5顆、計9顆の蓮子を配している。

鑄造方法は前述のとおり表裏の合せ型である。型の合わせ目のバリや湯口は写生図に描かれておらず、はほぼ除去されているようである。型持も写生図には描かれておらず、拓本にも見えない。丁寧に仕上げられたためと推測しておく。

銘文は、やや硬い筆法で、表・裏の外区の左右に次のように刻まれている。

(陰刻・表外区右)

上総州伊北庄山中郷明王堂左近王郎

(陰刻・表外区左)

應永十年癸未十二月廿六日施主犬獄

(陰刻・裏外区右)

大工高口

(陰刻・裏外区左)

結縁衆各々

この刻銘により、応永10年(1403)12月26日、「犬獄左近王郎」が施主となり、結縁者とともに上総国伊北庄山中郷明王堂に奉納された鱈口であり、「大工高口」がその製作にあたったことがわかる。

銘文にある伊北庄は伊隅庄の東部のことである。伊隅庄は中世に上総国夷隅郡内につくられた鳥羽金剛心院領の荘園で、全体としては伊隅庄と総称された。初見は『吾妻鏡』文治4年6月4日条である。しかし、実際には東・西に分割支配され、伊隅庄の東を伊南庄、西を伊北庄と呼んだ(千葉県史料研究財団2007など)。伊北庄は、千葉県大多喜町及びいすみ市の一部と勝浦市北部を含んだ地域と考えられている。このうち「山中郷」は大多喜町堀之内の山中を遺称地とし、堀之内一帯に比定されるという(平凡社地名資料センター編1996)。伊北庄の山中郷については、長祿2年(1458)に同所で死去した尼のいたことが千葉県松戸市にある本土寺の過去帳から分かり(勝浦町史編さん委員会編2003)、さらに慶長2年(1597)の「伊北庄山中郷御繩打水帳」により近世初頭まで残存していたことも判明する。

明王堂に関しては、現在の堀之内には関連する寺社を見出せない。上記の「伊北庄山中郷御繩打水帳」は小松谷・部田・八声・堀之内・大戸・石上の6か村の検地帳だから、山中郷は広域地名といってよい(平凡社地名資料センター編1996)。とすれば、探索の範囲は広げなければならないが、それでも管見では明王堂を見出せない。明王は不動明王や軍荼利明王など密教において信仰される尊格だから、密教系寺院

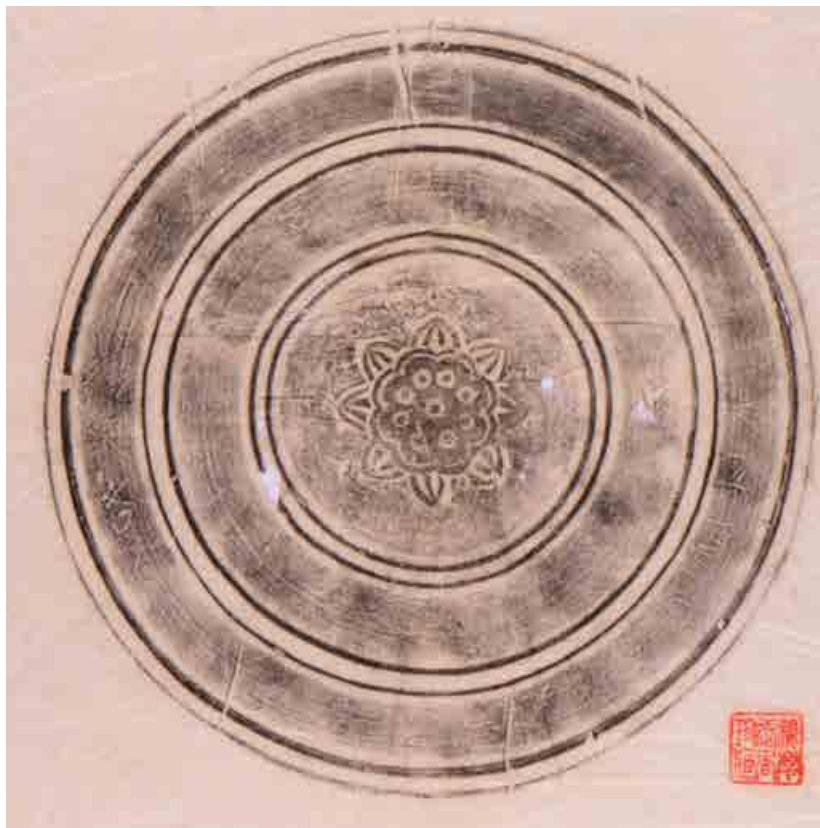
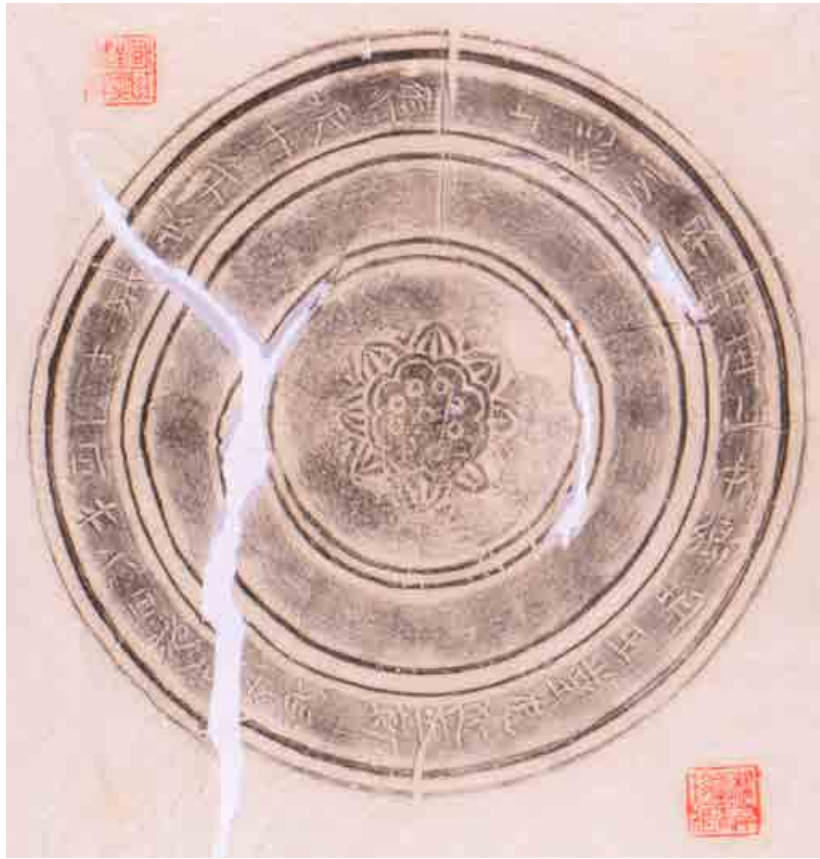


図5 伊北庄中郷明王堂鰐口の拓本（縮尺 1/2）

を候補として探る必要があるといえよう。

次に、施主の「左近王郎」は関連史料を見出せず、その素性は不明である。「王」を「五」の省画とみることのできるのかもしれないが、やはり関連資料はない。「大工」として刻まれた「高口」も詳らかでなく、鋳物師を特定できない⁽⁶⁾。

おわりに

根岸武香蒐集の中世在銘の金工品 2 件を紹介した。「武州柵田」銘の懸仏は、極めて簡素なつくりで、奉納者不明、柵田神明社の所在地も詳らかでないが、中世柵田郷に関する新出資料である。一方、「上総州伊北庄中郷」銘の鰐口は佚亡資料ながら、詳細な写生図と拓本によって形態や刻銘が明らかになった。ともに、地域史の資料として活用されることを望みたい。

それにしても、武香の蒐集はその幅の広さはもちろんだが、それをを記録する熱意に驚かされる。これに写真が加われば、今日の私たちが行っている資料化と何ら変わりはない。武香の熱意を継承し、弛まぬ努力をすることが私たちにも課せられていると思う。

〈謝 辞〉 小稿を成すにあたって、内川隆志氏ならびに伊藤宏之氏にご高配、ご教示を賜りました。厚くお礼申し上げます。

註

- (1) 庚申談話会編『日本石仏事典』1976年。伊藤宏之氏のご教示による。
- (2) 谷合家文書（八王子市史資料編 2 中世 382）
- (3) 『新編武蔵風土記稿』（八王子市史資料編 2 中世 646）
- (4) 『勝浦市史 資料編 中世』（勝浦市史編さん委員会編 2003）や『慶長以前鰐口・雲版年表稿』（愛甲 2007）といった諸書で根津伴七蔵が踏襲されている。
- (5) 武香は 1901 年 9 月、安房の寺々を山中笑（共古）らと巡っている（山中 1002a・b、根岸 1902）。梵鐘や鰐口の銘文の調査を主たる目的としていたらしく、自ら採拓している（深澤 2023）。しかし、上総の夷隅方面には足を延ばしておらず、鰐口の入手に関わる情報は今のところ得られていない。
- (6) 坪井良平による梵鐘鋳物師名（坪井 1970）や原田一敏がまとめた金工師名（原田 1986）に、関連する鋳物師名は見出せない。夷隅郡内の中世鋳物師は未確認だが、夷隅町苅谷、大多喜町猿稻、同町内野に近世の鋳物師がいたという（坪井 1970）。

参考文献

- 愛甲昇寛 2007 『慶長以前鰐口・雲版年表稿』真言史学会
内川隆志 2021 「『榎園好古図譜』に所載された和鏡について」『人文資料形成氏における博物館学的研究Ⅰ—根岸友山と武香旧蔵資料の研究と公開—』近代博物館形成史研究会
内川隆志・樋口典昭 2022 「『榎園好古図譜』第一冊について」『人文資料形成氏における博物館学的研究Ⅱ—根岸友山と武香旧蔵資料の研究と公開—』近代博物館形成史研究会
大多喜町史編さん委員会編 1991 『大多喜町史』大多喜町
勝浦市史編さん委員会編 2003 『勝浦市史 資料編 中世』勝浦市
勝浦市史編さん委員会編 2006 『勝浦市史 通史編』勝浦市
香取秀真 1923 『金鼓と鰐口』
庚申談話会編 1977 『日本石仏事典』雄山閣

- 千葉県史料研究財団 2007『千葉県の歴史 通史編 中世』千葉県
千葉県史料調査会編 1977『千葉県縣史料 金石文篇 2』
坪井良平 1970『日本の梵鐘』角川書店（新装版 2018年、吉川弘文館）
八王子市史編集委員会編 2014『新八王子市史 資料編 2 中世』
原田一敏 1986「日本金工師名譜」『東京国立博物館紀要』22 東京国立博物館
深澤靖幸 2023「〈資料紹介〉根岸武香収集拓本コレクション」『府中市郷土の森博物館紀要』36
平凡社地名資料センター編 1996『日本歴史地名体系 12 千葉県の地名』平凡社
平凡社地名資料センター編 2002『日本歴史地名体系 13 東京都の地名』平凡社

京都の学塾山本読書室と“古物蒐集家”松浦武四郎

三浦泰之（北海道博物館）・山本命（松浦武四郎記念館）

はじめに

山本読書室は、京都の医師で儒学者の山本封山（1742～1813）が、18世紀後半、天明年間に京都油小路五条上ルに開いた私塾である。封山の次男で、本草学者小野蘭山の門人であった山本亡羊（1778～1859）の代に、西日本における本草学の拠点として知られるようになった。この山本読書室に伝来した資料は、現在、京都府立京都学・歴史館に寄託されており、「山本読書室資料」として、令和3年（2021）3月から部分的に公開が進められている。

本稿では、“憂北の志士”で、“古物蒐集家”としても知られた松浦武四郎（1818～1888）に関する資料調査の一環として実施した「山本読書室資料」の調査について、その概要を報告する。なお、三浦と山本が共同で行った調査をもとに、三浦がまとめた。

松浦武四郎と山本読書室について

まず、本稿に登場する主な人物について紹介する。

松浦武四郎（1818～1888）は、伊勢国一志郡須川村（現三重県松阪市）の出身で、ロシアの南下という近世後期の北方情勢に強い危機感を抱き、弘化2年（1845）から安政5年（1858）にかけて、一介の志士として3回、幕府の「御雇」として3回、「蝦夷地」と呼ばれていた北海道（及びサハリン島南部）を踏査した人物である。そして、踏査の成果を、数々の日誌や意見書、地図などにまとめ、水戸藩や宇和島藩、幕府などに献上するとともに、江戸の書肆から出版もしている。明治維新に際しては、蝦夷地開拓を重要視した明治政府に登用され、開拓使設置後の明治2年（1869）8月に「開拓判官」に就任するなど、東京詰の役人として明治政府の北方政策に関与した。また、そのような“蝦夷地通”としての側面のほか、幕末の志士や政治家、学者、文人などとの幅広い交流の中で、“情報通”、“古物蒐集家”（“好古家”）としても、居を構えていた江戸（東京）を中心に有名な存在であった¹。

山本読書室関係では、まず、山本榕室（1809～1864）が挙げられる。亡羊の次男で、後に家督を継いだ。名は篤慶、字は錫夫、通称は沈三郎で、榕室は号である。封山以来、亡羊、榕室と、本草学は家学として受け継がれ、亡羊の時代、文化5年（1808）に第1回が開催された「読書室物産会」は、慶応3年（1867）まで、50回を数えた。この三代で山本読書室の門人は、近畿地方を中心に、北は東北、南は九州地方まで、のべ926人に及ぶ²。榕室の死後、山本読書室は、一時期の中断を挟むも、榕室の弟で亡羊の六男であった山本章夫（1827～1903）（名は維慶、通称は藤十郎、号は溪山・溪愚・対竹斎主人、家印は海紅亭）が明治36年（1903）まで続けている。

また、榕室の長男に山本復一（1840～1912）がいる。鴻堂（構堂）と号し、「父祖二代を脈々と流れる勤王の血をうけ継ぎ、本草学はもちろん、和漢の学にも造詣深く、尊王倒幕をもって生涯の指針とした」³とされる人物である。慶応3年（1867）、京都の志士で文人の山中静逸（信天翁）の紹介で岩倉具視に会い、岩倉の「偉傑さに心服し即日その邸に寄宿して指導を受け、他の志士らと共に新政府誕生に努力した」。戊辰戦争に際しては、「岩倉の命を受け、豪商あるいは東・西両本願寺をはじめ諸藩を説いて金穀を調達した」。その後、明治5年（1872）には太政官に出仕し、明治政府の官僚として、岩倉の秘書的な役割を果たしている。明治27年（1894）には政府の職を辞し、やがて京都に戻った。「岩倉公実記」、「孝明天皇紀」、「三条実美公年譜」の編纂など、明治期の史事事業に関与したことで知られている⁴。

武四郎と山本読書室、特に山本榕室との交友のきっかけは不明である。ただ、武四郎の儒学の師、藤堂藩（津藩）の儒学者平松楽斎（1792～1852）と榕室は懇意の間柄であり、楽斎の紹介があったのではないかと考えられる。実際、「山本読書室資料」にある、嘉永3年（1850）7月9日付の山本榕室宛て平松楽斎書簡（後掲の【表1】No.16）の中で、楽斎は、武四郎が出版した「蝦夷地図」を榕室に進呈し、一介の志士としての武四郎の3回の蝦夷地踏査の事績について伝えているのである⁵。

武四郎側の史料で榕室の名前が確認されるのは、嘉永5年（1852）春、関西地方を遊歴していた途中に京都に立ち寄った際の『自伝』の一節に「新宮涼庭に逢、畑柳平〔畑柳坪〕、中林竹溪、対山〔日根対山〕、耕石〔中西耕石〕、山本沈三郎等に日々出會しぬ⁶」とあるのが初出である。また、『自伝』には、アメリカ東インド艦隊司令長官M・ペリーが来航した嘉永6年（1853）には、尊王攘夷運動の一環で上京した武四郎と榕室が「議論」をしたこと（「癸丑浪合日記」同年10月13日条⁷）や、榕室が武四郎に「海防策一冊并読常陸帯文一篇」を送っていること（「癸丑浪合日記」同年10月24日条⁸）なども確認される。武四郎は、この年以降、慶応4年（1868）まで上京していないので、その後の交友は書簡のやりとりという形で続いている。

武四郎と復一との交友のきっかけも不明であるが、武四郎と父榕室との交友が機縁となったのであろう。『自伝』に復一は登場しないが、後掲する【表1】にあるように、「山本読書室資料」に、慶応元年（1865）9月12日付の山本復一宛て武四郎書簡（No.13）や、明治20年（1887）12月16日付の山本復一宛て「願用書」（No.14）が確認される。この「願用書」の日付は、武四郎が亡くなる2か月ほど前であり、武四郎の最晩年まで交友は続いたことが知られる。

山本読書室資料にある松浦武四郎関係資料について

現段階で確認出来た関係資料を、【表1】にまとめた。便宜上、①松浦武四郎書簡及び関係書簡、②松浦武四郎著作、③その他、に分類したが、合計73件である。

①では、文久元年（1861）9月8日付から文久4年（1864）正月4日付までの榕室宛て書簡11通（No.2～12）、慶応元年（1865）9月12日付と明治20年（1887）12月16日付の復一宛て書簡（No.13・14。後者は「願用書」）2通が山本家宛ての書簡として特筆される。一例として、No.2の全文を紹介する。

腊葉三百五、六十品、毛もの、魚類も少々持帰り申候、追々奉伺候、今便先者差当り候品のミ差上候、追而少々ツ、差上ケ奉伺候、

今便之品御返シニ不及候、御説者奉願上候、

一翰呈上仕候、秋冷之砌ニ御座候得共、御家内様御揃珍重之御儀奉存候、然者先年者参上仕候、種々御馳走其余万々御厚情ニ相成候、有難奉存候、然る処、僕事、魯西一件ニ而蝦夷地御固杯ニ付卯年私共先年著述仕置候三航蝦夷日誌三十五卷上納可致候様被仰付候、上納仕候、其後新規御雇入被仰付候、箱館へ罷下り申候、松前家より蝦夷并カラフト島請取御用手附被仰付候、辰年二月箱館表出立仕候、西蝦夷地廻りカラフトへ渡りヲロツコ、タライカ人等部落の地まで参り候様被仰付候、右御用被仰付候、相済申候、東蝦夷地相済申候、巳年又々東西蝦夷山川地理取調御用并蝦夷人別懸り被仰付候、出立仕候、其方山ニ入、只蝦夷人を案内と致し三十日位野宿致し蝦夷の地を東西南北奔走仕候、午年又々氷雪中山ニ入、其冬まで懸り漸々山川見立相仕舞申候、未春出府仕候、然る処、扱種々世の中の転変も有候事故未だ伊勢えも不上仕申候、只右勤中之山川地理取調刻図と申候ものを製し、去冬上にて上木ニ相成、式十八冊ニ仕候、世の中の事打捨、只山川の事のみを仕候、楽居候、

其後、蝦夷滞在之者百式十四冊著、外ニ蝦夷近世人物志と申候もの九冊を著し申候、外ニ追々書立候ものも御座候、又去秋方記行を少々ツ、上木仕候、則、ヲロツコ・タライカ行日記一冊に縮め上木仕

候間、今便一冊呈上仕候、御笑納可被成下候、其後、石狩日誌、久摺日誌、後方羊蹄日誌等上木仕候、只今本切ニ御座候間、節句後又々製本仕候間、其節ニ呈上仕候、今便者先北蝦夷日誌のミ呈上仕候、一、此品西蝦夷地シヤリと申奥地にて冬分海の荒れる時海底より打上候ものニ御座候、色は赤く、蚯蚓の如し、夷言フレチと申候、訳して赤き腸と申事也、土人内傷の者は是を喰申候、是を江戸表ニ而栗本、大淵、森、阿部等ニ見せ候処、何ともしれ不申候、魚仙と申候青物やにて魚類工者の者有之候処、是も死去仕候、依而しれ不申候間、右一品差上候間、御鑑定御説を御認め奉願上候、栗本随見は海蛭と申候得共、未たしかとも不申、其余魚の腸等申候得共中々左様ニ而無御座候、此段御説を附可被成下候様呉々も奉願上候、近日西蝦夷舎利辺の海岸の記行、知床日誌と申候もの上梓仕候間、右之中へ先生之説加え度奉存候、尤、私共の説可仕候ニ而なし、尊大人之名を以て書加え候間、相成候ハ、引書ニ而も御引被成候、三、四行位之文ニ御認め奉願上候、御返事者御町奉行原伊予守様内鈴木彦助と申私共親類之者詰居候間、此者へ同封の一封を供し御出被成下候ハ、早々相とゞき申候、彦助事、少々読書仕候、気志頗る有之候、常陸者ニ而御座候、佐渡へも忝度参り申候男ニ御座候、御尋被成下候ハ、相悦申候、尤、原事も私共存居候仁ニ御座候、呉々も右之御説御認め之事奉願上候、扱、藤堂侯も当七月英吉利人海岸測量之事ニ附伊勢海へ乗込候事断申上候、評判宜敷候、当月十三日出立ニ御座候、栗本随見殿も当節蝦夷地ニ参り申候、至而入懇ニ仕候、僕事、出府後早々相伺候と存候得共、余り世間さわかく御座候間、差扣居候、追々世の中穩ニ相成候へ者奉伺候、尚追々御蔵板の記行物摺立次第差上候、先者早々如此御座候、恐惶謹言、

九月八日

松浦武四郎

山本沈三郎様

何卒御尊父様にも宜敷、御舎弟様方へも御伝音宜敷奉願上候、呉々も御説者鈴木彦助方へ奉願上候、上木物加入仕度候、

まず始めに、「卯年」、すなわち安政2年(1855)に幕府に「三航蝦夷日誌三十五巻」を献上し幕府の「御雇」となり、安政3年(1856)から安政5年(1858)にかけて幕府の「御雇」として蝦夷地踏査を行ったことを記している。文面から、嘉永6年(1853)の上京以来、ひさびさの音信であったことがうかがえる。そして、蝦夷地踏査の内容を著述にまとめていることを記し、特に近々刊行を予定している「知床日誌」の中に挿みたいということで、オホーツク海側の西蝦夷地シヤリ場所で入手した「フレチ」(海産無脊椎動物のユムシのこと)なるものを添えて榕室に解説を求めている。また、藤堂藩主がイギリスの測量艦隊の伊勢神宮に近い海域での活動を断ったことを称賛するなど、当時の政治・社会情勢にも触れている。武四郎の人物像を考える上で、冒頭の尚書に「腊葉三百五、六十品、毛もの、魚類も少々持帰り申候」とある点は興味深い。「腊葉」とはいわゆる押し葉標本のことであるが、毛皮や魚類標本とともに、それを350、360品ほども蝦夷地から持ち帰ったと記しているのである。後に“古物蒐集家”としての一面にて顕著に見られる熱心な“蒐集”癖が、本草学の分野にもあらわれている。

以上のように、榕室宛ての武四郎書簡は、自著の贈呈、蝦夷地から持ち帰った動植物の贈呈や鑑定の依頼、黒船来航以来共通の関心事であった海防問題の話題が中心である。

なお、筆者は、「山本読書室資料」が公開される前、大正期に維新史料編纂会による明治維新関係史料の収集事業の一環で筆写された、山本榕室及び復一宛ての武四郎書簡の写しを翻刻紹介したことがある⁹⁾。具体的には、(1)文久2年(1862)12月14日付の榕室宛て書簡写し、(2)慶応元年(1865)12月7日付の復一宛て書簡写し、(3)慶応2年(1866)春頃の復一宛て書簡写し、(4)慶応2年(1866)3

月 25 日付の復一宛て書簡写し、(5) 慶応 4 年 (1868) 6 月 19 日付の復一宛て書簡写し、の計 5 通であるが、(1) は No. 8 に該当する。ただ、(2) ~ (5) の復一宛て書簡写し 4 通については、今回の「山本読書室資料」の調査では確認することが出来なかった。いまだ公開されていない分に含まれているのかもしれない。

次に、②は、武四郎が山本読書室に贈呈したと考えられる著作類である。①の山本榕室及び復一宛ての武四郎書簡の中でも自著の贈呈の旨が記されているが、晩年に至るまで、山本読書室に著書を贈呈し続けていることがわかる。概ね刊本であるが、武四郎自筆の「北蝦夷山川地理取調図」が含まれていることが注目される。全 18 枚の切り図で、全て並べると縦約 480cm × 横約 150cm の巨大な「北蝦夷地」(サハリン島)の地図になるものである。現在、日本国内に 10 例の存在が知られているが¹⁰、これで 11 例目となる。なお、No. 57・58 は、武四郎の著作ではなく、明治 8 年 (1875) にまとめられた読書室の蔵書目録、及び山本章夫の蔵品目録であるが、武四郎が贈呈した著作類が記載されていることから、ここに分類した。

最後に、③には、その他として、①②以外のものをまとめた。武四郎と山本読書室との交友という点では、No. 61 の「読書室物産会目録」が興味深い。先述した「読書室物産会」の出品目録であるが、武四郎も、上京こそしていないものの、文久 2 年 (1862) に「蝦夷ノシマ子ズミ 即鼯鼠」、「蝦夷ノハラテキ 即日光ノ赤沼ラン」、「蝦夷シヤリ海中産ノフレチ 即龍腸」の 3 件、文久 3 年 (1863) に「蝦夷ノシユサモ <魚名>」、「同ノイタヤ介」、「同ノエリモ介」の 3 件、慶応 2 年 (1866) に「東蝦夷山越内領トシヘツ川筋ノ方言クン子シユマ茶碗黒薬所用」、「西蝦夷テシホ川上ノ方言チエトイ 喰土ノ義ノ案石麩ノ類」の 2 件を出品している。いずれも、蝦夷地踏査の際に入手したものと思われる。

以上、「山本読書室資料」の調査を通じて確認した武四郎関係資料の概要について紹介してきた。蝦夷地踏査における自然系標本の蒐集活動、本草学関係者との交友の具体相など、武四郎と本草学との関わりについては未知の点が多い。“古物蒐集家”としての一面にて見られる熱心な“蒐集”癖が本草学の分野でも見られることは、武四郎の人物像を考える上で興味深い。今後、今回の調査成果をふまえ、さらに考察を深めていきたいと考えている。

¹ 松浦武四郎については、北海道博物館ほか編『幕末維新を生きた旅の巨人 松浦武四郎一見、集める、伝える一』(勝毎光風社、2018 年)及び同書所収の文献リストを参照のこと。

² 遠藤正治・松田清・益満まを「山本読書室門人名簿の分析と紹介」(『近世京都』第 1 号、近世京都学会、2014 年)

³ 日本歴史学会編『明治維新人名辞典』(吉川弘文館、1981 年)「山本鴻堂」の項を参照。以下、引用は同書に拠る。

⁴ 白石烈「孝明天皇紀」編纂資料の構造と来歴(『書陵部紀要』第 74 号、宮内庁書陵部、2023 年)

⁵ No. 8 の文中には「蝦夷地図ハ、御出之節御逢も被下候人ニ可有之哉、召抱候者ニ当国須川村之者ニ久しく召抱置候処、ゆへんありて立去、西国方日本國中不殘廻り、五年前方蝦夷三度わたり申候」(下線は引用者による)という一節がある。武四郎は、文政 13 年 (1830) から天保 4 年 (1833) にかけて、数え年で 13 歳から 16 歳の時に津の楽斎のもとで住み込みで学んでおり、この間に楽斎のもとを訪れた榕室と会っているのかもしれない。

⁶ 笹木義友編『新版松浦武四郎自伝』(北海道出版企画センター、2013 年)、42 頁。

⁷ 前掲『自伝』104 頁。

⁸ 前掲『自伝』107 頁。

⁹ 三浦泰之「東京大学史料編纂所蔵京都山本家宛て松浦武四郎書簡の写しについて」(『松浦武四郎研究会会誌』第 63 号、2012 年)

¹⁰ 高木崇世芝「松浦武四郎『北蝦夷山川地理取調図』の作成」(『松浦武四郎研究会会誌』第 80 号、2022 年)

【表1】京都市立京都市・歴彩館寄託 山本読書室資料にある松浦武四郎関係資料

①松浦武四郎書簡及び関係書簡

目録分類	目録番号	資料名	数量	年月日	備考
書籍・古文書類	2358.	〔包紙〕	1点	(明治期以降)	ウハ書「伊セ人松浦竹四郎 開拓使判官ノ亡洋門人」。2358.1～2358.6はこの包紙にて一括。18.7×26.0cm
書籍・古文書類	2358.1.	〔松浦武四郎書簡〕	1通	(文久元年) 9月8日	山本榕室宛て。幕府の御雇になった経緯や御雇としての踏査の概要のこと、腊葉350、360品などを持ち帰っていること、その後の執筆活動のこと、「フレチ」というものを送るので鑑定してほしい、近日上梓予定の知床日誌に先生の説を加えたい旨など。一節に「去秋右記行を少々ツ、上木仕候、…今便〔北蝦夷余誌〕一冊呈上仕候」とあり。16.1×131.5cm
書籍・古文書類	3908.	〔松浦武四郎書簡〕	1通	(文久2年) 正月20日	山本榕室宛て。敦賀の「蝦夷地産物会所」に出役で今回の「好便」を託した「箱館奉行支配定役板倉庄次郎」のこと、「フレチ之説妙々、則南岬誌え加入仕候」、「ウハユリの粉」や「赤沼蘭」などを呈上の旨など。一節に「今般後方羊蹄日誌上木仕候間一部呈上仕候」とあり。16.0×76.0cm
書籍・古文書類	182.	江戸松浦竹四郎来状	1綴	(文久2年) 2月5日	山本榕室宛て。江戸の「物産家」事情のこと、リクンカモイのこと、天塩日誌に挿みたいので大田垣蓮月に和歌を頼んでほしい旨など。一節に「只今十勝日誌と申もの刻シ居候、近日出来仕候、次二天塩日誌是者当月末頃二刻二懸リ申候」とあり。虫損あり。半紙4丁。24.2×17.2cm
書籍・古文書類	5616.	〔松浦武四郎書簡〕	1通	(文久2年) 3月15日	山本榕室宛て。石狩日誌・久摺日誌、「シマネツミ皮」大小5枚を呈上する旨、「ホイヌ」のこと、「帆立貝」などは近日届くので着次第差し上げる旨、天塩日誌に挿みたいので大田垣蓮月に和歌を頼んでほしい旨など。半紙3枚。24.3×34.5cm
書籍・古文書類	2358.3.	〔松浦武四郎書簡〕	1通	(文久2年) 6月20日	山本榕室宛て。上梓した十勝日誌と「エトヒリカ一疋」を、大坂の「蝦夷産物会所」に出役した「箱館定役元メ太田為之助」に託したので受け取ってほしい、「エトヒリカ」については「御説」を「御示し」くださる旨、「先達被仰聞候商人之一條」について太田為之助に掛け合っはどうかなど。半紙2枚。24.0×33.2cm
書籍・古文書類	2358.2.	〔松浦武四郎書簡〕	1通	(文久2年) 10月18日	山本榕室宛て。「アツケシ蛸」は届き次第差し上げる旨、「ふた附」の帆立貝1枚や、庭の「アメリカ種六月柿」などを差し上げた旨、中西耕石に画を頼んでほしい旨、「貴地も薩長土の浪人ます／＼群集之由」など。15.5×60.5cm
書籍・古文書類	2358.4.	〔松浦武四郎書簡〕	1綴	(文久2年) (12月)14日	太田為之助に向けて「蝦夷道中双六」を送ったので近日届く旨、中西耕石の画のお礼、知床日誌に挿みたいので香川景嗣に和歌を頼んでほしい旨、蝦夷地・北蝦夷地へのロシアの進出の話題など。一節に「今般夕張日誌製本二仕り候間、是者飛脚や便へ出申候」とあり。半紙4丁。24.7×17.2cm ※別稿(会誌第63号)で翻刻紹介した書簡写しの原本。
書籍・古文書類	5064.	〔松浦武四郎書簡〕	1通	(文久3年) 正月5日	山本榕室宛て。会津・一橋・長州・将軍家などの上洛のこと、徳川斉昭の子供たちのこと、塙次郎殺害の件、蝦夷地に「魯夷」が迫っていることを「一條家等」に「御話」くださる旨ほか。15.1×65.0cm
書籍・古文書類	2134.2.	〔松浦武四郎書簡〕	1通	(文久3年) 正月13日	山本榕室宛て。徳川斉昭の子供たちの履歴のこと(「先達而被仰聞候二附水戸表へ申聞遣し候処」という一節あり)、香川景嗣に和歌を頼んでほしい旨など。一節に「夕張日誌一部呈上仕候」とあり。16.8×84.0cm

	目録分類	目録番号	資料名	数量	年月日	備考
11	書籍・古文書類	3256.3.26	〔松浦武四郎書簡〕	1通	(文久3年) 6月15日	山本榕室宛て。納紗布日誌上梓の旨、「世の中の蘭学者と申者者恐ろしき物二而段々内通等も有之由二而国家如此災害二相成候可敷事二御座候」ほか。目録名称は「章夫・沈三郎他来簡」で、一括書簡群の内。16.1×57.1cm
12	書籍・古文書類	2134.40.	〔松浦武四郎書簡〕	1通	(文久4年) 正月4日	山本榕室宛て。「林大学頭様御上京」のこと、「阿部蔣翁」が「無人島」から帰府したことなど。一節に「御世話二成候知床日誌上木仕候間、一部呈上仕候」とあり。16.4×38.5cm
13	書籍・古文書類	2358.5.	〔松浦武四郎書簡〕	1通	(慶応元年) 9月12日	山本復一宛て。かつて「亡父様」からの注文で5年前に南部野辺地の役に頼んでいた「善知鳥」は今年7月に届いたが「いせ川喜田」に違わしてしまった、また届いたら「亡父様」の「牌前」に供えたい旨、東蝦夷日誌の初編と二編を呈上する旨、上梓した「糸ミし船の画」と歌のことなど。野辺地の場所を示す図と「糸ミし船の画」の縮図あり。15.8×130.5cm
14	書籍・古文書類	2358.6.	願用書	1通	(明治20年) 12月16日	山本復一宛て。知恩院の福田大教正の病の治療のために医師の紹介について依頼する旨。封紙あり。封紙の差出は「神田五軒町十五番地／松浦武四郎〔欠損〕」、宛先は「赤坂表二丁目九番地／山本復一様」。16.3×46.8cm
15	書籍・古文書類	2541.	〔松浦武四郎書簡〕	1通	(明治2年) 正月22日	大久保利通宛て。「奥羽脱走人」からも「旧幕帰順之者」からも忌まれているので1～2か月ほど上京したい旨、その場合は「東京府附属」を「御免」いただきたい旨、大木喬任や島義勇などの有司との関係のこと、最近の江戸の「暗殺」事件のことなど。16.0×102.5cm
16	書籍・古文書類	2419.22.12.	〔平松染斎書簡〕	1通	(嘉永3年) 7月9日	山本榕室宛て。「蝦夷地図一部」を添えて「久しく召抱置候処ゆへんありて立去、西国日本国中不残廻り、五年前が蝦夷三度わたり申候」などと武四郎のことを紹介する旨あり。16.0×80.0cm
17	書籍・古文書類	3619.1	急務策一則〔写〕	1通	(嘉永6年)	筆者署名に「長門吉田寅次郎矩方」とあり。吉田松陰の尊王攘夷に関する意見書の写し。末尾に「嘉永六年丑十月念四 裕室山本錫夫写」と墨書あり。武四郎が京都に携えてきたものを写す。野紙3丁分。25.4×17.3cm。3619.1と3619.2は袋綴じにて合綴
18	書籍・古文書類	3619.2	藪圃和牘〔写〕	1通	(嘉永6年) 8月晦日	差出に「藪圃拝」、宛先に「松浦文契」とあり。仙台藩の新井雨窓の武四郎宛て書簡の写し。末尾に「嘉永六年十月念五 裕室山本錫夫写」と墨書あり。武四郎が京都に携えてきたものを写す。八月十八日の政変の絵図の添付あり。野紙6丁分。25.4×17.3cm
19	書籍・古文書類	2484.	〔岩村通俊書簡〕	1通	(明治2年) 10月16日	松浦武四郎ほか2名宛て。文中に「請負之名目は出張否御座相成候得共其名実共相行ハれ候義何分六ツヶ敷、依而者先づ断然与親泉ハ引揚可申心得二而其手管相付、最早四、五日間二者相達可申胸算二御座候」という一節あり。折畳み12.7×6.1cm
20	書籍・古文書類	5014.34.	〔山本復一書簡〕	1通	(明治11年か) 12月21日	山本章夫宛て。「亡羊先生」関係の「目録」出版の構想について。「上巻」に「知恩院僧正」から序文を寄稿してもらった構想に関して、文中に「知恩院僧正ハ松浦懇意ニ付何時テモ文章ヲ同人ヲ頼ムトノコト」という一節あり。追啓と「目録」構成案の別紙あり。16.1×102.5cm
21	書籍・古文書類	2379.29. (37)	〔山本章夫書簡〕	1通	(明治16年) 5月2日	封筒入り。山本章夫(京都油小路五条上町)→山本復一様(東京麹町区宝田町3番地岩倉家邸内)。文中に「松浦武四郎先頃畑氏へ再宿致油小路へ者不沙汰、九州より引取掛二ハ是非一訪可致旨被申居候由、武四郎より畑へ嘶有之候由…」という一節あり。目録名称は「山本章夫」で、一括書簡群の内。封筒19.5×7.0cm

	目録分類	目録番号	資料名	数量	年月日	備考
22	書籍・古文書類	2379.19.	〔巖谷一六書簡〕	1通	(明治期)	山本復一宛て。文中に、具体的なことは不詳ながら「松浦翁之事御同慶二候」とあり。16.7×46.5cm

②松浦武四郎著作

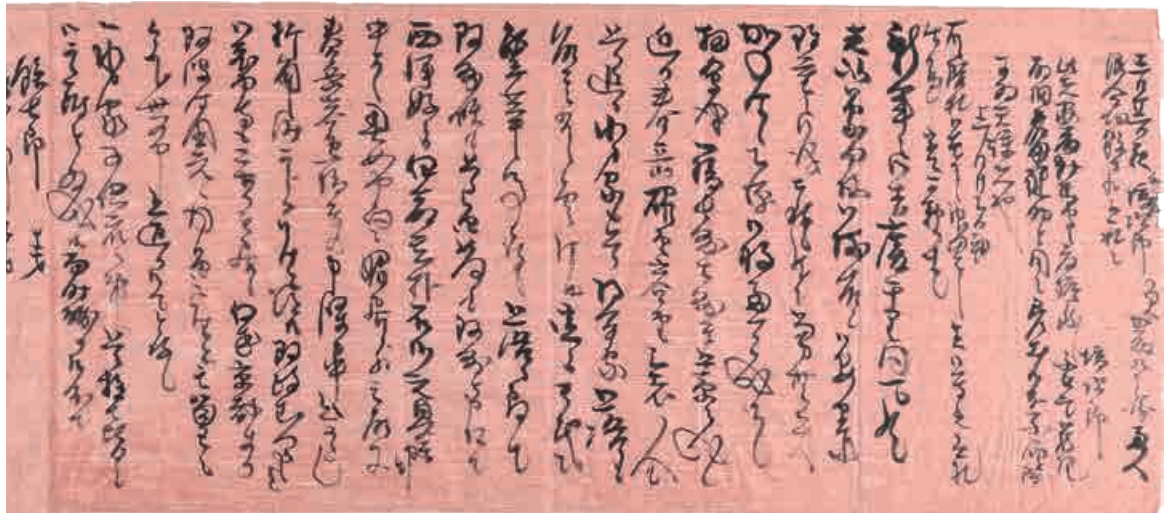
	目録分類	目録番号	資料名	数量	年月日	備考
23	書籍・古文書類	3120.	亡羊先生の行状一則	1通	明治12年 冬の中つころ	武四郎自筆。包紙あり。ウハ書「亡羊先生の行状一則」。罫紙。24.0×34.0cm
24	書籍・古文書類	4548.	東西蝦夷山川地理取調図 首巻・一〜廿六・尾巻	29鋪	安政6年刊	地図の巻には、題箋や地図四隅に並べる時のための符号(墨書)あり。全体的に虫損大。首・尾はそれぞれ2巻ずつあり。表紙寸は①18.6×9.9、②17.9×9.9で、小さいほうの首・尾には凡例部分もしくは題箋に蔵書印(朱文方印「溪山」)あり。地図表紙18.6×10.2cm
25	書籍・古文書類	4865.	東西蝦夷山川地理取調図 首	1冊	安政6年刊	表紙18.0×9.9cm
26	書籍・古文書類	4865.	東西蝦夷山川地理取調図 尾	1冊	安政6年刊	表紙18.0×9.9cm
27	書籍・古文書類	2382.52.1	〔封筒〕	1点	(明治期以降)	ウハ書(表)「〔朱書〕「卅一号」故開拓判官松浦弘自筆/北海道地図十八枚」、(裏)「朱文方印」〔印文に「西京/寺町今出川下ル/真如堂突抜町/山本復一」〕。目録名称は「〔封筒〕(北海道地図)」。32.5×14.5cm
28	書籍・古文書類	2382.52.2	〔北蝦夷山川地理取調図 一〕	1鋪	(江戸後期)	武四郎自筆。着色。裏面に付箋貼付あり。ウハ書(武四郎自筆)「経七度/緯四十六度 一卷」。目録名称は「(北海道地図一卷)」。50.4×37.2cm
29	書籍・古文書類	2382.52.3	〔北蝦夷山川地理取調図 二〕	1鋪	(江戸後期)	武四郎自筆。着色。裏面に付箋貼付あり。ウハ書(武四郎自筆)「経八度/緯四十六度 二巻」。目録名称は「(北海道地図二巻)」。50.3×37.2cm
30	書籍・古文書類	2382.52.4	〔北蝦夷山川地理取調図 三〕	1鋪	(江戸後期)	武四郎自筆。着色。地図に飛び出し部分あり。裏面に付箋貼付あり。ウハ書(武四郎自筆)「経九度/緯四十六度 三巻」。目録名称は「(北海道地図三巻)」。57.5×37.3cm
31	書籍・古文書類	2382.52.5	〔北蝦夷山川地理取調図 四〕	1鋪	(江戸後期)	武四郎自筆。着色。裏面に付箋貼付あり。ウハ書(武四郎自筆)「経八度/緯四十七度 四巻」。目録名称は「(北海道地図四巻)」。50.3×37.2cm
32	書籍・古文書類	2382.52.6	〔北蝦夷山川地理取調図 五〕	1鋪	(江戸後期)	武四郎自筆。着色。裏面に付箋貼付あり。ウハ書(武四郎自筆)「経九度/緯四十七度 五巻」。目録名称は「(北海道地図五巻)」。50.0×37.3cm
33	書籍・古文書類	2382.52.7	〔北蝦夷山川地理取調図 六〕	1鋪	(江戸後期)	武四郎自筆。着色。地図に飛び出し部分あり。裏面に付箋貼付あり。ウハ書(武四郎自筆)「経八度/緯四十八度 六巻」。目録名称は「(北海道地図六巻)」。50.1×44.6cm
34	書籍・古文書類	2382.52.8	〔北蝦夷山川地理取調図 七〕	1鋪	(江戸後期)	武四郎自筆。着色。裏面に付箋貼付あり。ウハ書(武四郎自筆)「経十度/緯四十八度 七巻」。目録名称は「(北海道地図七巻)」。50.0×37.3cm
35	書籍・古文書類	2382.52.9	〔北蝦夷山川地理取調図 八〕	1鋪	(江戸後期)	武四郎自筆。着色。裏面に付箋貼付あり。ウハ書(武四郎自筆)「経八度/緯四十九度 八巻」。目録名称は「(北海道地図八巻)」。50.2×37.4cm
36	書籍・古文書類	2382.52.10	〔北蝦夷山川地理取調図 九〕	1鋪	(江戸後期)	武四郎自筆。着色。裏面に付箋貼付あり。ウハ書(武四郎自筆)「経九度/緯四十九度 九巻」。目録名称は「(北海道地図三巻)」。50.3×37.4cm
37	書籍・古文書類	2382.52.11	〔北蝦夷山川地理取調図 十〕	1鋪	(江戸後期)	武四郎自筆。着色。裏面に付箋貼付あり。ウハ書(武四郎自筆)「経十度/緯四十九度 十巻」。目録名称は「(北海道地図十巻)」。50.3×37.2cm

	目録分類	目録番号	資料名	数量	年月日	備考
38	書籍・古文書類	2382.52.12	〔北蝦夷山川地理取調図十一〕	1 鋪	(江戸後期)	武四郎自筆。着色。裏面に付箋貼付あり。ウハ書(武四郎自筆)「経八度/緯五十度 十一巻」。目録名称は「(北海道地図十一巻)」。50.0 × 37.3cm
39	書籍・古文書類	2382.52.13	〔北蝦夷山川地理取調図十二〕	1 鋪	(江戸後期)	武四郎自筆。着色。裏面に付箋貼付あり。ウハ書(武四郎自筆)「経九度/緯五十度 十二巻」。目録名称は「(北海道地図十二巻)」。50.0 × 37.2cm
40	書籍・古文書類	2382.52.14	〔北蝦夷山川地理取調図十三〕	1 鋪	(江戸後期)	武四郎自筆。着色。裏面に付箋貼付あり。ウハ書(武四郎自筆)「経八度/緯五十一度 十三巻」。目録名称は「(北海道地図十三巻)」。50.0 × 37.4cm
41	書籍・古文書類	2382.52.15	〔北蝦夷山川地理取調図十四〕	1 鋪	(江戸後期)	武四郎自筆。着色。裏面に付箋貼付あり。ウハ書(武四郎自筆)「経九度/緯五十一度 十四巻」。目録名称は「(北海道地図十四巻)」。50.0 × 37.5cm
42	書籍・古文書類	2382.52.16	〔北蝦夷山川地理取調図十五〕	1 鋪	(江戸後期)	武四郎自筆。着色。裏面に付箋貼付あり。ウハ書(武四郎自筆)「経八度/緯五十二度 十五巻」。目録名称は「(北海道地図十五巻)」。50.3 × 37.4cm
43	書籍・古文書類	2382.52.17	〔北蝦夷山川地理取調図十六〕	1 鋪	(江戸後期)	武四郎自筆。着色。裏面に付箋貼付あり。ウハ書(武四郎自筆)「経九度/緯五十二度 十六巻」。目録名称は「(北海道地図十六巻)」。50.0 × 37.3cm
44	書籍・古文書類	2382.52.18	〔北蝦夷山川地理取調図十七〕	1 鋪	(江戸後期)	武四郎自筆。着色。裏面に付箋貼付あり。ウハ書(武四郎自筆)「経九度/緯五十三度 十七巻」。目録名称は「(北海道地図十七巻)」。50.2 × 37.4cm
45	書籍・古文書類	2382.52.19	〔北蝦夷山川地理取調図十八〕	1 鋪	(江戸後期)	武四郎自筆。着色。裏面に付箋貼付あり。ウハ書(武四郎自筆)「経九度/緯五十四度 十八巻」。目録名称は「(北海道地図十八巻)」。50.0 × 37.4cm
46	書籍・古文書類	4930.	蝦夷圏境山川地理取調大概図	1 鋪	万延元年刊	虫損甚大、開披不能。表紙 19.2 × 11.0cm
47	書籍・古文書類	3048.4.	新板箱館道中名所寿語六	1 点	文久4年刊	破損大。包紙あり。ウハ書「松浦多気四郎/箱館道中名所双六」。36.0 × 74.5cm
48	書籍・古文書類	1439.	北海道国郡全図	1 鋪	明治2年刊	虫損大。黄色表紙。題簽下部に朱文方印「溪山」。賛は、伊達宗城、鍋島直正、東久世通禧の3点揃い。凡例末尾に「明治二己巳晩秋/松浦武四郎阿部弘/謹誌」。表紙 25.6 × 17.9cm
49	書籍・古文書類	658.a	尚古杜多	1 冊	明治12年刊	高松舩洲の題詞あり。表紙 13.4 × 9.1cm
50	書籍・古文書類	658.b	庚辰游記	1 冊	明治13年刊	虫損大。表紙左上に「ゆしま/山本様」と武四郎自筆の付箋貼付あり。表紙右上に熨斗貼付あり。表紙 13.6 × 9.6cm
51	書籍・古文書類	658.c	癸未溟志	1 冊	明治16年刊	楊守敬の題詞あり。表紙右下に「復一」の朱文丸印あり。表紙 15.2 × 10.2cm
52	書籍・古文書類	658.c	癸未溟誌	1 冊	明治16年刊	福田行誠の題詞あり。表紙 15.2 × 10.2cm
53	書籍・古文書類	658.d	甲申小記	2 冊	明治17年刊	1冊目の表紙右下に「復一」の朱文丸印あり。2冊目の表紙右上に熨斗貼付あり。各表紙 15.3 × 10.2cm
54	書籍・古文書類	658.e	乙酉掌記	1 冊	明治18年刊	表紙 15.3 × 9.4cm
55	書籍・古文書類	658.f	丁亥後記	1 冊	明治20年刊	表紙 15.3 × 10.2cm
56	書籍・古文書類	4940.	松のけふり	1 冊	明治13年刊	虫損大。表紙 12.8 × 9.4cm
57	書籍・古文書類	1059.	読書室蔵書目録 明治乙亥改正	1 冊	明治8年	山本章夫編。「一函」~「百三十函」まで。「六十五函」に「東蝦夷日誌二冊」など、武四郎の刊行本あり。表紙 23.1 × 16.4cm

	目録分類	目録番号	資料名	数量	年月日	備考
58	書籍・古文書類	1462	海紅亭蔵書画目録	1冊	(明治期)	山本章夫の蔵品目録。「北海道国郡図 一冊 松浦氏所贈」の記載あり。冊子。表紙 13.1 × 18.5cm

③その他

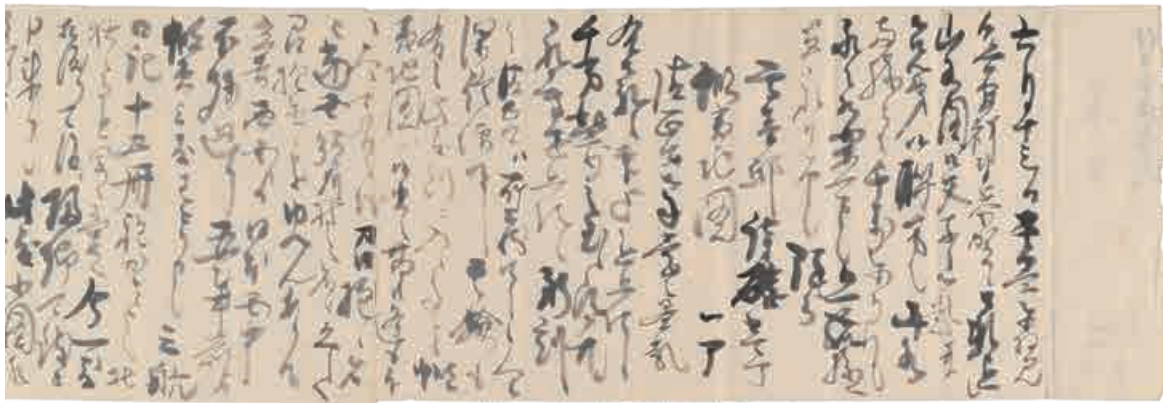
	目録分類	目録番号	資料名	数量	年月日	備考
59	絵画	A032.110	(蝦夷方言シユサモの図)	1点	(江戸後期)	干物と考えられるシヤモの図。上部に「蝦夷方言シユサモ」として説明文があり、その末尾に「右松浦竹四郎来状ノ文」とあり。目録名称は「蝦夷方言シユサモ」。27.9 × 40.9
60	書籍・古文書類	2134.10	質叩之條 (蝦夷・樺太産品に付)	1通	(江戸後期)	山本榕室筆か。蝦夷地・樺太の動植物などの解説。典拠文献として「北蝦夷余誌」「石狩日誌」などが挙げられている。文中に「松浦氏より申越二付加筆仕候」などの朱書書き込みあり。目録名称は「質叩之條(蝦夷・樺太産品に付)」。16.6 × 206.5cm
61	書籍・古文書類	2363.	読書室物産会目録 自第一号至第五十号〔一括〕	1括	文化5年～慶応3年	横帳。「〔朱書〕「四十九」慶応二年五月廿日物産会目録」(表紙 11.2 × 28.4)に「江戸松浦竹四郎」の出品として「東蝦夷山越内領トシヘツ川筋ノ方言クン子シユマ茶碗黒業所用」「西蝦夷テシホ川上ノ方言チエトイ 喰土ノ義ノ案石麩ノ類」とあるなど、武四郎の出品も見える
62	書籍・古文書類	1694	文久二年 日省簿	1冊	文久2年	山本榕室の日記(京都)。同年2月26日条に「松浦武四郎寄書シリヘシ日誌」など、武四郎関連の記述あり。縦帳。表紙 23.5 × 16.7cm
63	書籍・古文書類	2861	明治六年八月一日ヨリ 鴻堂日記	1冊	明治6年8月～12月	山本復一の日記(東京)。同年9月21日条に「松浦武四郎来」など、武四郎関連の記述あり。縦帳。表紙 24.1 × 15.7cm
64	書籍・古文書類	1514.2	九思堂日記 二	1冊	嘉永5年11月～安政元年11月	山本章夫の日記(京都)。嘉永6年10月13日条に「長兄還家、勢州松浦竹四郎来」という一節あり。縦帳。表紙 24.2 × 16.2cm
65	書籍・古文書類	769.	海紅亭日録 退隠後	1冊	明治2年7月～15年7月	山本章夫の日記。章夫が東京で博覧会事務局に出仕していた時期の明治5年4月20日条に「松浦武四郎ヲ訪フ」、京都に戻って以降の明治8年5月31日条に「松浦武四郎来ル」など、武四郎関連の記述あり。虫損大。縦帳。24.8 × 16.2cm
66	書籍・古文書類	4456	日記 明治十七年三月	1冊	明治17年3月～21年10月	山本章夫の日記(京都)。明治17年5月8日条に「松浦武四郎来」など、武四郎関連の記述あり。縦帳。表紙 23.5 × 15.3cm
67	書籍・古文書類	2717.	(松浦武四郎墓碑拓本)	1点	(明治21年12月)	武四郎の墓碑4面それぞれの拓本。「教光院…」。帯封にて4点一括。ウハ書「松浦竹四郎碑ノ山本復一蔵ノ〔朱文方印〕〔印文に「鴻堂」〕。目録名称は「松浦竹四郎碑 拓本」。135.0 × 48.0cm
68	書籍・古文書類	2717.	(松浦武四郎墓碑拓本)	1点	(明治21年12月)	武四郎の墓碑4面それぞれの拓本。「君諱弘…」。133.0 × 48.0cm
69	書籍・古文書類	2717.	(松浦武四郎墓碑拓本)	1点	(明治21年12月)	武四郎の墓碑4面それぞれの拓本。「山等交誼…」。134.0 × 48.0cm
70	書籍・古文書類	2717.	(松浦武四郎墓碑拓本)	1点	(明治21年12月)	武四郎の墓碑4面それぞれの拓本。「誌三十六…ノ明治二十一年十二月市河三兼撰并書 男松浦一雄建石ノ下田喜成刻」。138.0 × 48.5cm
71	書籍・古文書類	5291.4.	毎日講座 松浦武四郎と大台原山 (一)	1点	大正6年9月9日～	新聞記事切り抜き。副題は「=大台原山の名山たる所以=ノ理学博士白井光太郎の説」。欄外右に「大正六年九月九日」と鉛筆書きあり。21.4 × 40.3cm
72	書籍・古文書類	5291.5.	毎日講座 松浦武四郎と大台原山 (二)	1点		新聞記事切り抜き。21.8 × 40.6cm
73	書籍・古文書類	5291.6.	毎日講座 松浦武四郎と大台原山 (三)	1点		新聞記事切り抜き。21.8 × 40.3cm



No.9 〔松浦武四郎書簡〕(部分)



No.13 〔松浦武四郎書簡〕(部分)



No.16 〔平松樂斎書簡〕 (部分)



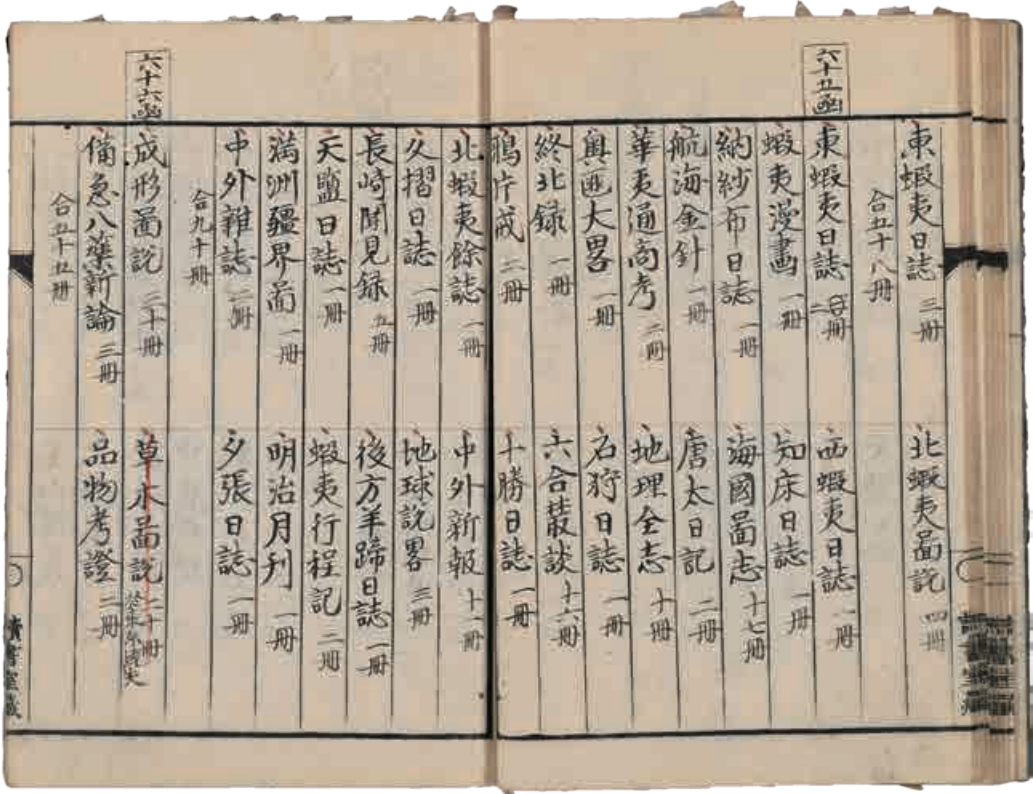
右：No.17 急務策一則〔写〕 (部分) 左：No.18 蕃圃和牘〔写〕 (部分)



No.29 [北蝦夷山川地理取調図 二]



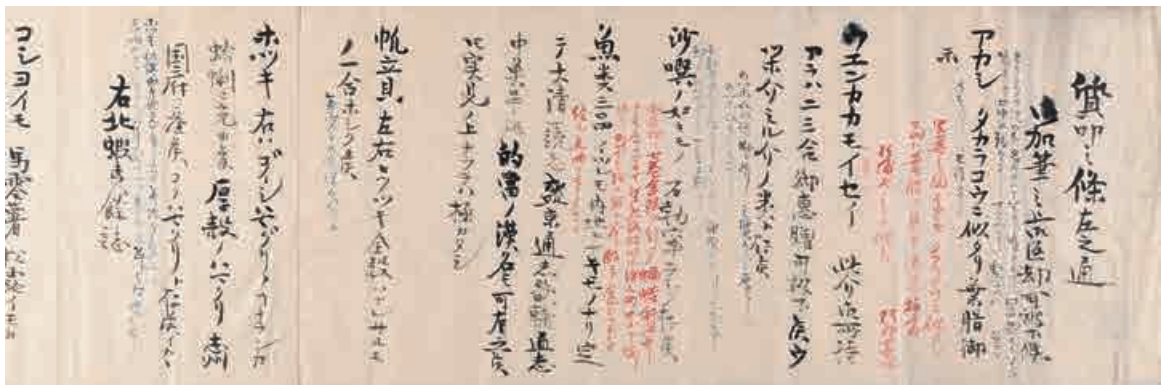
No.23 亡羊先生の行状一則



No.57 読書室蔵書目録 明治乙亥改正 (部分)



No.59 〔蝦夷方言シユサモの図〕



No.60 質叩之條〔蝦夷・樺太産品に付〕(部分)

令和5年度 日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究C 課題番号 21KK01002
(研究代表：内川隆志)

人文資料形成史における博物館学的研究 Ⅲ

－ 根岸友山・武香旧蔵資料の研究と公開 －

令和6年2月28日発行

編集 内川隆志

連絡先 〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

國學院大學博物館学研究室 03(5466)0249

印刷 株式会社 秀飯舎

